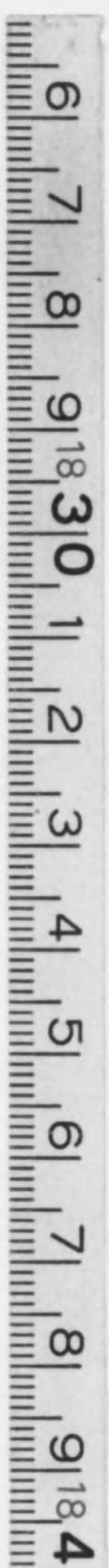


353
994



始



開校先達遺稿
編次川和守
科學叢書
本館發行

科學叢書

特236
485

長崎醫科大學講師 菊池清先生校閱

九州鍼灸學校校長 宇和川義瑞 著
九州鍼灸學校講師 竹原保雄校補



灸學教科書第貳卷

發行所 九州鍼灸學校出版部



解剖學編下卷目次

第四款 內臟學	三	細腸	三
第一章 內臟學總論	三	四腸管	三
第二章 內臟學各論	三	A 小腸	三
甲 消化器	三	B 大腸	三
(一) 口腔	三	丙 肝臟	三
(1) 口腔前庭	三	○ 膽囊	三
○ 齒牙	三	乙 呼吸器	三
(2) 固有口腔	三	(一) 喉頭	三
A 舌	三	(1) 喉頭ノ軟骨	三
B 口腔粘液膜	三	△ 無刈軟骨	三
C 唾液腺	三	B 有刈軟骨	三
(二) 咽頭	三	(2) 喉頭ノ韌帶及筋肉	三
○ 食管	三	(三) 氣管及氣管枝	三

(1)

○肺 臟	三三
○肋 膜 (胸膜)	三三
丙 泌 尿 器	三三
(一) 腎 臟	三三
(二) 輸 尿 管	三三
(三) 膀 胱	三三
(四) 尿 道	三三
A 男 子 尿 道	三三
B 女 子 尿 道	三三
丁 生 殖 器	三三
(陽) 男 子 生 殖 器	三三
(一) 副 睾 丸	三三
(二) 輸 精 管	三三
(三) 精 囊	三三
(四) 射 精 管	三三

(四) 尿 道 殖 腺 (コルヘル氏腺)	三三
○ 辜 丸 ノ 被 膜	三三
○ 精 系	三三
○ 辜 丸 下 行	三三
(一) 陰 莖	三三
(二) 尿 道	三三
(陰) 女 子 生 殖 器	三三
(一) 子 宮 喇 叭 管 (輸 卵 管)	三三
(二) 子 宮	三三
(三) 陰 道	三三
(四) 大 陰 唇	三三
(五) 小 陰 唇 及 陰 前 庭	三三
(六) 陰 核	三三
○ 乳 房	三三
○ 會 陰	三三

○ 腹 膜	三三
第五款 內 分 泌 腺 學	三三
第一章 內 分 泌 腺 學 總 論	三三
第二章 內 分 泌 腺 學 各 論	三三
(一) 松 果 腺	三三
(二) 垂 下 垂 體	三三
(三) 甲 狀 腺	三三
(四) 上 肢 小 腺 (副 甲 狀 腺)	三三
(五) 腎 臟	三三
(六) 脾 臟	三三
(七) 副 腎	三三
(八) 辜 丸	三三
(九) 漿 液 腺	三三
(十) 卵 巢	三三

(五) 尾 圓 骨 腺	三三
(五) 頸 動 脈 腺	三三
第六款 感 覺 器 學	三三
第一章 感 覺 器 學 總 論	三三
第二章 感 覺 器 學 各 論	三三
甲 觸 覺 器	三三
(一) 皮 膚 ノ 附 屬 器	三三
A 皮 膚 ノ 腺	三三
B 毛 髮	三三
C 爪	三三
乙 嗅 覺 器	三三
丙 視 覺 器	三三
(一) 眼 ノ 守 護 器 官	三三
(二) 淚 腺	三三
丁 味 覺 器	三三

戊 震 器	四
(一) 外耳	四
(二) 中耳	三
(三) 内耳	三
第七款 脉管學	四
第一章 脉管學總論	四
第二章 脉管學各論	三
第一節 心臟	三
(一) 心臟ノ各部	三
A 房	三
B 室	三
(二) 心臟ノ壁	三
(三) 心臟ノ位置	三
第二節 動脈及靜脈	三
第三節 動脈	三
甲 肺循環ノ動脈	三
肺動脈	三
乙 身體循環ノ動脈	三
大動脈	三
第一 上行大動脈	三
第二大動脈弓	三
(一) 總頸動脈	三
(二) 外頸動脈	三
○ 前枝	三
○ 後枝	三
○ 內枝	三
○ 終枝	三
(二) 内頸動脈	三
○ 三大枝	三
○ 四小枝	三

(二) 鎖骨下動脈	三
○ 枝別	三
○ 四小枝	三
(一) 腋窩動脈	三
(二) 上臂動脈	三
(三) 腕骨動脈	三
○ 前膊部ノ枝別	三
○ 手背部ノ枝別	三
○ 手掌ノ二終枝	三
(4) 尺骨動脈	三
○ 終枝	三
○ 手掌ノ動脈弓	三
○ 動脈網	三
(2) 腕骨掌側動脈網	三
(3) 腕骨背側動脈網	三
(一) 肘關節動脈網	三
(2) 肩峰動脈網	三
第三 下行大動脈幹	三
(一) 胸部大動脈幹	三
(二) 腹部大動脈幹	三
(1) 體壁枝	三
有 刃	三
(2) 内臟枝	三
無 刃	三
有 刃	三
(三) 總腸骨動脈	三
(一) 内腸骨動脈	三
○ 體壁枝	三
○ 内臟枝	三
○ 終枝	三

○ 外腸骨動脈	三〇	○ 脊柱 = 於ケル靜脈叢	三三
○ 股動脈	三〇	○ 體壁枝	三三
○ 膝關節動脈	三〇	○ 內臟枝	三三
○ 前脛骨動脈	三〇	○ 門靜脈	三三
○ 後側 = 於ケル枝別	三〇	○ 總腸骨靜脈	三三
○ 前側 = 於ケル枝別	三〇		
○ 終枝	三〇		
○ 後脛骨動脈	三〇		
○ 終枝	三〇		
○ 足蹠ノ動脈弓	三〇		
○ 膝關節動脈弓	三〇		
○ 膝關節靜脈	三〇		
○ 肺循環靜脈	三〇		
○ 身體循環靜脈	三〇		
○ 第一心藏靜脈	三〇		

○ 小腦ノ構成	三三	○ 小腦ノ構成	三三
○ 菱形窩	三三	○ 菱形窩	三三
○ 中腦 <small>(シルクウ平一氏導水管)</small>	三三	○ 中腦 <small>(シルクウ平一氏導水管)</small>	三三
○ 前腦 <small>(現神經床第三腦室)</small>	三三	○ 前腦 <small>(現神經床第三腦室)</small>	三三
○ 終腦 <small>(半球側腦室)</small>	三三	○ 終腦 <small>(半球側腦室)</small>	三三
○ 腦脊髓膜	三三	○ 腦脊髓膜	三三
○ 第二神經末梢	三三	○ 第二神經末梢	三三
○ 甲腦神經	三三	○ 甲腦神經	三三
○ 第一対 嗅神經	三三	○ 第一対 嗅神經	三三
○ 第二対 視神經	三三	○ 第二対 視神經	三三
○ 第三対 動眼神經	三三	○ 第三対 動眼神經	三三
○ 第四対 滑車神經	三三	○ 第四対 滑車神經	三三
○ 第五対 三叉神經	三三	○ 第五対 三叉神經	三三
○ 第六対 外流神經	三三	○ 第六対 外流神經	三三

第七对 顏面神經	五
第八对 聽神經	六六
第九对 舌咽神經	六六
第十对 迷走神經	六三
第十一对 副神經	六三
第十二对 舌下神經	六三
乙 脊髄神經	六三
(一) 頸椎神經	六三
(1) 上頸叢	六三
(2) 下頸叢	六三
(三) 背椎神經	六三
(四) 腰椎神經	六三
(五) 薦神經叢	六三

(四) 薦骨神經	六三
○ 薦骨神經叢	六三
(四) 尾閥骨神經	六三
第二節 交感神經系統(植物性神經系統)	六三
第一 中樞部	六三
第二 末梢部	六三

解剖學編下卷目次終

生理學編下卷目次

第十一章 動物溫生理	三二
第一節 同溫動物及夜溫動物	三二
第二節 溫感、發生	三二
第三節 溫感、輸出	三三
第四節 人類、体温	三三
第五節 中等体温、變動	三三
第六節 体温、調節	三三
第十二章 生殖及發育生理	三二
第一節 男子、懷春期	三三
第二節 精液	三三
第三節 精液、各成分	三三
第四節 女子、懷春期	三六
第五節 月經	三三

第六節 卵細胞及排卵機能	三三
第七節 月經、排卵機能、關係	三三
第八節 月經、閉止期及更年期	三三
第九節 喇叭管、機能	三三
第十節 子宮及腔粘液	三三
第十一節 陰莖勃起	三三
第十二節 射精	三三
第十三節 交接及受精作用	三三
第十四節 胚葉發育狀態	三三
第十五節 妊娠	三三
第十六節 分娩及產褥	三三
第十七節 乳汁、分泌	三三
第十三章 運動生理	三三

甲 運動生理總論	頁
第一節 筋ノ構造	三〇
第二節 筋ノ化學的灰介	三〇
第三節 筋ノ興奮	三一
A 筋肉興奮ノ化學的機轉	三一
B 筋肉興奮ノ物理的機轉	三二
第四節 筋ノ興奮性及興奮並制斂	三三
第五節 筋ノ死因及死因	三四
乙 運動生理各論	三五
第一節 骨及關節ノ運動	三五
第二節 筋ノ張力作用	三六
第三節 身體ノ振盪的位置	三六
A 直立	三六
B 坐位	三七
C 歩行	三八
D 走行	三八
E 跳躍	三九
第四節 運動ノ身體及精神ニ及ボス影響	三九
第五節 顔面筋ノ表情運動	三九
第六節 音聲及言語	四〇
第一聲 音	四〇
第二 聲音ノ高下強弱ニ關スル語氣ノ狀態	四一
第三 聲音ノ音色	四二
第四 聲音ノ限界	四三
第五 言語	四三
A 吐 音	四三
B 子 音	四三
第十四章 神經生理	四三
甲 神經生理總論	四三
第一節 神經系統ノ構造及機能理論	四三

第二節 神經ノ新陳代謝	四四
第三節 神經ノ興奮性及制斂	四五
第四節 神經興奮ノ傳導	四六
第五節 神經ノ傳導速度	四六
第六節 神經ノ電壓性質	四七
第七節 神經興奮傳導ノ規律	四八
第八節 神經纖維ノ傳導方向	四八
第九節 神經纖維ノ構造及生理	四九
第十節 神經細胞ノ機能	五〇
乙 中樞神經系統生理	五一
○ 腦生理	五一
第一節 大 腦	五一
第二節 小 腦	五二
第三節 延 髓	五三
A 自動中樞	五三
B 反射中樞	五三
第四節 線 球 體	五四
第五節 四 疊 體	五五
第六節 腦 脊 液	五七
第七節 睡眠及夢	五七
○ 脊髓生理	五八
第一節 脊髓ノ反射作用	五八
第二節 脊髓ノ神經中樞	五九
第三節 脊髓ノ傳導	五九
A 運動性回路	五九
B 知覚性回路	六〇
丙 不特異性系統生理	六一
第一節 腦神經系統	六一
一 視神經(感覺)	六一
二 視神經(感覺)	六一

三 動眼神經 (運動)	三〇	二 腰部自律神經纖維	三九
四 滑車神經 (運動)	三一	肝 腦脊髓液	四〇
五 三叉神經 (知覺及運動)	三二	第十五章 皮膚生理	四一
六 外展神經 (運動)	三三	第一節 身體保護作用	四二
七 顏面神經 (運動)	三四	第二節 皮膚ノ吸收作用	四三
八 聽神經 (知覺)	三五	第三節 皮膚ノ知覺及呼吸	四四
九 舌咽神經 (運動及知覺)	三六	第四節 汗	四五
十 迷走神經 (運動及知覺)	三七	第五節 毛 髮	四六
十一 副神經 (運動)	三八	第六節 皮膚ノ分泌	四七
十二 舌下神經 (運動)	三九	第十六章 感覺生理	四八
第十三節 脊髓神經系統	四〇	概論	四九
第十四節 自律神經系統	四一	第一節 視 覺	五〇
A 交感神經系統	四二	一 正視眼及不正視眼	五一
B 副交感神經系統	四三	二 眼ノ調節作用	五二
第十四節 頭部自律神經纖維	四四	三 眼内現象	五三

四 虹彩膜ノ機能	四六	第十三節 味 覺	五五
五 兩 眼 視	四七	一 味覺ノ適形刺激及味ノ種類並ニ銳敏度	五六
六 網膜ノ興奮即光覺	四八	第十四節 知 覺	五七
七 光覺ニ及ボス諸種ノ影響	四九	一 皮膚感覺	五八
八 色學說	五〇	A 圧 覺	五九
九 色 盲	五一	B 温度感覺	六〇
十 視 野	五二	C 痛 感	六一
十一 眼系ノ運動	五三	D 部位感覺	六二
十二 眼ノ保護裝置	五四	二 臟器知覺	六三
十三 眼内ノ血漿及淋巴循環	五五	第十五節 聽 覺	六四
第十四節 嗅 覺	五六	一 耳 翼	六五
一 嗅覺ノ適形刺激及其刺激度	五七	二 外聽道	六六
二 嗅覺ノ旅行及香ノ介類	五八	三 鼓 膜	六七
三 香ノ調節	五九	四 聽 骨	六八
第十五節 理由即作用	六〇	五 ヨウスタク氏管	六九

六 內耳ノ音響傳導	三六
七 音響ノ高低及距離	三六
八 三半規管ノ機能	三六
九 騒音ノ感覺	三六
十 音感覺ノ疲勞	三六

生理學編下卷目次終

近世鍼灸學教科書 第二卷

長崎医科大学 蒲池 清 先生 校閱

長崎医科大学 宇和川 義 著

又長崎医科大学 菅 原 保 校補

解剖學編 下卷

第四款 內臟學

第一章 內臟學總論

內臟學トハ身體ノ內部ニ位スル處ノ數多ク、所謂內臟ニ就テ其位置及構造等ヲ (303)

論究スルノ学科ナリ然レドモ本論ニ於テハ只ダ消化器、呼吸器及生殖器ノ三系
統ヲ論究スルニ止メテ、腦脊髄ハ神經幹ニ、諸器官ハ感覺器幹等ニ、新ニ講述ス
ルトコロアラントス。

而シテ前述ノ三系統ニ屬スル内臓器ハ、内部ノ充實シテ腔洞ヲ有セザルモノト
内部ニ腔隙ヲ造リテ内腔ヲ形成スル、膜管性内臓トノ二種ニ大別スルコトヲ得
ベシ。

(一)内腔ヲ有スル内臓 膜管性内臓ハ多ク左ノ腔ヨリ構成セラレ。

(A)粘液膜 ハ主トシテ上皮及結締織ヨリ構成セラレ、上皮ハ粘液膜ノ表面ヲ被
覆シ、各臓器ノ異ナルニ從ヒテ、其形状ノ配列ヲ異ニス、又結締織ナルハ、維
維性ニシテ、粘液膜ノ基質即固有粘液膜ヲ形成ス、結締織ノ上皮ト相接スル處
ニ、平滑無織ノ薄膜アリ、之ヲ基礎膜ト云フ。又基礎膜ト其下層即粘液膜下組
織トノ向ニ、滑平筋層即粘液膜筋層ヲ見ルコトアリ、而シテ基礎膜中ニハ神經
血管、細枝及不定數ノ白血球ヲ含有ス。粘液膜ヲ大別シテ二種トナス。即呼吸
消化器系統ノ粘液膜及泌尿生殖器系統ノ粘液膜是ナリ、甲ハ口腔、唾液腺、咽
頭腔、喉頭腔、目、咽頭管、鼓室及其副腔、眼腔ノ内面及眼球ノ前面、淚管、

鼻淚管、喉頭、気管、肺臟中ニ於ケル小枝、食管、胃、腸、膀胱、陰管、陰囊
等ヲ被ヒ、乙ハ主トシテ泌尿器及生殖器ノ排泄管ヲ被フ。

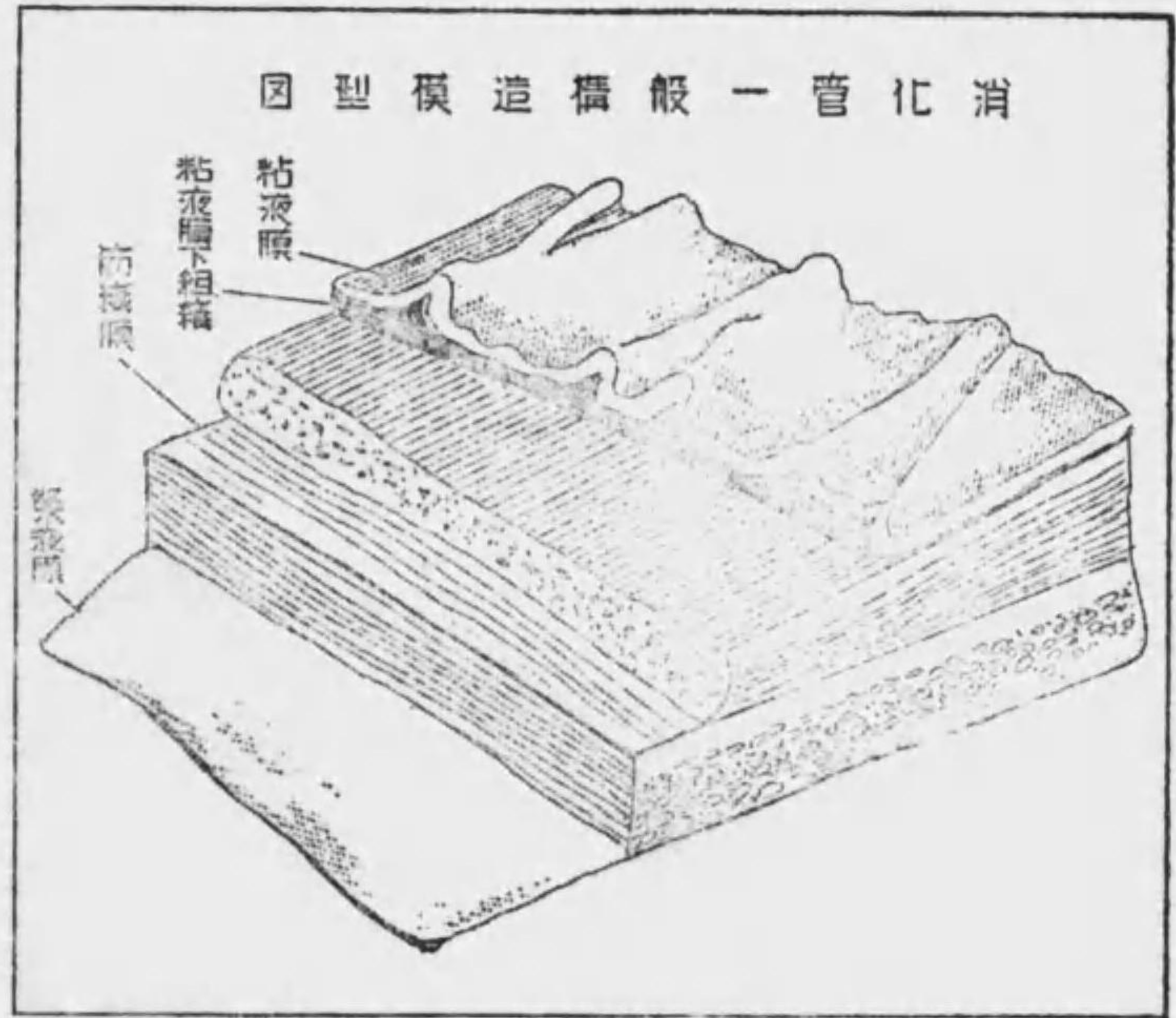
粘液膜ノ一系ニシテ線ト稱スルモノアリ、其作用ハ物質ノ分泌及排泄ヲ営ムニ
アリ、分泌物ハ腺ノ種類ノ異ナルニ從ヒテ、各特異ノ効力ヲ有スルモノニシテ
排泄物ハ、身体ノ新陳代謝ノ結果不用トナリタル成分ヲ云フ、腺ハ粘液膜ノ表
面ヨリ深部ニ陥入セル腺管ニシテ、其形ハ円管ノ如キモノト、膨大ニシテ小囊
狀ヲ呈スルモノトアリ、前者ヲ管狀腺、後者ヲ胞狀腺ト云フ、又胞狀管狀腺ナ
ルモノアリ、前二者ノ中間形ナリ。

腺器ハ腺体ト排泄管トヨリ成ル、腺体ハ分泌又ハ排泄機能ヲ営爲シ、其ノ壁ハ
固有ノ上皮、所謂腺細胞ヨリ被ハレ、排泄管ハ腺体ニ於テ生ジタルトコロノ分
泌物若クハ排泄物ヲ腺外ニ輸送スル通路ニシテ、其壁ハ通常円柱狀若クハ稍々
短キ細胞ヲ以テ被ハル、腺体及排泄管ノ外壁ニハ基礎膜ト稱スル透明無織ノ薄
膜アリ、時トシテハ此ノ膜ト腺細胞トノ向ニ星形ニ分枝セル細胞ヲ見ルコトア
リ、此細胞ハ其分枝ヲ以テ腺細胞ヲ稱スルガ故ニ、之ヲ籠狀細胞ト云フ。

(B)粘液膜下組織 ハ鬆粗ナル結締組織ヨリ成リテ、粘液膜ト筋織膜ノ間ニ在リ

(図 九 十 六 百 第)

消 化 管 一 般 構 造 模 型 圖



其質鬆粗ナルヲ以テ、粘液膜ヲシ容易ニ滑動セシメ、且ツ表面ニ粘液膜皺壁ヲ造ル、齒齦、硬口蓋、舌弁ニハ稀ニ粘液膜組織ヲ賦如スルコトアリ。

(C) 筋織膜 ハ内臓ノ大部分ニ存在スルモ、或如セル所亦鮮カラズ、其、構成ハ主トシテ滑平筋細胞ナレドモ只ダ一定ノ部位、例ハバ咽頭、眼頭、食管、生殖器ノ一部ニ於テハ横紋筋纖維ヲ認ム、而シテ内臓ノ大部分ノ筋織膜ハ二層ヨリ成リ、

時トシテハ尚筋三層ノ存スルコトアリ、筋織膜二層ニ排列スルトキハ、其各層ハ互ニ直角ヲナシ、一ハ從走シ、一ハ横走スルヲ常トス、而シテ筋織膜ノ層間及周囲ニハ結締織アリ、血管、淋巴管、神經纖維及神經細胞ヲ伴フ。

(D) 漿液膜 ハ纖維様結締組織ヨリ成リ、上皮細胞ヲ以テ被覆セラル、其上皮ト纖維様結締組織トノ間ニ、硝子様透明ノ薄膜即基礎膜ヲ有ス。

上皮ハ單層ニシテ其ノ細胞ハ扁平ナリ、此細胞間ニハ所々ニ小空隙ヲ見ル、之ヲ間口ト云フ。

漿液膜ハ其下層ノ結締織ヲ以テ直接組織ト結合ス、而シテ其ノ結締織ノ疎密ニ據リ結合ノ強弱アリ、漿液膜ノ皺壁中ニ多量ノ筋纖維ヲ見ルコトアリ、血管ノ數ハ頗ル少シト雖モ、毛細管ハ尚上皮層ニ近シ、淋巴管ハ漿液膜下層中ニ在リテハ僅々淋巴管ヲ形成スルコトアリ、神經纖維ハ少ナケレドモ、之ヲ全ク缺如セル部分ナシ、漿液膜ハ新鮮ナル状態ニ於テハ其表面滑平ニシテ光澤ヲ有シ且ツ濕潤ス、故ニ漿液膜ヲ被リタル諸臓器ハ互ニ能ク滑動ス。

(E) 内臓充塞セル内臓 之ヲ實質性器官及腺体ノ二種ニ區別ス。

(A) 実質性器官 ハ実質ヲ形成セル細胞ヨリ成レル部分ト、皮質即実質ヲ被包セ
ル結締組織ヨリ成レル部分トノ二部ヨリ構成セラレ、一般ニハ実質ハ皮質ヨリ
重要ナル部分ヲナスモ、卵巣或ハ腎臓ノ如キニ於テハ実質ヨリ皮質ハ却ツテ
重要ナル部ヲナスモノナリ。

(B) 腺体 ニハ又排泄器ヲ有スルモノト之ヲ言セザルモノトノ二種ニ區別ス、而
分泌腺、内分泌腺等ナリ。

(1) 外分泌腺 ハ又更ニ其ノ形状ニ由リ、胞狀腺及管狀腺ノ二トシ、耳下腺皮
脂腺等、如ク囊狀ヲ成セルモノハ、即胞狀腺ニシテ、涙腺、汗腺等、如ク筒
狀ヲ成セルモノハ即管狀腺ナリ。

(2) 内分泌腺 ハ固有ノ排泄管ヲ有セザルモノニシテ、其産出物ハ直接血管又
ハ淋巴管ニ送ル、例ヘバ腦下垂体、松下腺、脾臓、副腎、甲状腺、胸腺、上
皮小体、腺臟、垂丸、卵巣、垂腺等ハ内分泌腺ニシテ、一各腺管腺又ハ血
管腺トモ云フ。

尚ホ是等ノ腺体ハ河レモ結締組織ニ由リテ被包セラル、モノニシテ、之ヲ纖維
膜ト稱シ、又腸管ニ依リテハ白膜トモ稱ス、例ヘバ脾臓、垂丸等ノ如シ。

第二章 内臟学各論

甲 消化器

消化器トハ營養物ヲ攝取シ以テ之ヲ体内ニ供給シ、且ツ排泄セシムル處ノ所謂
排泄代謝ヲ司ルモノニシテ、口腔ニ始マリ咽頭、食道、胃、大腸、小腸ヲ區ジ
テ肛門ニ終ル、而シテ其ノ階層トシテ消化作用ニ必要ナル分泌腺、即チ口腔、
唾液腺、肝、膵ヲ有ス、但シ肝臓ハ一ノ腺管腺ナルヲ以テ、内分泌腺、條下
ニ詳論セリ、宜シク其部ヲ参照スベシ。

(一) 口腔

口腔ハ前ハ口裂ヲ以テ体外ニ開キ、咽喉ヲ以テ咽頭ニ通ズル複雑ナル場所ナリ。
之ヲ閉ヅルトキハ諸壁相接シテ殆ト腔ヲ胎サズ、而レドモ下顎、舌、唇、口蓋
等ノ運動ニ由リテ、大小形状ノ一定ヲラザル腔ヲ生ズ。腔壁ハ前方ハ唇、側方
ハ頰及下顎枝、上方ハ硬口蓋及軟口蓋、下方ハ舌ヨリ成ル、口腔ハ齒弓ニ由リ
(309)

テ前後ノ二部ニ分ル、其前部ヲ口腔前庭ト云ヒ、後部ヲ固有口腔ト云フ。

(一) 口腔前庭

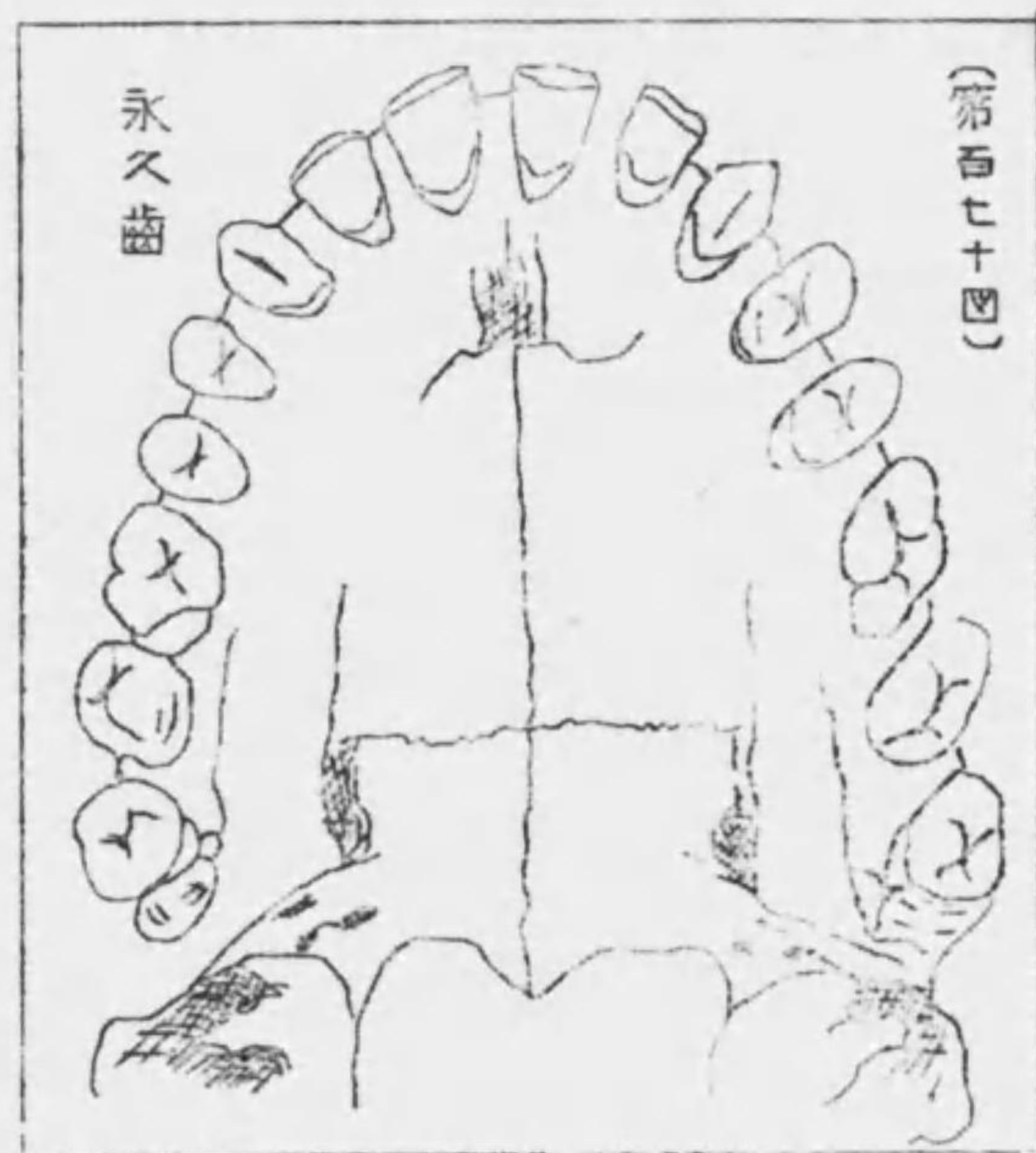
口腔前庭ハ鉛直ニ位セル弓状ノ腔隙ニシテ、外方ハ上下ノ口唇及頬ヲ以テ被ハレ、内方ハ顎骨ノ齒槽突起及齒ヨリ境セララル、而シテ上下両唇、而テ口唇ト稱シ、其両隅互ニ相会スル所ヲ口角ト云ヒ、上唇ニハ人中ト名ヅクル縦溝アリ、其ノ人中ノ兩側ニシテ鼻翼ノ外側ヨリ、口角ニ至ル溝ヲ鼻唇溝ト名ク、又下唇ニモ浅クシテ頰部ト境界スル横溝アリ、是ヲ頰唇溝ト稱ス。頰部ハ口唇ノ一系ニシテ前口腔ノ前壁ヲナシ、咀嚼ノ際ニ於テ食物、齒牙ヲ離レ、前口腔ニ出ルヲ防止ス、茲ニ上顎ノ第二小臼齒ニ対シ、耳下腺排泄管ノ開口ヲ見ル。

口唇及頬部ノ構造 皮膚、粘膜、筋繊維ノ三層ヨリ成ル、皮膚ハ緻密ニシテ口唇ノ肥厚部ヨリ、直ニ粘膜ニ移行シ紅色ヲ帯ブ、是ヲ紅唇ト稱シ、血管及神経ニ富ム、故ニ知覚最モ鋭敏ナリ、而シテ顎骨ニ覆蓋シテ齒齦ヲ形成シ、許多ノ齒狀粘液腺ヲ含有ス、是ヲ唇腺及頰腺ト稱ス。

○ 齒牙

齒牙ハ其硬堅膜ニシテ、一部ハ顎骨ノ齒槽内ニ着入シ、一部ハ口腔ニ露ハレ、其

齒列ハ弓状ヲナス、是ヲ上齒弓及下齒弓ト稱シ食物ヲ咀嚼シ、或ハ发声ノ作用ヲ保佐スルノ要具ニシテ、三部ヨリ形成セラル、即チ口腔中ニ現ハル、部ヲ齒



(第百七十四)

永久齒



(第百七十一)

乳齒

牙ト稱シ、齒齦ヨリ囲マル、硬キ部ヲ齒頸ト名ケ、其内ニ着入シタル

部ヲ齒根ト云フ。

而シテ齒牙ニハ乳齒及又性齒ノ別アリ、即チ乳齒ハ上下各十枚ヨリ成リ、門齒
 上下各四枚、犬齒上下各二枚、小臼齒上下各四枚ニシテ、生後七ヶ月乃至二十
 個月ノ後完成シ、六歳ヨリ十四歳ノ間ニ於テ自然ニ脱落シ、第二ノ新齒ヲ生
 ス、是ヲ又性齒(又ハ永久齒)ト名ケ上下各十六枚ヲ有ス。

門齒(又切齒) 上下各四枚

犬齒(又虎齒) 上下各二枚

小臼齒(又類齒) 上下各四枚

大臼齒 上下各六枚

但シ臼齒ハ大小只二前方ヨリ第一第二等ト稱シ、又右ノ内第三大臼齒ハ生後
 才運ス、十八乃至三十才ノ間ニ於テ再生スルヲ以テ、智齒又ハ叢齒ノ名アリ、
 齒牙ノ構造ハ象牙質、白歯質及珐瑯質ノ三部ヨリ成ル。

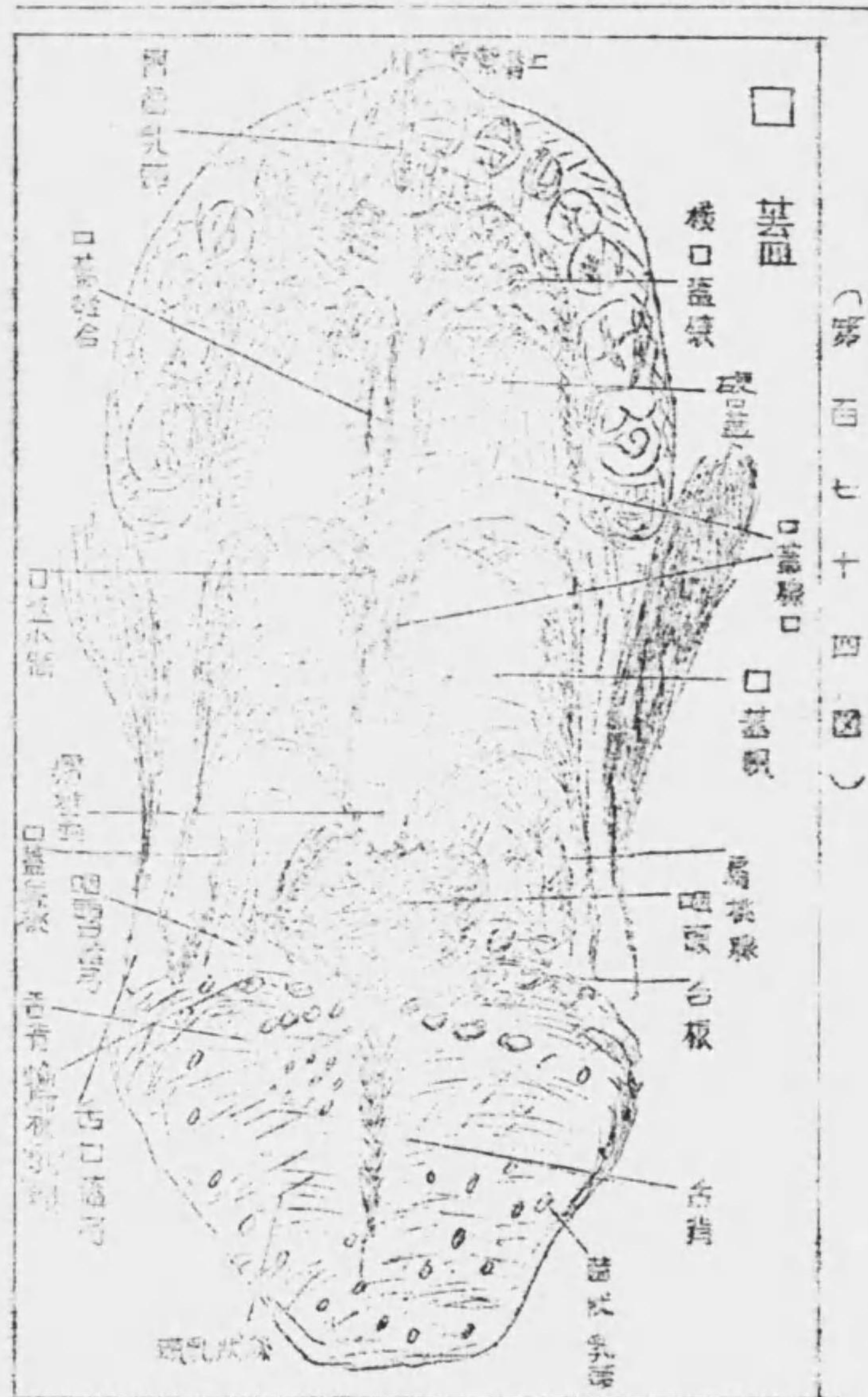
(1) 象牙質ハ齒牙ノ大部分ヲ構成セルモノニシテ、齒冠ノ部ニ於テハ珐瑯質ニ由
 リテ被ハル、齒根ノ部ニ於テハ白歯質ニ由リテ被ハル。

而シテ此象牙質ハ一種ノ骨ノ變形物ニシテ白色不透明ヲ呈シ、其質ヨリニ呈ス、

内ニ齒腔ト名クル腔アリテ、其形狀ハ殆々齒牙ノ形ニ類似シ齒板ニ向ツテ薄ク
 成ス、是ヲ齒根管ト稱シ、末端ハ小孔トナリ開口シテ齒髓ヲ收容ス、而シテ此

(第百七十二圖)

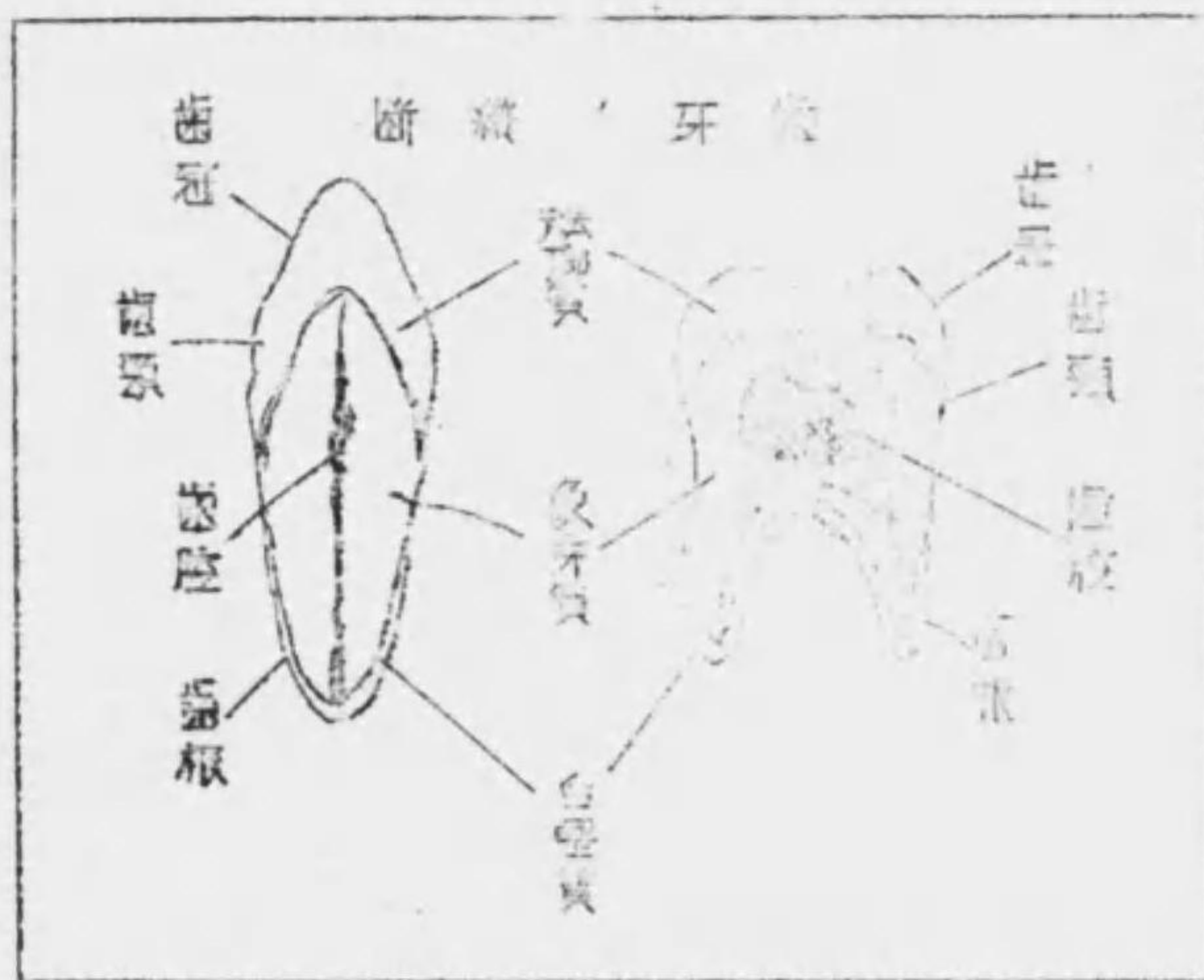




(第百七十四圖)

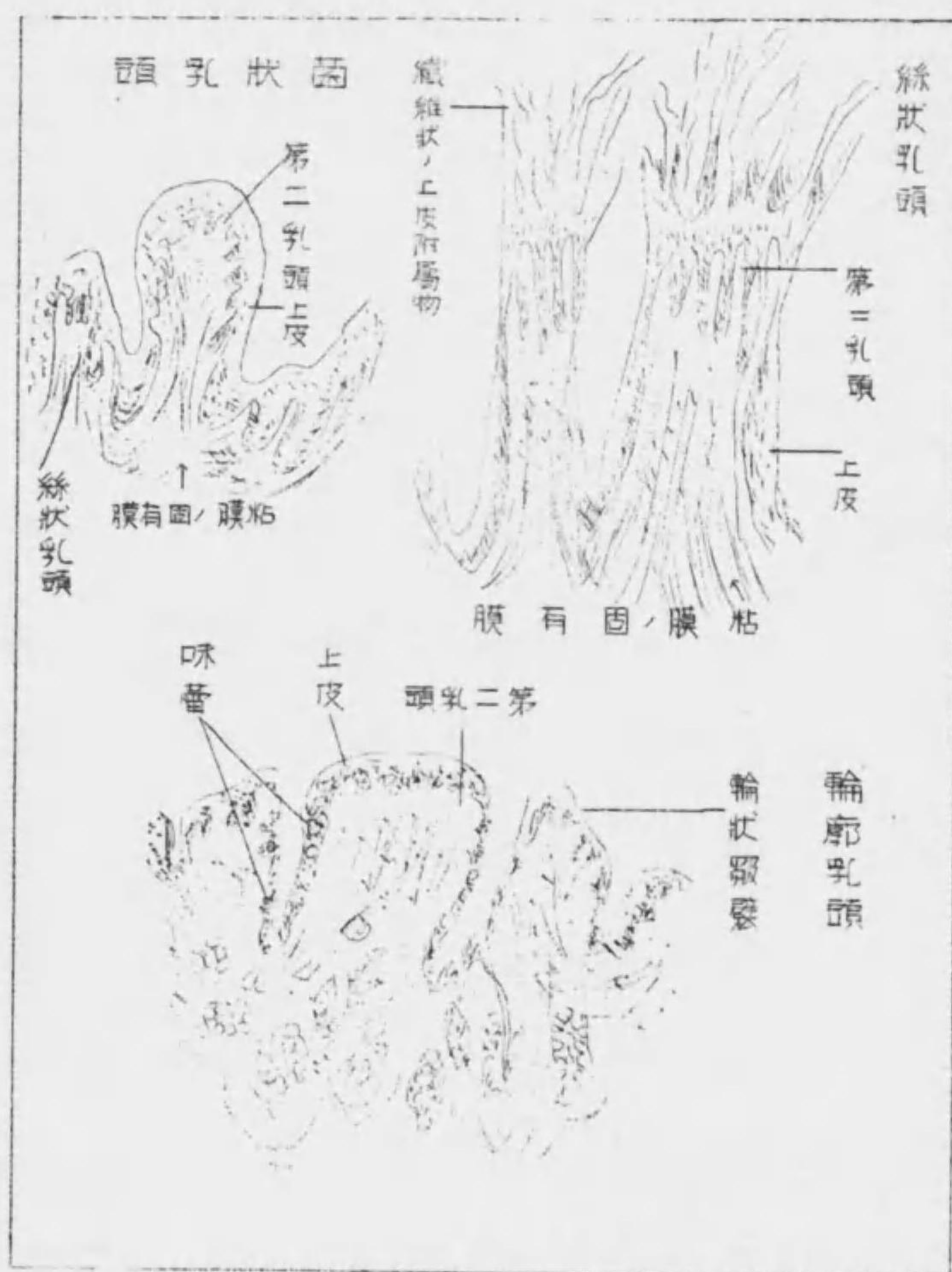
(315)

(四三十七頁)



歯冠ハ其ノ血管神經ニ富ム。
 (2) 白堊質ハ化骨シタル結締組織ニシテ、
 僅ニ歯根ヲ被フ處ノ薄キ部分ナリ、而シテ其外面ハ神經ニ覆覆セル結締組織ニ由リテ棕色セラル。是ヲ齒板
 層又ハ齒冠層ト稱ス。
 歯冠層ハ左ノ如ク成リ、
 歯冠層ニ由リテ成ルルニシテ齒冠
 ヲ覆ヒ、其白色ハ結締組織ノ光澤ヲ
 示シ、生ヘテ結締組織ニ由リテハ
 其ニ其表面ニ結締組織ヲ被フ層
 ス、是ヲ齒小皮又ハハナスミト云フ。

(2) 歯冠口蓋



齒弓ヨリ成リ、上壁ハ口腔ノ天蓋ニシテ口蓋ヲ以テ被ヒ、下壁ハ舌並ニ顎舌骨
 筋ナリ、而シテ後壁ハ咽峡ニ由テ直ニ咽頭腔ニ通ズ、又口蓋ハ硬口蓋及軟口蓋
 ノ二部ヨリ成ル、甲ハ骨質ニシテ上顎骨ノ口蓋突起ト口蓋骨ノ地平ヨリ成ル、
 而シテ強厚ノ粘膜ヲ附シ中央ニ縦徑ノ維線ヲ呈シ、血管神經ニ富饒シテ許多粘
 液腺ヲ含有ス。
 乙ハ粘液腺ノ延長部ニシテ稍々瓣狀ヲ呈シ、硬口蓋ノ後部ニ在リ筋肉ヲ藏シ、
 後端ノ中央ニ圓形ノ突起ヲ生ズ、是ヲ懸壺垂ト云フ、又軟口蓋ノ遊離縁ヲ口蓋
 肌ト云ヒ、嚥下ノ際ハ擧リテ後鼻腔ヲ閉鎖スルノ用ヲ爲ス、此口蓋肌ノ兩側ハ
 前後ニ個ノ液壁ヲ発生シ、一ハ舌根ノ外側ニ、一ハ咽頭ニ移行ス、前者ヲ舌口
 蓋弓ト云ヒ、後者ヲ咽頭口蓋弓ト稱ス、此兩弓間ニハ左右各一個ノ軟肉アリ、是
 ヲ扁桃腺ト云フ。

A. 舌

舌ハ口腔ニ在ル肉質ノ器官ニシテ粘膜ヲ以テ被ハシ、静止時ニハ下顎内ニ匿レ
 リ、作用時ニハ起リテ種々ノ形狀ニ變化シ、飲食及弄聲ヲ補成ス、即今消化器、
 弄音器及味覺器ヲ兼有ス、其形狀ハ扁平卵圓形若クハ扁平圓錐形ニシテ、後端

八、舌骨二空リ、下面ハ口腔底ニ着シ、前部及同縁ハ起ス、是ヲ區別シテ
 基底、体尖、端縁、上面及下面トス。上面ノ中央ニ舌正中溝アリ、其後端小
 窩ニ終ル、唇ヲ舌盲孔ト云フ、舌根及舌冠ハ其發生ヲ異ニシ、舌根ハ兩側ノ傍ニ
 及第三嚔弓ノ中部ヨリ起リ、舌冠及舌尖ハ口腔底ノ隆起ヨリ發生ス、此兩部ノ
 癒合部ニ所謂舌贅薄ヲ生ジ、其ノ境ヲ示ス、舌根ト舌冠トノ間ニ、三個ノ縦溝
 アリ、中央ノモノヲ中舌合線トシ、兩側ノモノヲ側舌合線トシ、此線
 並列ニ生ズル二個ノ凹窩アリ、是ヲ合線窩ト稱ス、舌ノ下面ハ不齊ニシテ中央ニ
 舌腹ノ隆起アリ、舌腹ト云ヒ、下ヲ舌腹ノ中央ニ置カス、而シテ其各側ニ不
 等ノ隆起アリ、是ヲ舌脊ト云フ、舌腹ノ隆起及舌下隆起並舌ノ開口部ナリ、又下面
 ノ各側ニ隆起的ノ隆起アリ、是ヲ新縁ト云フ、舌背ハ舌ノ上面ニシテ舌隆起ヲ帶
 ヒ中央ニ溝ヲ居ス、其後端ハ舌根ニ向ヒ直ニ終ル、而シテ舌背筋ニハ筋
 線ノ突起即チ乳頭アリ、是ヲ乳頭ト云フ、是ヲ線狀乳頭、齒狀乳頭、輪狀乳頭
 長葉狀乳頭、リンズ乳頭ノ五種トス。

(一) 線狀乳頭 ハ白色ニシテ粒狀ニ隆起シ、舌ノ上皮ヲ被キ、舌ノ舌背ノ大部分ニ
 布被シ、正中溝ヨリ前方ニ向ツテ放射狀ニ列ス。

(二) 齒狀乳頭 ハ赤色球形ニシテ下方ハ尖少シ、粒狀乳頭ノ間ニ散在シ、殊ニ舌
 尖ニ多シ。

(三) 輪狀乳頭 ハ八個乃至十五個ニシテ舌根ニ在リ、正中溝ノ後端ニ於テV字
 形ニ配列シ、形齒狀乳頭ニ似ト雖モ、其周囲ニ溝及堤ヲ廻ラヌヲ以テ異リ
 トス、而シテ後端ハ球狀ニシテ數多ノ小乳頭ヲ具ヘ、上皮是ヲ覆フ、其周囲
 ハ輪狀ノ隆起アリ、溝ヲ限界ス、溝中更ニ味蕾ヲ有シ、味感ヲ司ドルモノナリ。

(四) 線狀乳頭 ハ舌根ノ後部ニ在リ。

(五) リンズ乳頭 ハ舌根ノ側部ニ在リ、箇中線狀組織ヲ含ム。

是等ノ舌乳頭ハ變形ヲ居スル事多シカラズ、即線狀乳頭ノ上皮非常ニ薄シ、
 乳頭端後方ニ向ヒ互ニ相重疊シテ舌ノ表面一見白膜ノ如キ觀ヲ呈スル事アリ、
 是ヲ舌苔ト云ヒ、又上表唇止長シテ三乃至四・五粒ニ達スル時ハ絨毛舌ト云フ。
 コレニ反シテ短ク且上皮薄ク、線狀乳頭ト區別シ難キ事アリ、或ハ個々別ニ分
 セズ共同ノ表面ヲ被ル、殊ニ老人ニ於テ舌表面殆ド滑澤ナル事アリ、合線ト輪
 狀乳頭トノ間ニ圓形ノ小隆起多アリ、隆起ノ中央ニハ小凹陥ヲ現ハス、是ヲ
 舌小窩ト云フ、又此部ヲ總稱シテ舌扁桃ト名ク、又犬ハ狹小ニシテ直隆シ、知

八、舌骨二空リ、下面ハ口腔底ニ着シ、前部及同縁ハ起ス、是ヲ區別シテ
 基底、体尖、端縁、上面及下面トス。上面ノ中央ニ舌正中溝アリ、其後端小
 窩ニ終ル、唇ヲ舌盲孔ト云フ、舌根及舌冠ハ其發生ヲ異ニシ、舌根ハ兩側ノ傍ニ
 及第三嚔弓ノ中部ヨリ起リ、舌冠及舌尖ハ口腔底ノ隆起ヨリ發生ス、此兩部ノ
 癒合部ニ所謂舌贅薄ヲ生ジ、其ノ境ヲ示ス、舌根ト舌冠トノ間ニ、三個ノ縦溝
 アリ、中央ノモノヲ中舌合線トシ、兩側ノモノヲ側舌合線トシ、此線
 並列ニ生ズル二個ノ凹窩アリ、是ヲ合線窩ト稱ス、舌ノ下面ハ不齊ニシテ中央ニ
 舌腹ノ隆起アリ、舌腹ト云ヒ、下ヲ舌腹ノ中央ニ置カス、而シテ其各側ニ不
 等ノ隆起アリ、是ヲ舌脊ト云フ、舌腹ノ隆起及舌下隆起並舌ノ開口部ナリ、又下面
 ノ各側ニ隆起的ノ隆起アリ、是ヲ新縁ト云フ、舌背ハ舌ノ上面ニシテ舌隆起ヲ帶
 ヒ中央ニ溝ヲ居ス、其後端ハ舌根ニ向ヒ直ニ終ル、而シテ舌背筋ニハ筋
 線ノ突起即チ乳頭アリ、是ヲ乳頭ト云フ、是ヲ線狀乳頭、齒狀乳頭、輪狀乳頭
 長葉狀乳頭、リンズ乳頭ノ五種トス。

(一) 線狀乳頭 ハ白色ニシテ粒狀ニ隆起シ、舌ノ上皮ヲ被キ、舌ノ舌背ノ大部分ニ
 布被シ、正中溝ヨリ前方ニ向ツテ放射狀ニ列ス。

(二) 齒狀乳頭 ハ赤色球形ニシテ下方ハ尖少シ、粒狀乳頭ノ間ニ散在シ、殊ニ舌
 尖ニ多シ。

(三) 輪狀乳頭 ハ八個乃至十五個ニシテ舌根ニ在リ、正中溝ノ後端ニ於テV字
 形ニ配列シ、形齒狀乳頭ニ似ト雖モ、其周囲ニ溝及堤ヲ廻ラヌヲ以テ異リ
 トス、而シテ後端ハ球狀ニシテ數多ノ小乳頭ヲ具ヘ、上皮是ヲ覆フ、其周囲
 ハ輪狀ノ隆起アリ、溝ヲ限界ス、溝中更ニ味蕾ヲ有シ、味感ヲ司ドルモノナリ。

(四) 線狀乳頭 ハ舌根ノ後部ニ在リ。

(五) リンズ乳頭 ハ舌根ノ側部ニ在リ、箇中線狀組織ヲ含ム。

是等ノ舌乳頭ハ變形ヲ居スル事多シカラズ、即線狀乳頭ノ上皮非常ニ薄シ、
 乳頭端後方ニ向ヒ互ニ相重疊シテ舌ノ表面一見白膜ノ如キ觀ヲ呈スル事アリ、
 是ヲ舌苔ト云ヒ、又上表唇止長シテ三乃至四・五粒ニ達スル時ハ絨毛舌ト云フ。
 コレニ反シテ短ク且上皮薄ク、線狀乳頭ト區別シ難キ事アリ、或ハ個々別ニ分
 セズ共同ノ表面ヲ被ル、殊ニ老人ニ於テ舌表面殆ド滑澤ナル事アリ、合線ト輪
 狀乳頭トノ間ニ圓形ノ小隆起多アリ、隆起ノ中央ニハ小凹陥ヲ現ハス、是ヲ
 舌小窩ト云フ、又此部ヲ總稱シテ舌扁桃ト名ク、又犬ハ狹小ニシテ直隆シ、知

變甚ダ鋭敏ナリ、舌尖ノ下面ニ許多ノ腺アリ、舌縁壁ノ下面ニ開口ス、是ヲ前舌腺ト名ク。

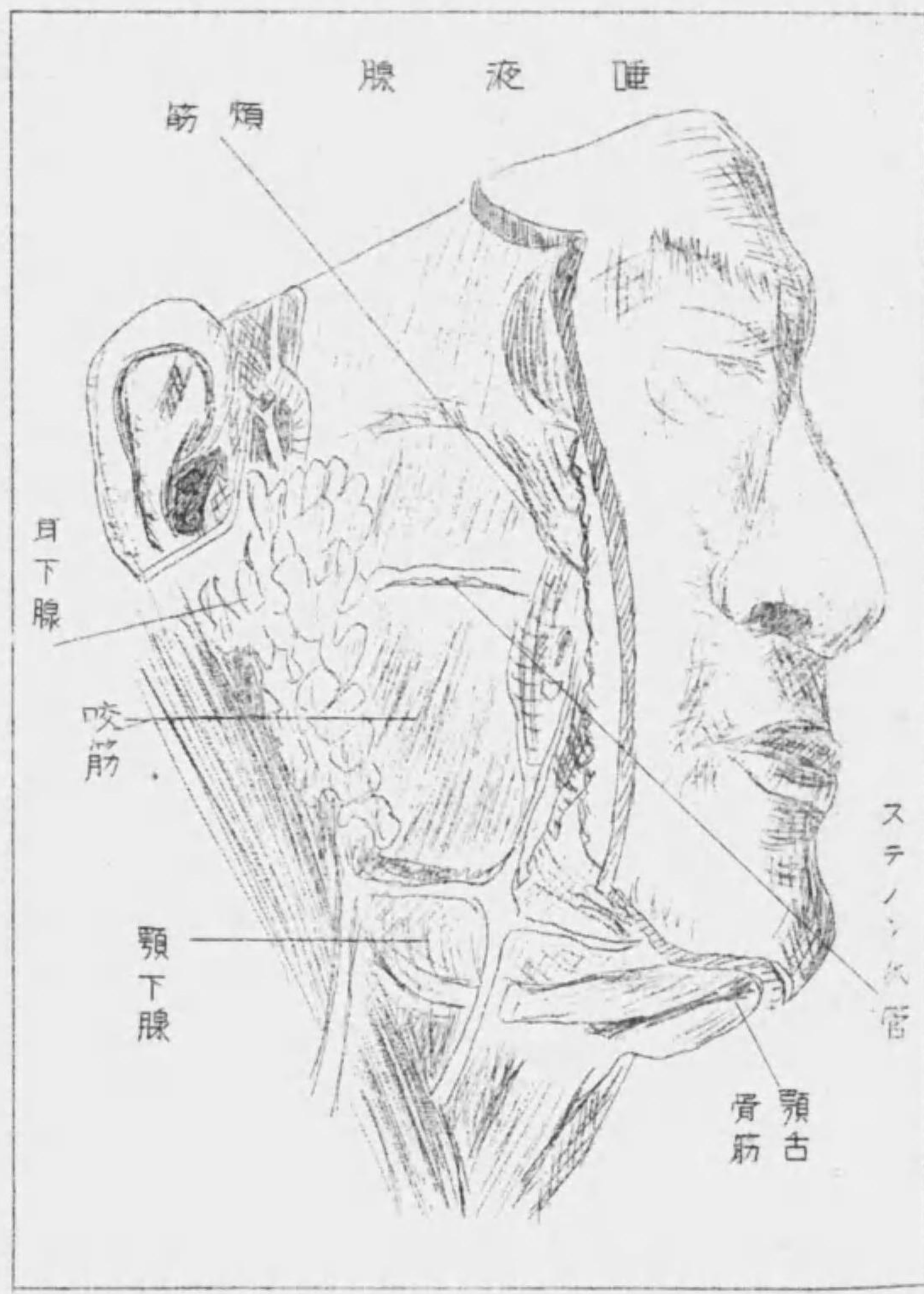
B 口腔粘液腺

口腔ノ粘液腺ハ赤色湿润ノ腺ニシテ、上皮層及粘液腺下組織ヨリ成リ殊ニ血管ニ富饒ス、此粘液ハ口唇ヨリ起リ咽頭口蓋弓ノ部分ヨリ咽頭粘液腺ニ移行ス、又歯槽突起ニ於テ所謂齒齶ヲ形成シ其齒齶ノ粘液腺ハ甚ダ厚クシテ、堅キ粘液腺下組織ニ由リ骨質ニ連結シテ移動セズ、舌背ニ於テモ粘液腺ハ固ク舌背ニ附着セリ、而シテ粘液腺内ニハ液體即粘液ヲ分泌スル所ノ許液腺存在シ、常ニ分泌物ニ由リ粘液膜面ヲ湿润アラシム、之等ノ粘液腺ヲ口腔腺又ハ唾液ト稱シ、大小ノ二種ニ分ツ、大腺ハ其數左右各三個アリ、即耳下腺、顎下腺及舌下腺ニシテ、小腺ハ確ニ二三ノ腺管ヨリ成ル、即口唇腺、舌腺、口蓋腺等是ナリ。

C 唾液腺

口腔及前庭中ニ開口セル腺ハ甚ダ饒多ニシテ、大小二群ニ類別スルハ前述ノ如シ、而シテ唾液腺ハ複管狀腺ニシテ、其ノ分泌物ハ舌下腺ノ如ク粘液ナルアリ、耳下腺ノ如ク蛋白ニ富メル漿液ナルアリ、或ハ顎下腺ノ如ク両者ノ混合物ナル

(圖六十 舌)



了リ、故ニ唾液腺ヲ區別シテ粘液腺、漿液腺、混合腺ノ三種トナス、

耳下腺ノ動脈ハ迷走動脈ノ分枝ノ神經ハ大耳神經ノ分枝

唾液腺ニ分佈スル神經ハ何處ニ在ルヤ
三石ウテ来ル交感神經ノ外耳下腺ニハ舌咽神經ノ分枝及舌下腺ニハ鼓索神經ノ分佈ス

(一) 耳下腺 ハ三唾液腺中最モ大ナルモノニシテ三角形ヲ呈ス、頰ノ側面ノ直前ニ於テ下顎後窩中ニ位シ、下顎關節ヲ掩ス、上方ハ顴骨弓及外耳ニ達シ、前方ハ咬筋ノ外側ニ延展シ、後方ハ乳瞷突起及胸鎖乳瞷筋ニ接シ、内方ハ頰頰骨壁狀突起ニ達シ、下方ハ下顎隅ニ終リ腺自身ハ耳下腺咬筋膜ヲ以テ覆ハル、耳下腺管若クハステーション氏管ハ頰骨弓ト並行シテ咬筋ノ外側ヲ前走シ、其前縁ニ於テ頰筋ヲ穿テ上顎第二大臼齒冠ニ對シ、上唾液腺頭ヲ以テ口腔ニ通入。

(二) 顎下腺 ハ扁平ニシテ圓ク鳩卵大ニシテ、顎下三角部ニ在リ、顎舌骨筋ノ後縁ニ位シ、一割ハ其上面ニ延長ス、腺ノ上面ニ溝アリテ外頸動脈ヲ通シ、前額面薄腺其下面ヲ走り淺頸筋膜ノ舌骨上部ヲ以テ覆ハル、顎下腺管若クハワルトン氏管ハ顎舌骨筋ノ上ヲ前走シ、舌神經ト交叉シ舌下阜ノ頂上ニ開口ス。

三、舌下腺 ハ顎下腺ノ外側ニ沿ウテ、口腔底粘膜炎ト顎舌骨筋ノ間ニ位シタル細長ノ腺ニシテ、其ノ存在ニ由リ粘膜炎ニ腫隆ヲ生ズ、其ノ排泄管ハ數條ニシテ大及ビ小舌下腺管ノ二種ニ分ル、大舌下腺管ハ舌下阜ニ開口シ、自他八個乃至十個ノ小舌下腺管若クハリウイニ氏管ハ、筋絲壁ニ沿ウテ直接ニ粘膜炎ニ注ギ、或ハ顎下腺管ニ合ス。

唾液腺ノ構造 耳下腺ハ漿液腺ニシテ、其質シタル粘管狀腺ナリ、其分泌物ハ蛋白ニ富ミ排泄管ノ分枝ハ分泌管及中間部ニ移リ、迂回セル末端切ニ終ル末端部ノ上段ハ梨子形ノ蛋白貯溜腔ナリ、舌下腺ハ粘液腺ニシテ、粘管ノ分枝ハ短キ分泌管ヲ以テ末端部壁リ中間部ヲ缺ク、末端上段ハ粘液細胞及漿液細胞ヨリ成リ、漿液細胞ハ往々集合シテ大ナル半月ヲ成ス、腺下腺ハ分泌管ニシテ排道管分枝ハ、耳下腺ノ如ク分泌管中間部、末端部ニ分ル、末端部ハ分泌管上段或ハ、腺ニ漿液細胞ヨリ成ルト雖モ漿液細胞ハ分泌管ニシテ分泌管ニ合ス、半月ノ細胞ハ分泌管ニ粘管ニ連ス。

(二) 咽頭

咽頭ハ少シク前後二層ニサレタル圓錐形ノ管ニシテ、前方ハ喉嚨口ヲ以テ喉腔ニ通ジ、咽頭ヲ以テ口腔ニ通シ、咽頭管ヲ以テ喉頭管ニ通ズ、咽頭ニ腺管ノ咽頭口開キ舌骨ノ脊サニ於テ最モ廣ク、下方ハ狭小トナリテ食管ニ移行シ、上端ハ圓天井形ヲ成ス、之ヲ咽頭穹窿ト云ヒ、後頭管体及頸椎骨体ノ下面ニ接シ、後方ハ椎前筋膜ニ連リ、咽頭ノ前部ハ椎前骨環狀突起、咽頭筋筋環状突起、

咽頭ニ分布スル
神經ハ三ノ神經
第一枝ノ分岐点
喉神經 咽頭筋
迷走神經 咽頭筋
交感神經 咽頭筋
或

(四百七十七番)



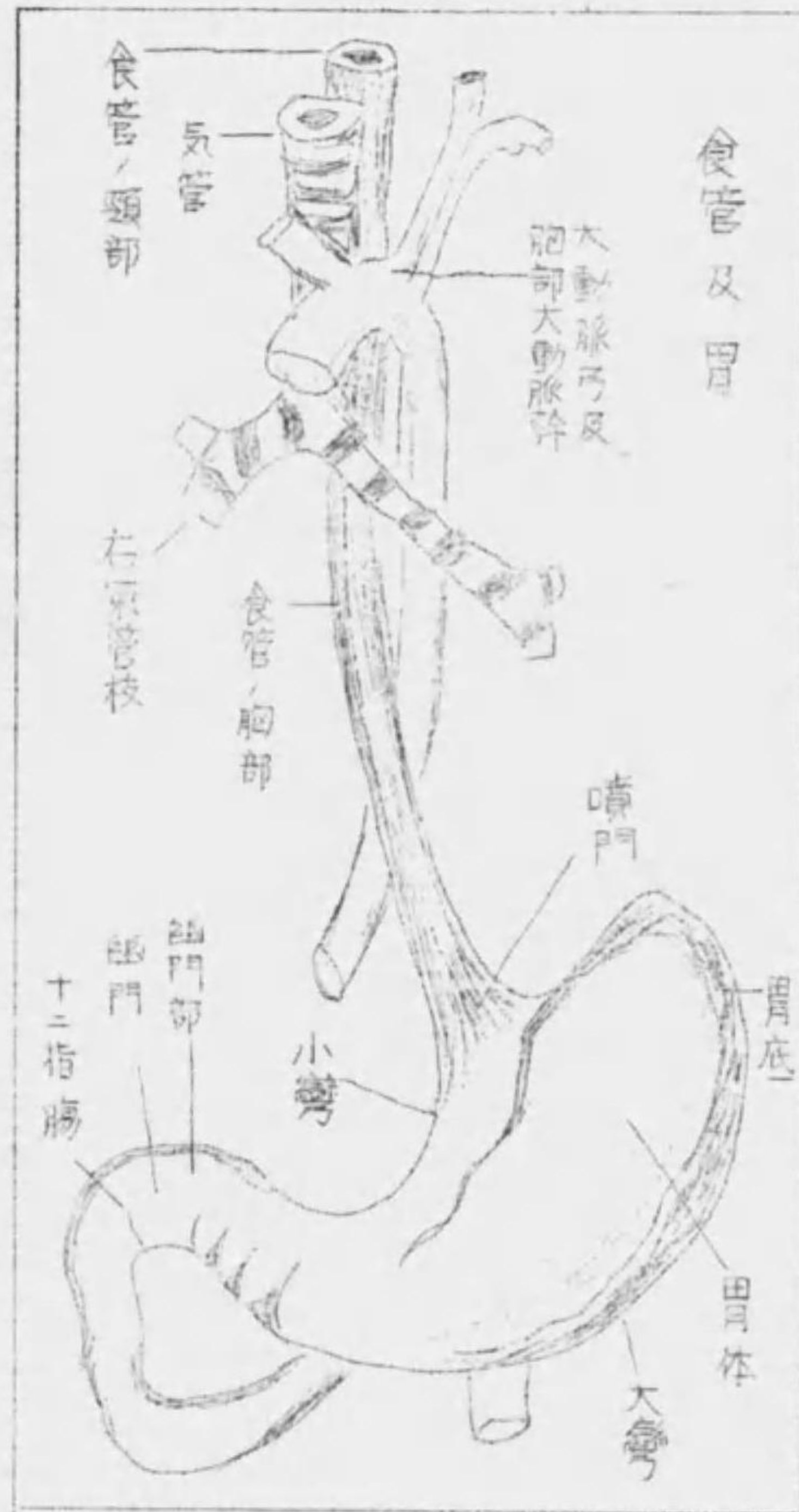
喉頭ニ連ル、咽頭ヲ其ノ部位ニ由リ咽頭腔、口腔、咽腔ニ別ツ。
 (一)咽頭腔 ハ咽頭ノ上部ニシテ、上端ヲ咽頭穹窿ト稱ス、後頭骨体ノ下面ニ一孔
 スベシ、其前方ハ後鼻孔ニ由リ鼻腔ニ通ジ、側方ニヨウスダク氏管ノ開口ヲ具
 ル、之ヲヨウスダク氏管咽頭口ト云ヒ、中耳ノ鼓室ニ交通スベシ。
 (二)口腔 ハ咽頭ノ上部
 ニシテ、口腔ト相通ズル
 處ナリ。
 (三)咽頭腔 ハ咽頭ノ下部
 ニシテ前上方ハ咽峡ニ由
 リ口腔ニ、前下方ハ咽頭
 口ニ由リ喉頭腔ニ交通ス、
 而シテ下端ハ直チニ食道
 ニ移行スルモノナリ。
 咽頭ノ構造 咽頭ニハ咽
 頭腔ヲ形成スル軟種ノ筋

食管ハ食物ヲ
下ノ腔ニ送ラシ
メテ消化ヲナス

(三) 食管

喉了リテ四倍ヲ成ス、即粘衣膜、粘衣膜下組織、横紋筋及頸咽頭筋膜是ナリ。
 食管ハ喉頭軟骨ノ後部約ノ第六頸椎ノ高サニ始リ、下行シテ第九ヨリ第十
 一胸椎ノ高サニ至レバ、横隔膜ノ食管裂孔ヲ胃ニ蓋ス、故ニ食管ヲ頸部、胸部
 及腹部ノ
 三部ニ分
 ツ。食管
 ノ全長ハ
 二十乃至
 三十仙米
 ニシテ、
 横徑ハ一
 五仙米ノ
 扁平ナル

(四百七十八番)



食管ノ頸部
 右氣管枝
 食管ノ胸部
 膈門
 小彎
 胃底
 胃体
 大彎
 幽門部
 幽門
 十二指腸

胃管・血管ハ
 胃管大動脈
 ノ分岐管
 胃管
 食道ニ分佈ス
 ル神経ハ迷走
 神経食道系
 及交感神経系

膜管ナリ、然レドモ食物蒸下ノ際ハ液張シテ其ノ中央部ニ在リテハ三乃至五
 米ニ達スベシ。

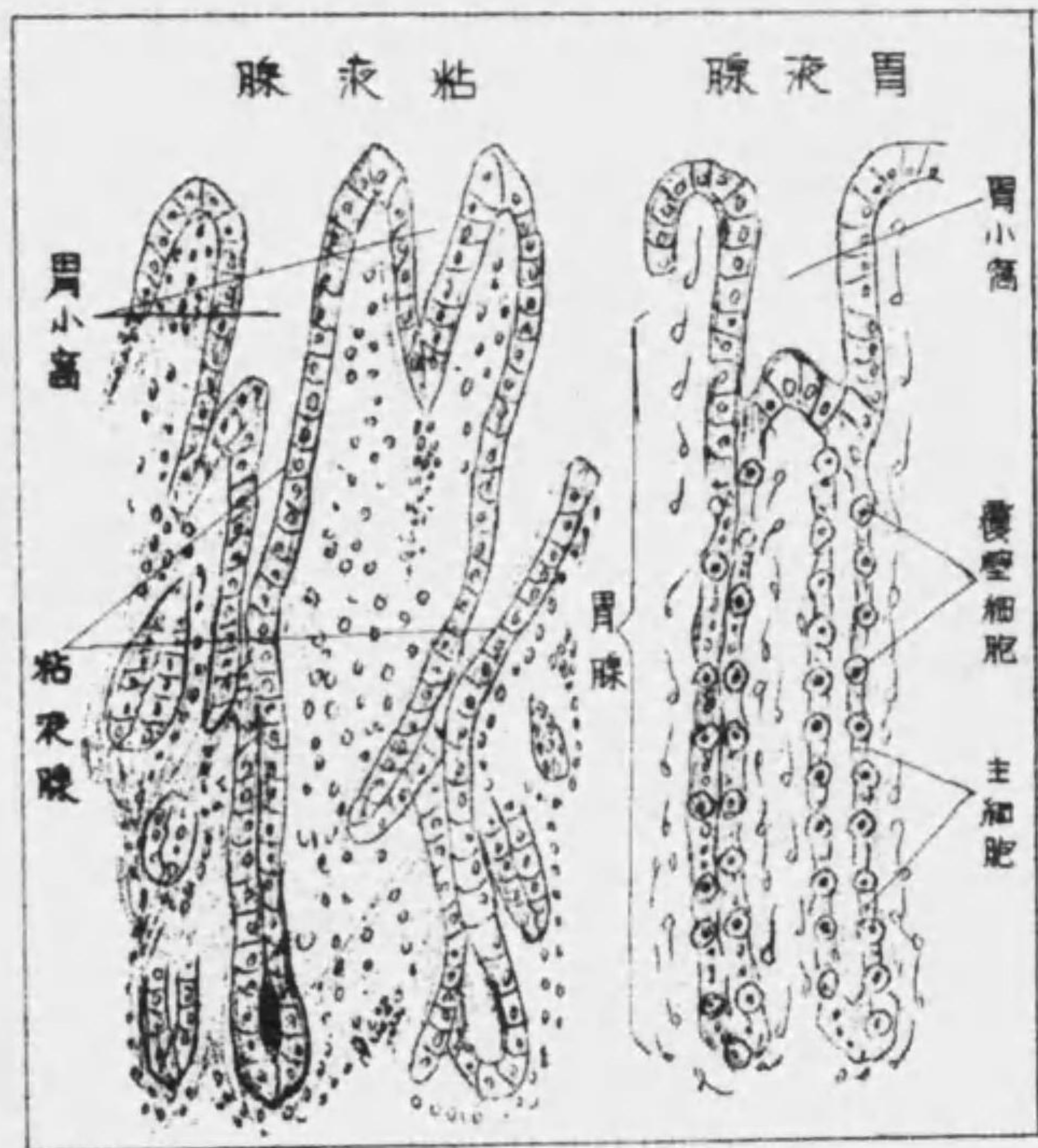
食管ト他ノ諸器トノ位置ノ關係ヲ述ブレバ、頸部ニ在リテハ食管ハ氣管ト對峙
 トノ際ニ在リ、其前面ハ氣管ノ爲ニ全ク覆ハル、然レドモ下行スルニ從ヒ其左
 方ニ轉シ胸腔ニ入ルニ及ンテ其右邊ハ氣管ノ左邊ニ接シ、胸下部ニ至レバ其ニ
 造シク左方ニ轉シ、終ニ左邊管枝ト交叉スルニ至リ、次テ又右邊管枝ヲ離レ少
 シク螺旋狀ヲ爲シテ、胸腔大動脈ノ前部ヲ走ル、即チ胃ノ大動脈ノ右側ニ在
 リ次テ其前部ニ出テ、而シテ下方後部視孔ヲ通過シテハ其ニ大動脈ノ左方ニ在リ、
 胃ノ上口即膈門ニ達ス。

食管ノ構造ハ縦紋膜、斜紋筋層、平滑筋層ヨリ成ルモノニシテ、通常ノ状態ニ於
 テハ筋織膜ノ收縮ニ由リテ同シカラズト雖モ、食物ノ入ルニ及ニ始テ筋層ガ如キ状態ヲ起
 シテ、食物ヲ下方ニ向ツテ輸送スルモノナリ。

(四) 胃

胃ハ左季肋部及上腹部ニ位シ、右季肋部ニ位長シ、腹ヲ以テ被ハル、其形ハ

(圖九十七百第)



内容物ノ盈虚ニ由リテ同シカラズト雖モ、大体ニ於テ梨子狀ノ膜囊ヲ呈ス、而
 シテ胃ノ廣部ハ胃底ト稱ヘ其端ヲ幽門部ト云ヒ、之ニ接シタル部ヲ幽門嚢ト云

フ、元來胃ハ植物性管ヲ縱走
 スル腸管ノ一部擴張シタル
 モノニシテ、其管ノ進ムニ
 從ヒ漸ク其形狀及位置ヲ變
 ジテ水平トナリ、其上方ハ
 横膈膜ニ接シ、前方ハ胃底
 ヲ除キ肝臟右葉ヲ以テ覆ハ
 レ、下方ハ横行結腸後側ハ
 脾、左側ハ左腎及脾ニ接シ、
 右側ハ十二指腸ニ移行ス、
 胃体ノ5/6ハ左方ニシテ、
 1/6ハ右方ニ位シ、其太サ
 モ一様ナラズ、成格的二ハ

其下緣大骨盤ニ連スルモノアリト雖モ、稀ニ萎縮シテ殆ソド管狀ヲ呈スルコトアリ、之ヲ區別シテ前面、後面、大彎、小彎、噴門、幽門トナス。小彎ハ上方ニ向ヒテ凹陥シ、大彎ハ下方ニ向ヒテ突隆シ、各々其長徑ニ沿ウテ腹膜附屬シ、胃血管幹ノ走行スル部ナリ、胃ハ空虛時ニハ小彎ヲ上方ニ向ケ、大彎ハ下方ニ向フト雖モ、一朝膨滿スルトキハ、其長軸ヲ回轉シテ小彎ヲ後方ニ向ケ、大彎ヲ前方ニ轉ジテ前腹壁ニ接セシム。

噴門ハ横隔膜ノ下面第十一胸椎ノ高サニ在リテ食管ニ連リ、胃底ハ左季肋部ニ於テ横隔膜ノ頂ニ接シ噴門ヨリ稍々向ク、後方ハ横隔膜ノ根、左腎及左副腎ニ接シ、丘方ハ脾ニ接ス、中部即體ハ脊柱横隔膜ノ椎骨部脾ノ前側ニ在リ、上方ハ脾ニ接ハレ、前下方ハ横行結腸、結腸左彎曲及大腸ニ接ス。

幽門ハ後腹壁ニ位シ、第一腰椎ノ右方ニ位シ、十二指腸ニ連ルト雖モ、空虛ニ由リテ其長徑ヲ變ズルヲ以テ收縮時ニハ左方、擴張時ニハ右方ニ移動ス、幽門トナシ指腸トノ間ニ幽門瓣ヲ具ヘ、食物逆流防止ノ用ニ供ス。

胃ノ構造ハ粘衣膜、粘衣膜組織及漿衣膜ヨリ成ル、粘衣膜ニハ級莖ヲ生ジ、其ノ間ニ小窩ト稱スル小陥凹部アリ、其陥凹部ニ二種ノ腺ヲ有ス、胃體及胃底

胃底及胃體ノ腺
胃底腺
胃體腺
胃腸管ノ腺

ニ存在スルヲ胃底腺（胃体腺）ト稱シ、單管狀腺ナリ、其細胞ハペプトシヨリ分泌スル主細胞及塩酸ヲ分泌スル被細胞ノ二種ナリ。又幽門ニ存ズルヲ幽門腺ト稱シ、單管狀管狀腺ナリ、其細胞ハ主細胞ニシテ粘衣ヲ分泌ス、其ノ分泌管ハ其ニ粘衣膜ノ表面ニ存在スル無數ノ小窩凹部、即胃小窩ニ開口ス。

(五) 腸管

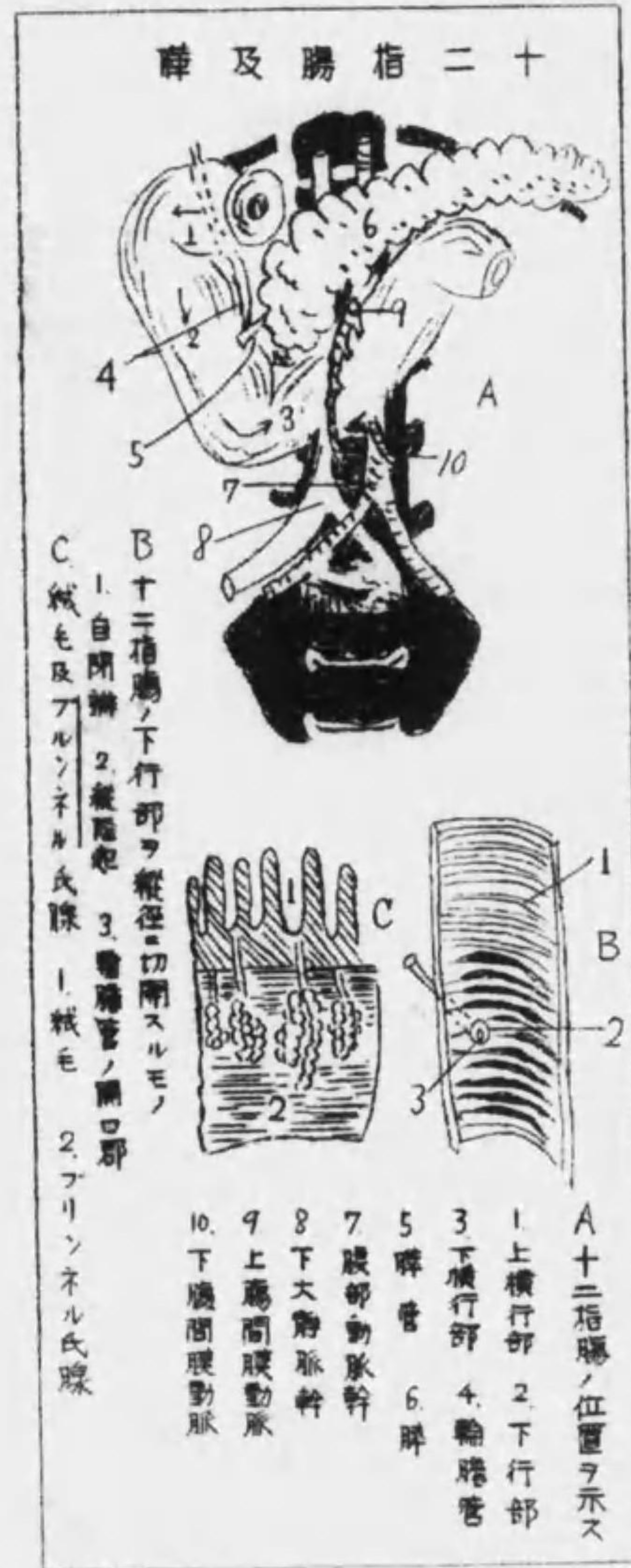
腸管ノ長サハ大約身長ノ六倍ニシテ、長圓筒狀ノ膜管ナリ、之ヲ別々テ大腸及小腸トナス。

A 小腸

小腸ハ胃ノ幽門端ニ續キ、第一腰椎ノ側面ニ於テ始マリ、多数ノ紆回ヲ爲シ、後ニ右腸骨窩ニ達シ、此ニ於テ大腸ニ移行ス、其長サ約ソ六米ニ達シ、轉ラ腹腔ノ中央部及下部ヲ占メ、其ノ上部及兩側ハ弓狀ノ大腸ヨリ取捲カル、然シテ上部ハ後腹壁ニ附屬シ、其他ハ腸間膜ヲ以テ遊離的ニ後腹壁ニ連ル、故ニ腸間膜ナキ十二指腸ヲ除キ、餘ヲ腸間膜小腸ト云ヒ、其ノ上半ハ空腸ニシテ、下半ヲ迴腸ト云フ。

(圖 十 八 百 第)

二十指腸及痔



一十二指腸 ハ小腸ノ始端ニシテ頗ル厚ク、胃ノ幽門ニ起リ十二指腸徑ノ長サヲ有シ、以テ流ク後腹壁ニ連接シ、馬蹄鐘狀ニ彎曲シ、痔管ヲ圍繞ス、之ヲ三部ニ分ツ、横行部、下行部及上行部即是ナリ、横行部ハ脊柱ノ右方ヲ殆ド水平ニ走り直角ヲ以テ下行部ニ連ル、下行部ハ右脇ノ前ヲ下リ第三腰椎ノ高サニ於テ銳角ヲ以テ上行部ニ連ル、上行部ハ第三腰椎及大血管ノ前ヲ左上方ニ走り、前側ヲ上腸間膜動脈下リ其鞘ヨリ滑平筋起リテ

小腸ノ血管ハ腹動脈管ノ分枝下腸間膜動脈及上腸間膜動脈及痔管ノ神經ハ迷走神經交感神經

上行部ノ始部ニ附屬ス、之ヲ十二指腸長筋ト云フ、此部ノ終端ハ十二指腸空腸屈曲ニヨリテ空腸ト境ス、而シテ十二指腸中最も注意スベキハ下行部ノ後壁ニ於ケル輸腸管ノ開口部ナリ、其ノ部ハ僅ニ隆起ヲ呈ス、是レ十二指腸乳頭ナリトス。

二、空腸 ハ上端十二指腸ノ上行部ヨリ始まり、迂曲回轉シテ劃然タル境界ナラシテ迴腸ニ移行ス、此部ハ常ニ空虚時多キヲ以テ空腸ト名ト稱シ、腸部及左腸骨高ニ在リ口徑大ニシテ管壁厚ク血管ニ富ミ、粘膜ノ皺壁及絨毛多シ、三、迴腸 ハ即チ空腸ノ下部ニシテ、別ニ經界アルニアラス、只其ノ轉々屈曲ノ看用ナルヲ以テ區別スルモノナリ、但シ末端ハ右腸骨窩内ニ至リ大腸ノ始部即チ盲腸ニ開口シ、茲ニ粘液腺皺壁アリ、之ヲバウヒン氏瓣又ハ迴言瓣ト名ス、是ハ腸含有物ノ逆流ヲ防止スルモノナリ。

B 大腸

大腸ハ迴腸ニ續キ右腸骨窩ヨリ起リ、上方ニ向ヒ肝ノ下面ニ産シ、茲ニ於テ横ニ走り脾ノ下端ニ来リ、更ニ下行シテ左腸骨窩ヲ通過シ、骨盤ニ入り直腸ニ移行シ、遂ニ肛門ニ終ル、大腸ハ小腸ヨリモ短大ニシテ、全腸ノ五分ノ一ヲ占メ、

之ヲ別ケテ盲腸、結腸及直腸ノ三部トス。

一、盲腸 ハ上行結腸ノ下部、盲腸袢裂孔ノ下方、盲端ノ部分ニシテ、右腸骨窩ニ於テ腸骨筋膜ニ連リ粘々擴張シ、周圍ハ腹膜ヨリ覆ハレ、後壁ノ下部ヨリ腸大ノ長突起ヲ出ス、之ヲ盲様突起ト云フ、是レ腸ノ退化シタル部分ニシテ、弱ク螺旋状ニ彎曲シ、長サ約二乃至二十厘米ノ間ニアリ、其内口ハ小口ヲ以テ盲腸ニ開キ、下端ハ盲端ニ終リ、口縁ニハ小ナル齒様突起袢ヲ備ヘ、固石ノ腸固膜ヲ以テ腸骨筋膜ト連リ、粘膜ニハ許多ノ孤節ヲ有ス、上方ハ直々ニ上行結腸ニ連結シ、左側ハ二個ノ粘膜袢ヲ以テ迴腸ト施ス。

二、結腸 ハ大腸ノ大部分ヲ占メ後腹壁ノ周圍ヲ馬蹄鉄状ニ迴旋スルモノニシテ、之ヲ更ニ上行結腸、横行結腸、下行結腸及S字状結腸ニ分ツ。

(A) 上行結腸 ハ盲腸ノ上ヨリ殆ド鉛直ニ右腸骨棘ヲ越エテ右腎ノ下ヲ昇リ、肝ノ下面ニ於テ前方ニ向ヒ、忽然左方ニ屈折シテ横行結腸トナル。

(B) 横行結腸 ハ結腸右彎曲ヨリ肝及胃ノ下際ヲ左方ニ走り、左季肋部ニ於テ左腎ノ前脾ノ下側ニ於テ結腸左屈曲ヲ以テ下行結腸トナル。

(C) 下行結腸 ハ左屈曲ヨリ左腎及左方形腰筋膜及左腸骨筋膜ノ前側ヲ下リ、

左腸骨窩ニ於テS字状結腸トナル。

(D) S字結腸 ハ多クハ短キ蹄係ヲ爲シ、薦骨脚ノ左側ニ右ウテ小骨盤中ニ下リ直腸ニ移行ス。

三、直腸 ハ結腸ノ連續ニシテ、小骨盤内ニ位シ着明ナル境界ナク、左薦腸間節ニ於テS字状結腸ノ下端ニ始マリ、薦骨ノ前面ニ沿ウテ下降シ遂ニ肛門ニ終ル、肛門ノ直上部ハ稍擴張ス、之ヲ直腸膨大ト云フ、而シテ直腸ノ下端ハ着シイ輪狀筋環連シテ内肛門括約筋ト成リ、下端外側ハ横紋筋ヨリ成ル外肛門括約筋アリ。

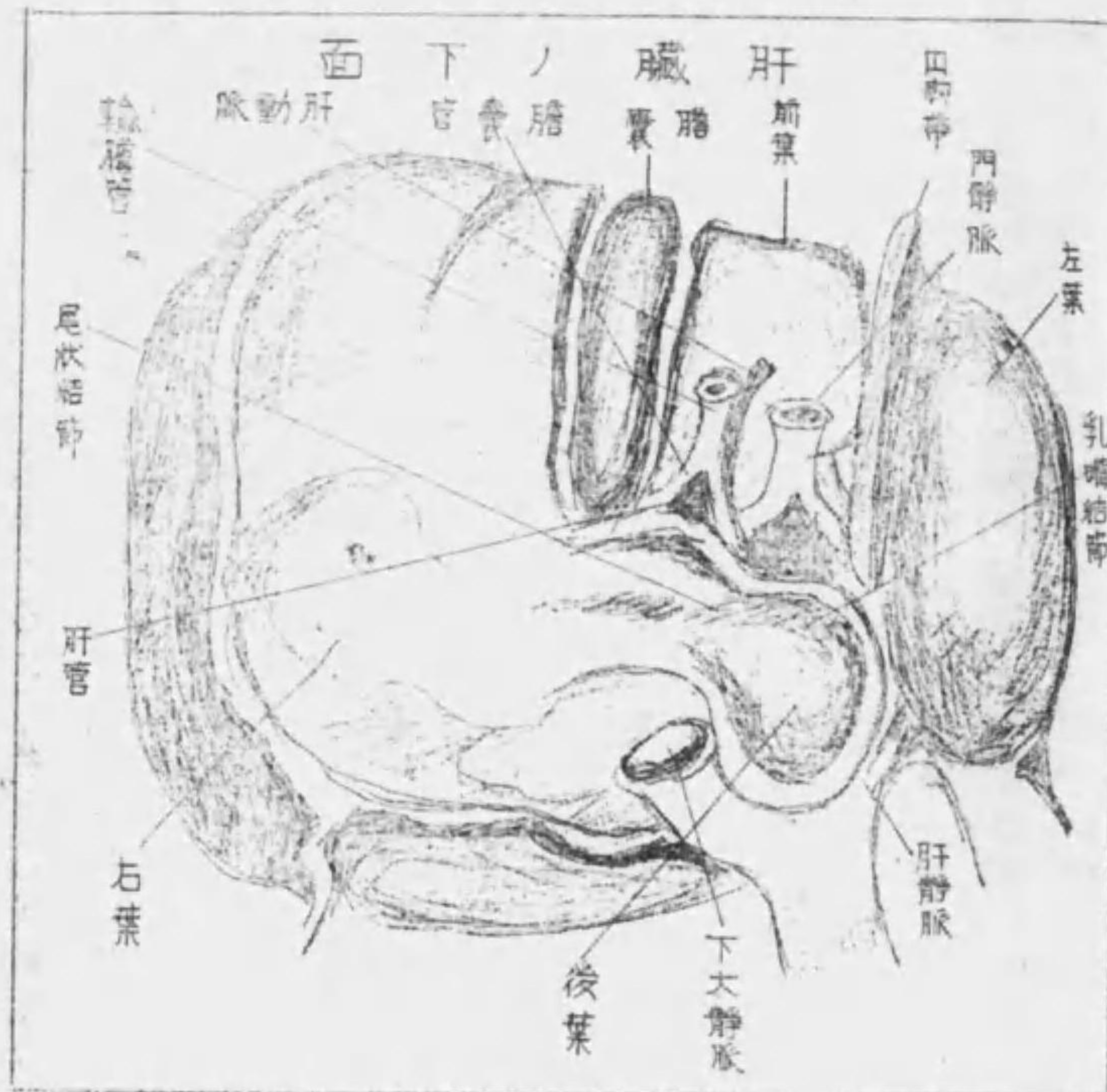
腸管ノ構造 大腸及小腸トモニ粘衣膜、粘衣膜下組織、筋織膜及漿液膜ヨリ成ルモノニシテ、其筋織膜ハ外縦横維層ト内輪狀纖維層ノ二層ニシテ、漿液膜ハ環膜ノ一系ナリ、粘衣膜ハ小腸ニテハ輪狀ノ皺壁ヲナシ、大腸ニ於テハ半月状ノ皺壁ヲナシ之ニ由リ腸内面ノ面積ヲ大ナラシム。

腸管諸腺 腸管ニ於ケル結腺ハ分泌腺ト淋巴濾胞即球狀腺ノ二種トナス。

(A) 分泌腺 管狀腺即リーベルキーン氏腺ハ全腸管ニ散布シ、小腸ニ於テハ絨毛ノ間ニ開口ス、葡萄狀腺即アルンネル氏腺ハ特ニ十二指腸ノ上半部ニ存在スル

大腸ノ血管ハ下
腸間膜ノ上層
系中腔部動脈ノ
下清動脈靜脈
下腸間膜
腸門動脈ニ入ル
脾動脈ハ大腸及副
不感神經ノ管腔
神經

(圖一十八百第)



後方ニ向フ。
 上面ハ凸溝ニシテ桶隔膜ノ陷凹面ニ接ス、左方ニ幽微ナル心室痕ヲ現ハシ、茲ニ腹膜ノ竅壁アリテ横膈膜ニ連接ス、之ヲ鏡狀軟帶ト云ヒ、是ニ由テ大ナル右葉ト小ナル左葉ニ分ツ。
 下面ハ稍々凹陷シテ不規則ナル長方形ヲ呈シ、四隅ハ圓形ヲ帶ブ、此面ニH字形ノ溝アリ、其二個ノ長脚ハ矢狀ニ走ル之ヲ左及右矢狀窩ト云フ、左

(六) 肝臟

ヲ以テ、又十二指腸腺ト稱シ、何レモ腸液ヲ分泌ス。
 ⑤ 球狀腺 粘液膜組織ニハ淋巴濾胞ヲ有ス、此ノ濾胞ハ一個存在スルモノ即珙腺ト、多数集合シテ存在スルモノ即集腺若クハハイエル氏腺トニケル、後者ハ只迴腸ニノミ存在シ、其ニ粘液膜ノ表面ニ突隆シ濾胞ノ在ル所ハ絨毛ナリ、ハイエル氏腺ノアル處ハ又輪狀皺壁ヲ缺ク、而シテ小腸粘膜面ノ表面ニハ糸狀又ハ葉狀ヲ成セル小突起アリ、之ヲ絨毛ト名ケ、空腸ニ於テ最モ多ク且大ニシテ迴腸ノ下部ニ至レバ消失ス、又絨毛中ニハ血管及淋巴管ノ一系タル乳糜管アリテ、腸中ノ營養物ヲ吸收スルモノナリ。

肝臟ハ體中最大ノ腺ニシテ、右季肋部ノ全部上腹部及左季肋部ヲ領シ、其分泌物即胆汁ヲ十二指腸ニ注ギ、且ツ膽嚢ニ蓄フ、肝臟ハ此ノ機能ノ外グリコーゲンヲ産出シ、蠶血ノ機能ヲ管ム、其ノ色帶藍赤褐色ニシテ莫稍々硬ク、且ツ破壊シ易シ、形ハ扁平帶圓長方形ニシテ、上面、下面、後面及前縁ヲ現ハシ、石方ハ厚クシテ容積多ク、左方ハ漸次減少シ、前後ハ低ク且ツ薄ク、下面ハ少シク

矢状高前端ノ截痕ヲ臍截痕ト名ク、稀ニ石矢状高ニモ同形ノ截痕ヲ存スルコトアリ、此ニ清ヲ連續スル横窩ヲ肝門ト稱ス、右矢状高ノ前部ハ臍囊ノ前部ニシテ、後部ハ僅ニ下大静脈ノ通路ナリ、又左矢状溝ハ狭ク、前部ハ膈帯ヲ受容シ、後部ハ静脈横窩ヲ通過ス、又下面ハH字状溝ニ由リテ四葉ニ分ル、即石葉、左葉、前葉、後葉是ナリ、右葉ハ最も厚大ニシテ上行結腸ノ彎曲及右腎ニ隣接シ、左葉ハ頗ル狭小ニシテ胃ノ一部ヲ覆ヒ扁平ヲ呈ス、前葉ハ方形ニシテ横溝ノ前部ニ位シ、後葉若クハスピゲリト云フ、右葉ハ最も小ニシテ横溝ニ向ヒ、左右二個ノ結節ヲ呈ス、甲ヲ乳嘴結節ト云ヒ、乙ヲ尾状結節ト云フ、肝門ハ肝管、門静脈、肝動脈及神経ノ出入スル部分ニシテ、就中門静脈ハ最も大ニシテ最後カニ位シ、肝管ハ最小ニシテ最前ニ在リ、凡テ是等ハ肝十二指腸軟帶ヲ昇リ、肝門ニ於テ二枝ニ分レ、右葉及左葉ニ白ツテ肝実質ニ入り、自後実質内ニ於テ漸次分歧ス、

後面ハ結締組織ヲ横隔腰椎背節ト連結シテ腹膜外ニアリ、椎柱ニ對シ深キ截痕ヲ爲シ、肝静脈ハ二三ノ大幹ヲ以テ其上部ヨリ出テテ直ニ下大静脈ニ連ル、前縁ハ銳利ニシテ遊離シ、左右二個ノ截痕ヲ呈ス、甲ヲ膈帶静脈截痕ト云ヒ、乙ヲ臍囊截痕ト云フ、

肝臓ノ構造 肝臓ハ複雑ナル複管狀腺ニ屬シ、固有膜、血管、肝細胞及排泄管ヨリ成ル、其表面ハ固有膜ノ結締組織及彈力組織ヨリ被ハレ、肝実質中ニハ一二ノ核ヲ持スル多クノ肝細胞アリテ、其細胞間ヨリ細小管ヲ生ジ、遂ニ小管多ク集合シテ大ナル排泄トナリ、左右合シテ肝門ヨリ出ヅ、之ヲ肝管ト云フ、是レ肝実質中ニテ分泌セラレタル膽汁ヲ、臍囊ニ輸送スルノ管ナリ、血管ハ門静脈及肝動脈ニシテ殊ニ門脈ハ消化管及脾臓ヨリ歸流スル静脈ノ集合シタル大管ニシテ、肝毛細管ヲ經テ肝静脈トナリ下大静脈ニ注グ、而シテ門脈血中ニハ腎腸ヨリ吸収シタル新舊養物ヲ含ミ、肝毛細管ヲ通過スル際肝細胞ノ作用ニ由リテ一定ノ変化ヲ受ケシメ、肝静脈ヨリ下大静脈中ニ流入ス、

○ 臍囊

臍囊ハ肝臓下面ノ臍囊窩中ニ位シ、長梨子状形ヲ呈シ、其先端ハ臍袋底ト稱シ、下前右方ニ向ヒ彎々肝臓前縁ヲ超テ突出ス、又其反對端ハ臍囊頭ト稱シ、底部ニ反對ノ方向ヲ指シ、且ツ狭小ナル臍囊ノ上面ハ結締組織ニ由リ臍囊高ニ附屬シ、下面ハ腹膜ヨリ被ハル、臍囊底ハ下肋骨弓ノ直下石第九肋軟骨ノ高サニテ直

喉頭ノ構造
上及下喉頭
神經ノ枝ナル
神經ノ末梢
神經ノ末梢

一 活ルヲ以テ破裂間隙ト云フ。側方ハ破裂會厭軟骨アリ。喉頭口ハ前庭ノ部ヨリ環繞セラレ、帶圓長菱形ヲナシテ鉛直ニ位シ種々ニ變形ス。中部即中間喉頭腔ハ聲帶ニシテ、兩側ニ上下二箇ノ裂壁アリ。上裂壁ハ假聲帶ト云ヒ、下裂壁ハ真聲帶ト云フ。而シテ兩上裂壁間ノ間隙ヲ假聲門ト稱シ、兩下裂壁間ノ間隙ヲ聲門ト云フ。上下裂壁ノ間ヨリ側方ニ擴張シタル深窩ヲ喉頭室ト名ケ、入口ヲ室門ト云フ。室底ハ甲状軟骨ノ内面ニ達シ上方ニ彎曲シテ、甲状軟骨ト空裂壁ノ間ニ延及シ甲状軟骨ノ上縁ノ高サニ達シ、或ハ其上ヲ越ユルコトアリ。假聲門ハ廣ク其間隙ヨリ氣聲帶ヲ檢シ得ベシ。聲門ハ即真聲帶ニシテ真聲帶ノ後縁ヲ以テ境シ、後方歪狀軟骨ノ間ニ延長ス。此部ヲ呼吸門ト名ク、之ニ對シテ前方聲帶ノ間ヲ聲門又ハ喉門部ト云フ。聲門ノ形狀ハ柳葉形或ハ長菱形ニシテ、前端ハ微ク後端ハ鈍シ。而シテ安靜呼吸時ニ於テハ開大ニシテ三角形ヲ呈シテ、發聲時ハ狭小ナル裂隙ニ變ス。下部即下喉頭腔ハ上中兩腔ニ比スレバ其構造最モ簡單ニシテ、粘膜ニハ副裂壁アリ、而シテ此部ハ圓錐形ヲ呈シ、下方ニ向ツテ擴張シ、氣管腔ニ移行ス。上方ハ兩壁漸々接近シテ聲帶ノ遊離縁ニ終ル。

喉頭ノ構造
上及下喉頭
神經ノ枝ナル
神經ノ末梢
神經ノ末梢

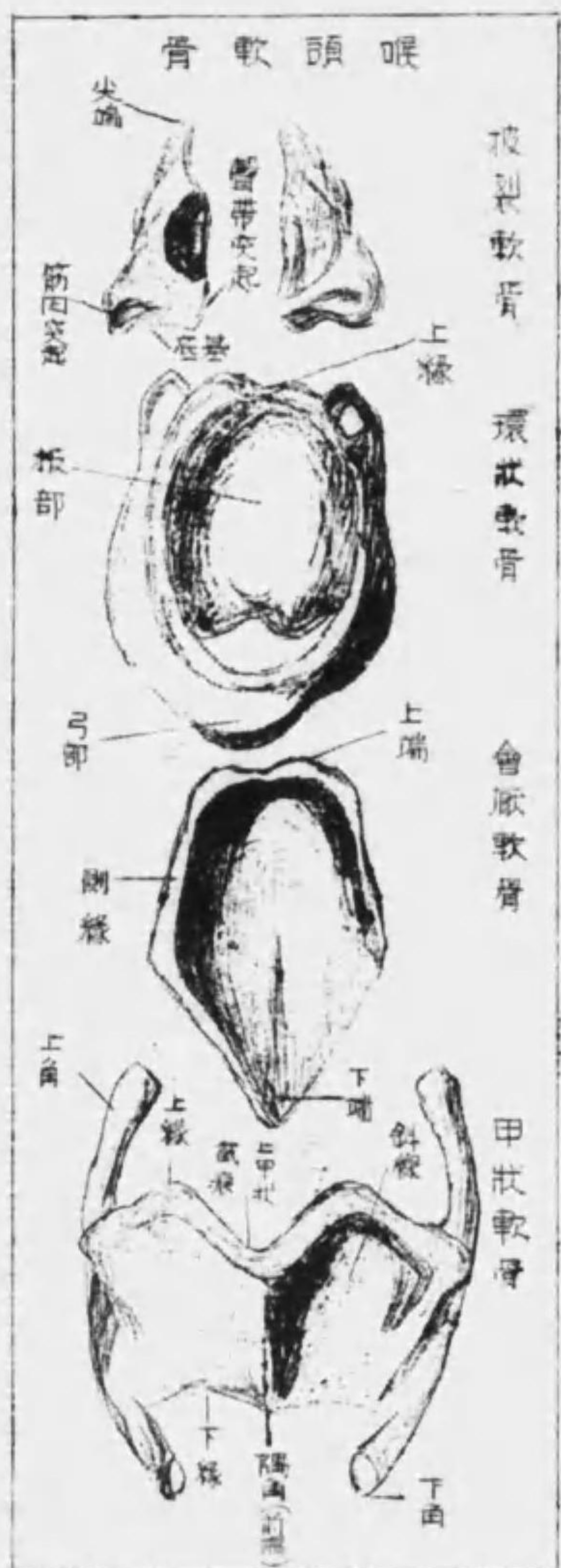
喉頭ノ構造
喉頭ハ軟骨、筋、筋肉及粘液膜ヨリ成ル。而シテ軟骨ハ喉頭ノ基礎ニシテ、其數九個アリ別テ有對及無對ノ二層トス。

(1) 喉頭ノ軟骨

A. 無對軟骨

一 甲状軟骨。ハ喉頭ノ前側部ニシテ或兩層ヲ以テ互ニ癒合シタル二枚ノ方形板ヨリ成ル。兩板ノ會合シタル正中線ハ前方ニ突出シテ隅角ヲ爲ス。之ヲ喉頭結節ト云フ。婦人及小兒ニ於テハ顯明ナラズ。其上方ノ深キ截痕ヲ上甲状軟骨截痕

(圖 二 十 八 百 第)

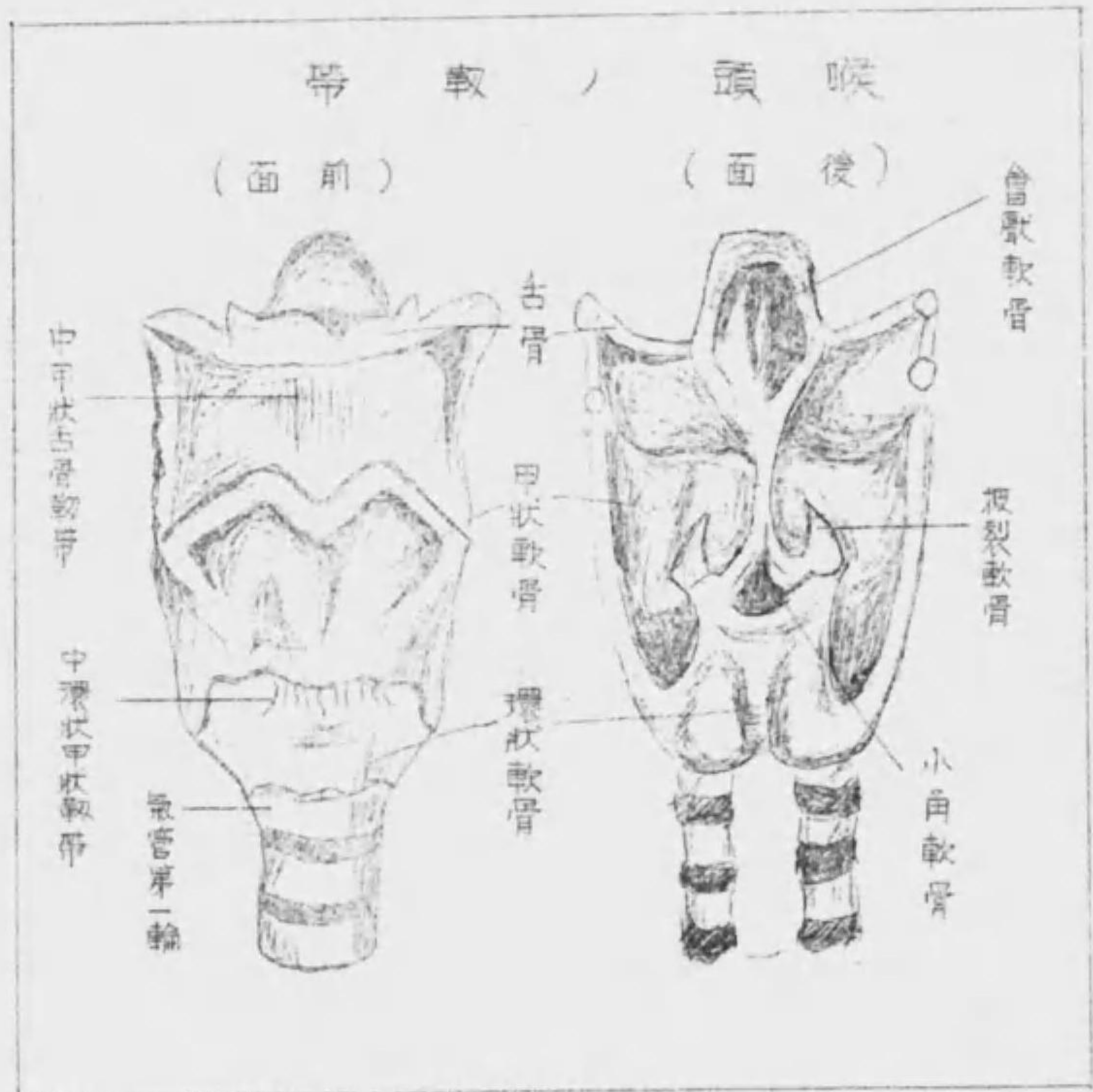


披裂軟骨

環狀軟骨

會厭軟骨

甲状軟骨



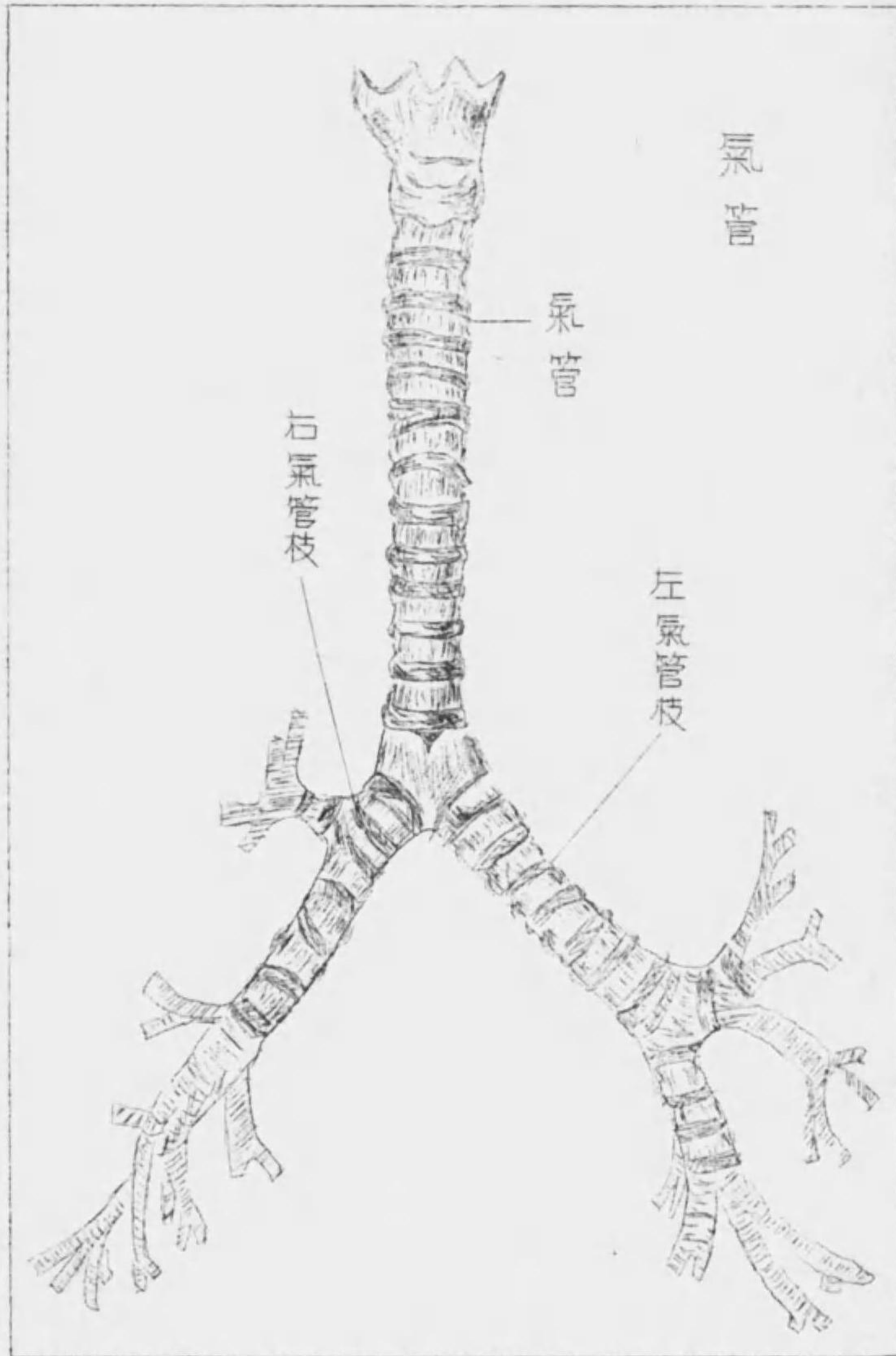
(2) 喉頭ノ軟帯及筋肉
 A. 喉頭ノ軟帯 ハ軟骨
 連接、喉頭連接及舌門
 連接等ノ種類アリテ、
 軟骨相互ノ連續ヲ保持
 シ、或ハ喉頭ト舌骨、
 或ハ喉頭ト氣管ヲ連續
 セシムルモノニシテ、
 軟骨或ハ關節或ハ軟骨
 接合ヲ以テ相固可シ、
 或ハ唯軟帯ヲ以テ互ニ
 連續ス然レドモ、繁雜
 ヲ避ケテ今茲ニ其體類
 ヲ説カズ。
 B. 喉頭筋ハ喉頭ト隣接シ

ト名フ、又後縁ハ鈍圓ニシテ上下ニ延長シ、上及下角ヲ爲ス、就中下角ハ短ク
 末端環狀軟骨關節面ヲ有ス。
 二、環狀軟骨 ハ喉頭ノ最下部ニシテ、形狀ハ印章ヲ具シタル指環ノ如シ、前ハ
 細ク甲狀軟骨ノ下ニシテ後方ハ廣ク甲狀軟骨板ノ間ニ位ス、其上縁ハ披裂軟骨
 ト關節ノ、外則ニ於テハ甲狀軟骨ト關節ス、下ハ氣管軟骨ニ連ル。
 三、會厭軟骨 ハ匙状ヲ呈シテ甲狀軟骨ノ内面ヨリ舌根ノ後下部ニ突産ス、元
 可動性ナルヲ以テ嚥下ノ際ハ屈折シテ喉頭口ヲ閉鎖シ、辨ノ作用ヲナス、
 通常ノ場合ハ舌根ノ後方ニ於テ上方ニ彎ユ。

B. 有對軟骨

一、披裂軟骨 (歪狀軟骨) 喉頭ノ後上部ニシテ即環狀軟骨板ノ上際ニ在リ、形狀ハ
 三面錐體ノ小軟骨ニシテ、尖端ハ小角軟骨ト連接ス。
 二、小角軟骨 ハ圓錐形ノ小軟骨ニシテ、披裂軟骨ノ上ニアリ、尖端ハ下方ニ向
 フ。
 三、楔狀軟骨 ハ扁平ナル小軟骨ニシテ、披裂會厭軟骨ト橋スル粘液膜級壁中ニ
 存スルモノニシテ、小角軟骨ノ前方ニ在リ。

(四 四 十 八 百 第)



(345)

器官トノ間ニ在リテ、喉頭全部ニ作用スルモノト、喉頭軟骨ノ間ニ渡リテ軟骨
 互ノ位置ヲ変ゼシメ、又ハ專ラ喉頭ノ弛張ヲ司ルモノトノ二種アリ、前者ハ舌
 筋及咽頭筋ニシテ、後者ハ即固有ノ喉頭筋ナリ。

(二) 氣管及氣管枝

氣管ハ喉頭ノ直下第七頸椎ノ高サニ起リテ胸腔中ニ入り、第四胸椎ノ高サニ於
 テ二個ノ小管ニ分歧ス、是レ即左右ノ氣管枝ニシテ、右自左右ノ肺尖部中ニ入
 ル、其氣管枝トノ分歧點ニ於テ大動脈弓ト交又ス、長サハ成人ニ在リテハ九尺
 至十五寸、幅一五乃至二七種ナリ、其前大部ハ軟骨輪ト之ヲ連續スル結締組織
 ヲリ成ルヲ以テ、極メテ強固ナリ、後小部ハ軟骨輪ヲ缺如シ、且ツ扁平トナル
 此部ヲ氣管膜様部ト名ク、氣管軟骨ハ扁平ニシテC字形ニ彎曲シ、其數一六乃
 至二十個アリ、
 氣管ノ後方ニハ食道アリ、然レドモ頸部ヲ下ルニ從ヒ食道ハ稍々左方ヘ寄り、
 尚下方ニ至レバ左氣管枝ノ後側ヲ下ル、又第二乃至第五頸椎軟骨ノ前面ニハ甲
 狀腺岐アリ、而シテ此腺ノ側葉ハ氣管ノ上外側ヲ擁ス、小兒ニアリテハ具外胸

氣管、動脈、
 下甲狀腺動
 脈、上下葉
 支動脈、和
 ハ、迷走神經
 下喉頭神經
 之交感神經

骨ト氣管トノ間ニ胸腺アリ。
 右氣管枝ハ始ト直前ヲ以テ互ニ分岐シ、各分下方ニ走リテ所屬ノ肺中ニ入ル
 而シテ其長短大小方向及周圍諸臟ニ對スル關係ニ就テハ左右各異アリ、即右
 氣管枝ハ廣短ニシテ峻シク下リ儘ニ屈折シテ右肺門ニ達ス、而シテ奇形氣管枝
 方ヨリ其上方ヲ過ギテ下大靜脈ニ注ギ、右肺動脈ハ始メハ其下方ニ在レシモ遂
 ニ其前方ニ至ル、左氣管枝ハ亦長ニシテ不動脈弓ノ下方ヲ外下方ニ至リ、其
 二、蓋シ左肺門ハ右肺門ニ比スレバニ、三種程低下スルモノトス、其他右氣管枝
 ハ食道及胸部大動脈ノ前方ヲ走リ、又ハ動脈弓ハ左氣管枝ヲ起工テ左後方ニ走
 ルモノナリ。

氣管及氣管枝ノ構造、管壁ハ粘痰、粘痰膜、下結核、肺組織、軟骨及纖維層ヨリ
 成リ、粘痰膜ハ彈力纖維及淋己細胞ニ富ミタル纖維性結構組織ニシテ、血管ノ
 髓モ上皮ヨリ成ル、粘痰膜下組織ハ鬆組織、結締組織ニシテ脂肪、線、血管、神經
 ヲ含ミ、軟骨ハ硝子軟骨ニシテ其數十六乃至二十個アリ、軟骨膜ニ包リテ置
 ハレ、右氣管枝ハ六個乃至八個ヲ有シ、左氣管枝ニ於テハ九乃至十二個ノ管ヲ
 柱來ス筋纖維ハ膜樣節ニ於テ稍々厚キ内積定ト薄キ外縱走滑平筋ニシテ、主ニ

後壁ヲ構成ス、纖維膜ニ彈力纖維ヲ含ミタル結締組織層ニシテ、軟骨並ニ筋層
 ノ外面ヲ被フ。

(三) 肺 臟

肺ハ胸腔内ヲ充タシタル大ナル彈力性器官ニシテ、左右二個アリ、一ハ心臟及
 大血管ノ右側ニ位シ、一ハ同ジク其左側ニ位シ、其ニ表面ハ胸膜ニ被ハレテ胸
 壁ニ密接ス、形狀ハ橫截シタル圓錐ニ類似シ、灰白色ヲ帶ブ、其底面ハ下方ニ
 向ヒ、内側ハ陷凹ス、而シテ此底面ヲ肺底ト稱シ、橫膈膜頂ノ穹隆ニ一致シテ
 陷凹ス、其面ヲ橫膈面ト云フ、底面ノ外縁ハ凸隆シ内縁ハ凹陷ス、而シテ其銳
 利縁ヲ肺下邊ト云フ。

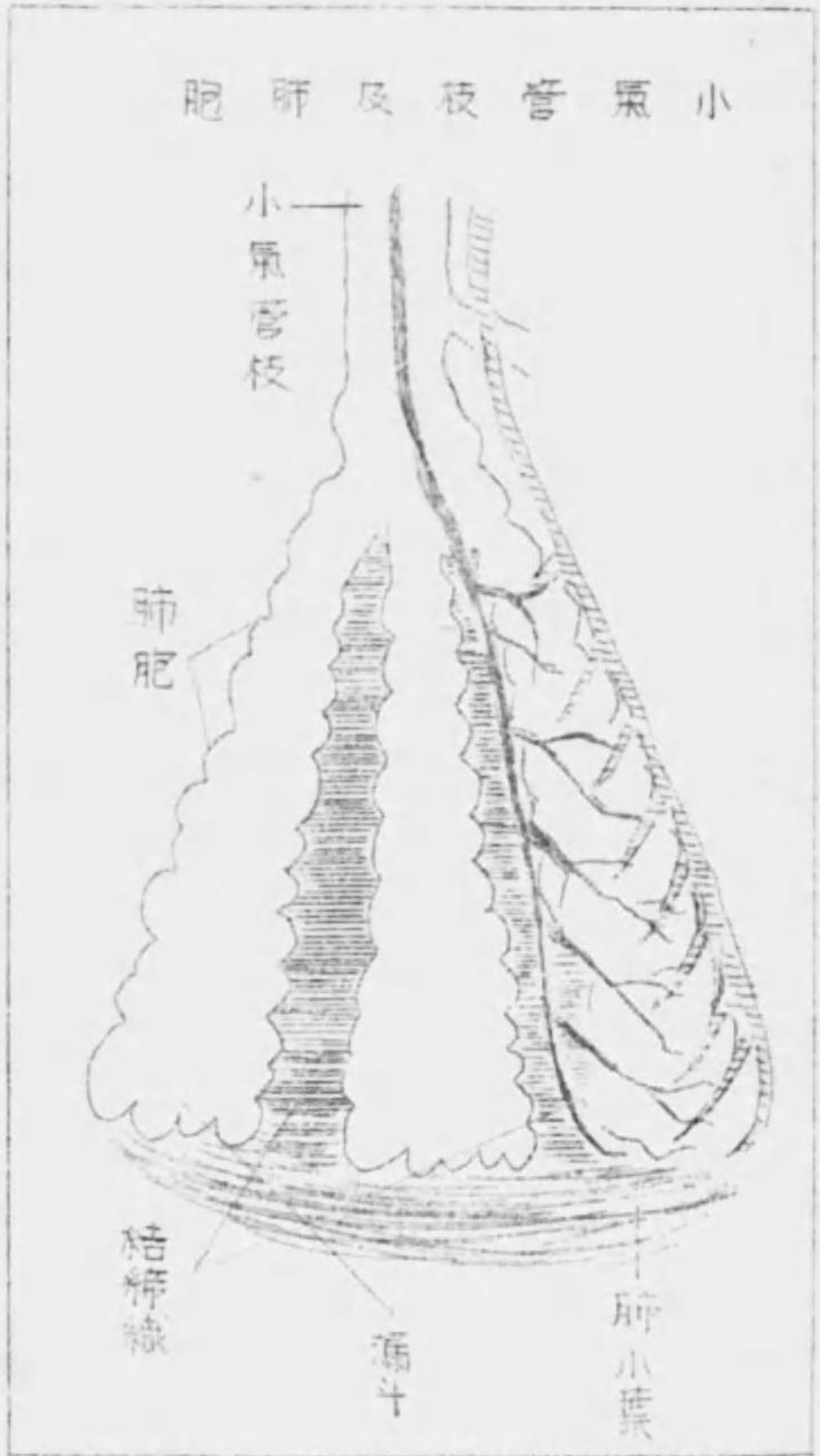
又肺ノ尖端ハ之ヲ肺尖ト稱シ、第一肋骨縁ヲ越工テ鎖骨ノ上方約一指幅徑ノ高
 サニ達ス、鎖骨下動脈ハ其肺尖ノ上ヲ横過シ、此處ニ輕度ノ壓痕ヲ生ズ、之
 ヲ肺ノ鎖骨下動脈溝ト云フ。
 肺ノ外面ハ之ヲ肋骨面ト稱シ、凸隆シテ胸壁ニ密接シ、後縁ハ銳ニシテ前縁ハ鈍
 ナリ、而シテ此兩縁ハ外面及内面トノ境界タリ、左肺ノ前縁ハ心臟ニ相對シテ

(圖 五 十 八 百 第)



多小陷凹ス、
 兩肺ノ面ハ陷凹シ心囊
 ヲ狭ム、就中左肺ニ於
 テハ殊ニ深シ、之ヲ心
 壓痕ト云フ、又内面ヨ
 リ少シク上方ニ於テハ
 氣管枝及血管ノ肺中ニ
 出入スル部アリ之ヲ肺
 門ト云ヒ、氣管枝及
 血管ヲ總括シテ肺根ト
 稱ス、又左肺葉切ノ内
 面ニ移行スル部分ニハ
 大動脈溝ト稱スル從價
 アリ、是レ切部大動脈
 幹ノ爲ニ生ズルモノナ
 リ、之ト同ク
 フ右肺ノ上前
 部ニ於テ上大
 動脈幹ニ從價
 ル同名溝アリ
 テ、下部ニハ
 食道溝ト稱ス
 ル壓痕ヨリ生
 ス、
 肺ノ表面ハ深

(圖 六 十 八 百 第)



ク石肺ノ上前
 部ニ於テ上大
 動脈幹ニ從價
 ル同名溝アリ
 テ、下部ニハ
 食道溝ト稱ス
 ル壓痕ヨリ生
 ス、
 肺ノ表面ハ深

キ結連ニ由リテ上葉及下葉トニ分ル、此溝ヲ葉間裂ト名ク、其ニ隣ハ葉間窩
 ニ謂ニシテ肺尖ヨリ約三指許下方ニアリ、夫ヨリ外面ヨリ内下方ニ走り下葉ニ於
 テ正中線ノ外方約四指ヲ距リタル部ニ於テ終リ、左肺ニ於テハ心壓痕ノ外方ニ
 終ルヲ以テ、上葉ニ於テ壓痕トノ間ニ舌狀部ヲ生ジ、右肺ハ尚一ノ葉間裂ニ
 二由リテ上葉ヲ二分ス、其下半ヲ中葉ト云フ、故ニ右肺ハ三葉ニシテ、左肺ハ
 (345)

二葉ナリ左右兩肺ハ肺葉散環ノ點ニ於テ相異ナル而已ナラズ、尚形狀モ同ジカラズ、即右肺ハ左肺ニ比スレバ短クシテ太ク、左肺ハ狭小ナリ、肺ハ幼童ニ於テハ帶紅灰白色ヲ呈シ、年齡ヲ重ルニ從ツテ暗褐色ノ斑點及線紋増加シ次第ニ黑色ニ變化ス、

肺及小氣管枝ノ構造 肺ハ一種ノ複胞狀腺ニシテ表面ニ無數ノ多角形小區如ク現ハス、是レ葉間區分ノ表面ニ現ハレタル部ニシテ、之ヲ肺小葉ト云フ、肺ハ氣管枝、血管、淋巴管、神經及是等ヲ連結スル結締組織ヨリ成ル、小氣管枝ハ銳角或ハ直角ヲ以テ漸々樹枝ノ如ク分歧スト雖モ、巨ニ吻合スルコトナク、細小部ニ至レバ少數ノ氣胞其壁ニ現ハル、此部ヲ呼吸的小氣管枝ト云フ、氣胞ハ半球形ノ小胞ニシテ廣キ口ヲ以テ氣管枝ニ連ル、其壁ハ甚ダ菲薄ニシテ内面ハ扁平上皮ヲ被リテ大氣ニ滿テ外面ハ毛細管ノ血液ニ接シ、是ニ於テ血液及新交換ヲ營ムモノナリ、氣管枝ハ尙分歧スルニ從ヒ氣胞モ隨ツテ増加ス、末端ハ同壁悉ク氣胞ヲ以テ包圍シタル小囊ニ終ル、之ヲ漏斗ト稱ス、

○ 肋 膜 (胸膜)

胸膜ハ胸壁ノ表面ニシテ、之ト密着セル二個ノ漿液膜囊ニシテ種々ノ形狀ヲ呈

スル内皮細胞ヨリ成リ、結締織及彈力纖維網ヲ有ス、之ヲ内外ノ二葉ニ區別ス、内葉即肺胸膜若クハ内臟板ハ肺實質ニ密着シ、外葉即体壁胸膜ハ胸腔内面ヲ被リシ、二葉ノ遊離面ハ相接着スト雖モ其間ニ小量ノ漿液ヲ含ミ自ラ腔洞ヲ爲ス、之ヲ胸膜腔ト云フ、外葉ヲ更ニ區別シテ肋胸膜及橫隔胸膜トシ、又肺ノ内面ニ向ヒタル部ヲ縱隔胸膜ト云ヒ、其心囊ト卷着シタル部分ヲ心囊胸膜ト名ス、兩側ノ縱隔胸膜ノ間ニ心囊占居シ、其前後及上方ニ空隙ヲ成ス、之ヲ前後上ノ縱隔洞ト云フ、

内外二葉ノ移行部ハ肺根ニシテ、下方ハ肺韌帶ト成リ肺ト縱隔膜ノ間ヲ下リ橫隔腔ニ連ル、胸膜腔ノ上端ハ胸腔上口ニ出テ、下界ハ弓形線ヲ爲ス、此線ハ第六軟骨ノ胸骨端ヨリ始マリ、下七個ノ肋骨及肋軟骨ノ境界ヲ經テ第十二肋骨ノ頸ニ達ス、前界ハ胸骨ノ後面ニ於テ左右相接近シテ縱線ヲ爲シ、上方ハ胸骨柄ノ後側ニ於テ互ニ隔離シ、右側ハ第六肋軟骨附著部並直ニ下ルト雖モ、左方ハ第四肋軟骨内端ヨリ外方ニ彎曲シテ下リ第六肋軟骨ニ達スレバ、右側ト同一トナル、後界ハ脊柱ノ側面ニシテ確然タル境界ナク、縱隔胸膜ニ移行ス、其際右側ニ於テハ食管ノ一節、左側ニ於テハ下行大動脈ヲ掩フ、兩胸膜腔ハ肺ヲ以

自體ノ代謝
産物アル成
酸ハ揮発性
即ニ呼吸ニ
關スルモノ

テ充填シ、毫モ空隙ヲ残サズ、蓋シ深吸氣ヲ爲ミテ著シフ肺ノ擴張シタル際ハ其
表面殆ド全胸壁ニ接スベシト雖モ、交背呼吸時ニ際シテハ胸腹腔ノ前後或ハ下
縁ノ如キ狭小部ニ連スルコトナシ、蓋シ如キ狭小部ハ其壁相接觸シテ深吸氣ノ
際ノミ肺ヲ受容スルヲ以テ、胸腹腔或ハ肺腔ニ名アリ、之ヲ別テテ四種トス、
曰ク横膈肋膈質、即チ縦膈質、横膈腔膈質及心囊腔膈質是ナリ、而シテ横膈肋
膈質ハ肺ノ下縁ニ相當シ、肋膈腔膈質ハ肋膈部ト縦膈部ノ間ニアリ、横膈腔膈
質ハ縦膈膜ノ下縁ト横膈部トノ間ニ介在シ、心囊腔膈質ハ肺ノ心囊腔部ニ連シ、
此縁ト縦膈部トノ間ニ存スル空所ニシテ氣モ心囊ノ前面ニ在ルガ爲ニ斯ク名ク
ル所以ナリ、又縦膈ノ穴弁ニ於テハ後ノ葉ニ連リテ於テ連通ヲ受ケ、肺臟ノ擴
張或ハ收縮ニ際シテハ此等ニ連動スベシ、

丙、肺葉

肺葉ノ上ハ血氣ヲリ流ラシメ、且之ヲ體外ニ排シスルノ爲ナリ、即チ肺ノ輪
尿管、膀胱尿管及尿管ノ四種ヲ云フ、尿ハ腎ヲ以テ血中ヨリ濾出シ、輪尿管ヲ以テ膀胱
ニ輸送シ、之ヨリ尿道ニ由リテ膀胱ニ排シセラル、

故ニ呼吸ニ由リ
テ一新ハ排外ニ
排出サレルト
雖モ含窒素
物ハ多量ノ水
分ニ溶解シテ
尿中ヨリ排外
ニ排シセラル
之ヲ即チ尿ト
ス

圖七十八百第

泌尿系統



一、腎臟

腎臟ハ後腰腔ノ上部ニ於テ豆形ニシテ、脊柱ノ兩側ニ位シ、上ハ第十二胸
椎ノ高サヨリ、第三腰椎ノ上縁ニ及ビ、方形體ノ前部ニ在リ、其形豆狀ヲ
呈シ、暗赤色ヲ帶ビ、外凸隆起、内凹陷、前面、後面、上端、下端等ヲ見

ハス、
腎ノ前面ハ肺々
突産シテ小シク
方ニ向ヒ、正腎
前面ハ上半腎ノ
後面ニ接シ、後
ラ腹ハシ、下半
ハ膀胱及左結腸
曲ト接シ、又外
多小脾ニ接ル石
(353)

腎前面ノ内部ハ十二指腸ノ下部アリ、其下方ハ石結腸彎曲ニ接シ、上部ハ肝ニ被ハレ肝壓痕ヲ預ハス。後面ハ横膈膜方形膜筋、横腹筋及其筋膜等ニ接シ、内方ハ大腰筋ニ接ス。

(354)

(四百八十八圖)



外縁ハ隆起シ外後方ニ於テ後腹壁ニ對シ、上半部ヲ以テ脾ノ下面ニ接ス、内縁ノ中部ハ陷凹シ、下内前方ニ向ヒ此ニ腎門アリ、血管神經及輸尿管ノ出入部タリ、腎門ノ最深部ハ瘦キ縱溝ヲ爲シテ腎實質中ニ陥入ス、之ヲ腎窩ト云フ、腎門ノ前後界ヲ屬ト名ク、後唇ハ前唇ヨリ稍々長シ、腎ハ三個

(四百八十九圖)



ノ膨隆ニ由リテ表面ニ三葉狀ヲ呈シ、特ニハ胎兒腎ノ遺跡トシテ分葉狀ノ外縁ヲ具フルコトアリ、表面ハ結締織性ノ被膜即固有膜ヲ有ス、此膜ハ薄ク強ク剝離シ易イ、腎實質ニ於テ血管ノ鞘ニ移行ス、此膜ノ下層ニ平滑筋ヲ含ミタル一膜アリ、腎質ニ密着シ腎實質ニ於テ腎盂ニ接ス、之ヲ内膜ト云フ、固有膜ノ外圍ハ脂肪組織ヲ以テ覆ハル、脂肪組織ノ外圍ハ液膜下筋ヲ以テ固圍部ニ附屬ス、其

前方ニ在ル部ヲ腎臟前筋膜、後方ニ在ルヲ腎臟後筋膜ト云フ、腎ノ上端ハ副腎ニ接シ少シク内方ニ傾キ、左右兩腎ノ間下端ニ比スレバ遠ニ彎

乳頭ノ先端ニ
 小孔ト稱スル
 小孔アリ此小
 孔ニ乳ヲ小
 孔ニ送リ大
 小ノ大管
 小ノ大管
 小ノ大管

近ス、下端ハ銳ニシ遊離シ、右ハ左ヨリ小シク低シ。

腎ノ實質ヲ横断面ヨリ視スルトキハ皮質及髓質ノ二部分ヨリ成ルヲ知ルベシ。髓質ハ數多ノ圓錐狀小體ヨリ成ル。之ヲ腎圓錐體ト稱ス。其底面ハ腎ノ表面ニ向ヒテ皮質中ニ埋没シ、其尖端ハ腎盂ニ向ヒ輸出管ノ開始點即腎盂中ニ遊離的ニ突出ス。此部ヲ腎乳頭ト云フ。腎盂ノ乳頭周圍ニ附屬スル部分ハ輪狀ノ絞窄部ヲ頭頸ヲ爲ス。而シテ各腎ニハ通常十二個ノ乳頭アリ、或ハ僅ニ七個ニ過キザルコトアリ、或ハ二十個ニ達スルコトアリ。各乳頭殊ニ腎ノ兩端ニ於テハ底面廣々廣大ニシテ側面ニ淺溝ヲ呈シ、一見ニ個或ハ三個ノ乳頭癒合セルニシテ、如シ、又屢々ニ個ノ隣接乳頭相重合スルコト稀ナリトセズ。

皮質ハ纖維膜及内層ノ直下ニ位シ、血管及マルピギー氏小體ヲ含具ス。又突起ヲ出シテ一部圓錐體間ニ延長ス。之ヲヤルテン氏柱或ハ腎柱ト云フ。皮質ハ到ル所殆ト平齊ニシテ僅ニ顆粒狀ヲ呈シ、其色紅褐色ナリ。柔軟ニシテ容易ニ表面ニ屈折ニ屈裂ス。而シテ其維面断面ニ於テ規則正シキ線條ヲ呈シ、放線狀ニ爲シテ圓錐體ノ底面ヨリ表面ニ向ツテ昇ルヲ髓放線、或ハ圓錐突起、或ハマルピギー氏突起ト稱シ。此ニ由テ皮質部ヲ更ニ皮質放線部及彎曲部ニ區別ス。彎曲部ハ顆粒ト稱シ赤色ナリ。

腎ノ神經ハ
 迷走神經
 交感神經

腎臟ノ構造 腎臟ハ複管狀線ニシテ凡ソ百萬ノ小管即細尿管ト血管トヨリ成ル

皮質及髓質ノ區別ハ是等ノ細管具走行ノ狀態ヲ異ニスルヨリ起ルモノトス。大別シテ曲細尿管及直細尿管ノ二種トス。甲ハ皮質及腎柱ニ、乙ハ髓放線ニ在リ。腎臟ニ循レル血管ハ腰部大動脈幹ノ分枝タル腎動脈ニシテ、始メ腎門ヨリ入り腎錐體間ニ於テ葉間動脈ト成リ、腎小體即マルピギー氏小體中ニ於テ絡絲トナル後、毛細管集合シテ葉間靜脈トナリ、腎盂ニ至レバ多クハ葉間靜脈集合シテ腎靜脈トナリ遂ニ下大靜脈ニ開口ス。而シテ前述ノ細尿管ノ間ニハ結締織柱リテ之ヲ間質ト稱シ、血管淋巴管及神經枝ヲ伴ヒ兼テ細尿管ノ連接ヲ補助ス。

(二) 輸尿管

輸尿管ハ尿管ヲ膀胱ニ向ツテ輸送スル一對ノ膜管ニシテ、腎盂ニ於テ一擴張部ヲ以テ始マル此部ヲ腎盂ト云フ。腎盂ニ向ツテ數個ノ漏斗狀小枝ヲ放テ腎乳頭ヲ包圍ス。之ヲ腎蓋ト稱ス。腎蓋ハ通常二三ニ分レ更ニ數個ノ盞狀部ニ分ル、ヲ以テ、小ナルモノヲ小腎蓋ト云ヒ、大ナルモノヲ大腎蓋ト云フ。通常輸尿管上

構スル部ハ腎盂以下ノ比較的細干部分ニシテ、下内方ニ向ツテ走り小骨盤内ニ入り膀胱底ヲ指シテ下ル、故ニ輸尿管ハ之ヲ分ナテ腰部及骨盤部トス、岸ニ淺
尿ノ後方ニ密接シ縱鬆結締織ニ由リ近左ノ膀胱器ニ接續ス、輸尿管ノ上部ハ大
膀胱ノ上方ニ位シ、下半ニ在リテハ内精系動靜脈ト交叉シ、又右側輸尿管ハ下
大靜脈管ニ密接ス、稍々下方ニ於テハ總腸骨動靜脈ノ分岐點ヲ越エテ下行シ、
此際右側輸尿管ハ迴腸、左側ハS字狀結腸ノ後方ヲ通過ス、而シテ小骨盤ニ入
リテ膀胱底ヲ越エテ膀胱側ニ達シ、之ニ密接シテ下前内方ニ走り、兩側互ニ接
近シ其底部ニ至ル、男子ニ在リテハ膀胱ト輸尿管トノ間ニ輸精管、女子ニ於テ
ハ子宮頸及膈穹隆ノ側方ヲ走ルモノトス。

輸尿管ノ膀胱底ニ到ルマ膀胱壁ヲ斜ニ内下前方ニ向ツテ貫通シ、狭小ナル裂孔
トナリテ膀胱内ニ開口ス、之ヲ輸尿管口ト云フ、而シテ輸尿管ハ斯ノ如ク斜ニ
膀胱壁ヲ貫通スルガ故ニ、腎臓ヨリ輸送サレタル尿ハ自由ニ膀胱中ニ注流スト
雖モ、一度膀胱中ニ入りタル尿ハ決シテ腎臓ニ向ツテ逆流スルコトナシ、是レ
輸尿管開口ノ膀胱粘膜ガ瓣膜ニ等シキ作用ヲ爲メバナリ。
輸尿管ノ構造、腎盂、腎蓋、輸尿管ハ其ニ粘衣膜、筋織膜及纖維膜ノ三層ヨリ

或ハ、他ノ膜ハ多形工形ヲ帶リ乳頭ノ上ヲ覆フ、面粘膜ハ許多ノ細襞及白血球
ヲ含ム、膀胱腔ノ内壁、輸尿管ノ管壁ニシテ膀胱管ノ下部ニ於テハ、更ニ
外膜ヲ加シ、縦鬆結締織ハ粘衣膜ニ接續ナリ。

(三) 膀胱

膀胱ハ腎盂以下ニ於テ數倍増大ノ後方ニ位シ、大サハ尿ノ盈虚ニ依リテ差アリ、
其大サ約十センチメートルニ至リテ膀胱底ヲ示ス、尿空腔ニハ帶圓三角形ヲナシ、
前部内ニ位ス、先頭部ニハ尖端ニ有テ向ニ、小骨盤ヲ示テ膀胱ニ達シ、卵圓
形ヲ呈スベシ、其前方ハ恥骨聯合ニシテ、後方ハ男子ニ於テハ直腸、女子
ニ於テハ子宮頸ニ接ス、上方及前方ハS字狀結腸之ニ接ス、又初生時ニ於テ
ハ膀胱シタル其ノ形状ヲ示シ、其大サ今ハ數倍増大ノ上ニ出ヅ、膀胱ノ前面ハ
前葉、後面ハ後葉、前部ハ女子ニ於テ甚シク擴張ス、此擴張部ヲ儲窩ト云フ、
膀胱ヲ包ムラシメ、尖端、志等ノ下ニ膀胱ノ最下部ヲ包ムラシメ、底ノ前方ヨリ
尿道口起ル部分ヲ膀胱頸トシテ、内面ニ於テ尿道口ノ後方小シク陥アリテ輸尿管
ノ入り、女子ニ於テ膀胱頸ノ斜ノ裂孔ナリ、裂孔ノ上界ヲ輸尿管壁壁ト云フ、是レ

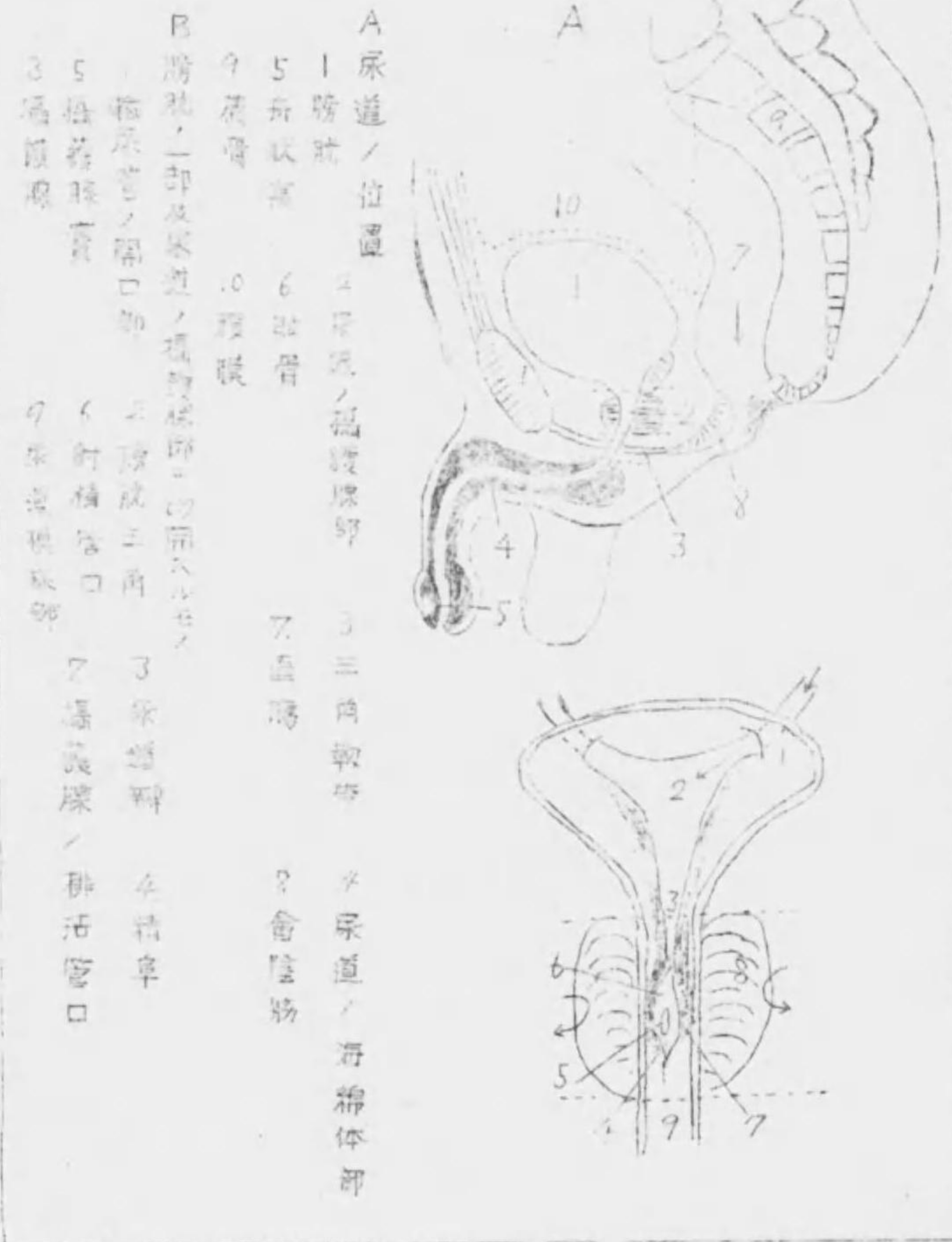
膀胱ノ筋力ハ
下位對カ分
収縮力有リ
尿下反膀胱
動能ヲ示ス
宮動脈ヲ加フ
押在ハ交感副
系ノ神經

レ粘液膜ノ皺壁ニシテ尿ノ逆流ヲ防止スル装置トス。皺壁ノ内端ハ延長シテ反ニ融合シ、外端ハ内下方尿道口ニ向ツテ延長シ、精阜ニ連續スル無對ノ從隆起即膀胱懸壺垂ヲ爲ス。此皺壁ノ間ニ上部ハ廣ク、下部ハ尖銳ニ終ル三角ヲ生ス。之ヲ膀胱三角ト云フ。而シテ上部ノ狭小ナル部ヲ頂或ハ尖端ト名ケ、此部ヨリ尿管ニ延長スルモノヲ尿管頸或ハ尿管ノ痕跡ナリ、又中部ヲ體ト名ケ、兩側ヨリ縮ニ進ムルモノハ側腸膀胱韌帶ニシテ、胎兒膀胱動脈ノ痕跡ナリ、而シテ底ノ直前ニ環斗狀ニ収縮シタル内尿道口ノ内外ニ内及外膀胱括約筋アリ、尚膀胱ノ前面ハ腹膜ナラシテ只纖維結締織ニ依リテ背盤前壁ニ附着ス、其後面ノ大部分ハ腹膜ヨリ被ハル、但シ膀胱底ノ近傍ニ於テ而已缺如ス、是即腹膜ガ子宮、直腸ニ向ツテ反轉スルガ故ナリ。

膀胱ノ構造 膀胱ハ粘液膜、筋織膜、漿液ノ三層ヨリ成ル、粘液膜ハ多形上皮ヲ被リ上皮下ニハ固有膜ヲ有シ、優々其内ニ淋巴小節ヲ見ル、此粘液膜三角部ノ外縁ヲ形勢性ナリ、筋織膜ハ内及外層ノ組織ト其中ニ存ズル輪狀筋三層ヨリ成ル、漿液膜ハ腹膜ノ一系ニシテ、後面ノ上部及頂ヲ覆フモノトス。

(圖十九百第)

道尿及膀胱



丁 生殖器

生殖器ハ男女ニ於テ同一ノ源ヨリ發生スルヲ以テ、發育ノ後ト雖モ往々相一致スルコト稀ナリトセズ、而シテ其機能ハ生物ノ蕃殖ヲ營ミ、種族ノ保存ヲ媒ルニ在リテ、内及外生殖器ノ二部ヨリ成ル。内生殖器ハ即生殖腺ニシテ生物ノ種素ヲ産出シ、且ツ之ヲ適當ノ處ニ保存シ養成シ。外生殖器ハ男ニ於テハ種芽ノ排出道ニシテ、女ニ於テハ生殖産物ノ排出ヲ媒介スル處ノ機關ナリ。

(陽) 男子生殖器

男子ノ内生殖器ハ、睪丸、副睪丸、輸精管、精囊、攝護腺、射精管、尿道球腺等ニシテ、外生殖器ハ陰莖及之ニ屬スル尿道ナリ、但シ攝護腺及睪丸等ハ内分泌腺ニ屬スルヲ以テ、第五款内分泌腺學ノ條下ニ詳述セリ就テ見ラルベシ。

(一) 副睪丸

副睪丸ハ睪丸ノ後上方ニ位シテ、猶々扁圓形ニシテ長ク、恰モ睪丸ノ帽ノ如シ、

副睪丸ノ血管
ハ内精系動靜
脈 神經交感
神經及背脊神
經

之ヲ頭、體、尾ノ三部ニ分ツ、其實質ハ種々ニ彎曲回轉シタル管ノ系統ニシテ、頭ニ於テ數多ノ小葉ニ分レ、其一端ハ輸出管ニ連リ、他端ハ後方ニ於テ一管ニ集合ス、之ヲ副睪丸管ト云フ、此管ハ強ク擴張廻轉シテ副睪丸ノ體及尾ヲ爲シ、下端ハ單一ナル輸精管ニ連ル、睪丸精網ノ後側及副睪丸尾ヨリ屢々盲管起ル、之ヲ上及下迷走精管ト云フ、尚睪丸上部ニ有莖水泡體、無莖水泡體及漿膜ヨリ生ズル鞘膜水泡體アリ、又副睪丸ト稱スルモノアリ、各胎生ノ遺物ナリ、就中側睪丸ハ二三分岐シタル小盲管ヨリ起ル、副睪丸ノ構造ハ纖維膜ト無組織ノ固有膜ヨリ成リ、重層ノ鱗毛上皮ヨリ被ハル。

(二) 輸精管

輸精管ハ睪丸産物ノ輸出管ニシテ、強固ナル細キ空管ナリ、其管壁ハ厚ク扁圓ナリ、畢竟此管ハ副睪丸ノ續キニシテ、始メ其下端ヨリ起リテ紆曲シ、後体厚シ副睪丸ノ内側睪丸ノ後部ニ沿フテ上方ニ向ヒ精系ニ入り、鼠蹊管ヲ經テ前腹壁後面ニ達シ、彎曲シテ小骨盤内へ下リ、膀胱底ニ於テ精囊ト連合ス、其下端 (365)

ハ膨脹シテ輸精管膨大部ヲ形成ス。但シ精囊輸出管ト合スルニ及ンデ、再ビ縮小スルモトス、此管ノ腹腔ニ入ルヤ直ニ下腹壁動脈ト交叉シ、腹膜ニ由リテ覆ハル。

輸精管ノ構造 輸精管ハ粘液膜、粘液膜下組織、筋線膜及纖維膜ヨリ成ル。粘液膜ハ柱狀上皮ヲ被リ小葡萄狀腺ヲ含有シ、筋線膜ハ縱行滑平筋ニシテ内外ニ在リ、其間ニ更ニ輪狀ノ一層ヲ有ス。纖維膜ハ緻密ニシテ強固ナリ、膨大部ハ菲薄ニシテ粘液膜中分岐管狀線ヲ含ム。

(三) 精囊

精囊ハ扁平長橢圓形ヲ呈シ、膀胱底ノ兩側ニ於テ輸精管ノ外側、攝護腺ノ後方ニ在リ、常ニ精液ヲ藏スルニ個ノ出沒不等ノ膜囊ニシテ、後側ハ直腸ニ接ス、其尖端ハ狭小ニシテ射精管トナリ、攝護腺ヲ穿通シ尿道ノ射精管口ニ開口ス。精囊ノ構造 輸精管ト同ジフ粘液膜、粘液膜下組織、筋線及纖維膜トヨリ成ル。但シ表面ハ結締織ニ由リテ纏結セラレベシ。

(四) 射精管

射精管ハ輸精管膨大部ノ前端ト精囊ト相合シテ成ルモノニシテ、初メハ攝護腺ノ後縁ニ密接シ、是ヨリ前下方ニ走り同時ニ中線ニ向ツテ相接近シ、次デ攝護腺ノ兩側葉ト峽トノ間ニ入り、前方ニ向ツテ進入シ、益々狭小トナリ、遂ニ尿道攝護腺部ノ底面ニ於ケル精阜ニ至リ、攝護腺實ノ側方ニ於テ小裂口ヲ以テ開口ス。之ヲ射精門ト云ヒ、輸精管及精囊中ニ蓄積スル分泌物ヲ尿精管中ニ輸出スル作用ヲ有ス。

射精管ノ構造 粘液膜、外縦走内輪狀ノ滑平筋層及纖維膜ヨリ成ル。

(五) 尿道球腺 (コーベル氏腺)

尿道球腺ハ有對ニシテ、尿道膜腺部ニ在リ、精尿三角中ニ位シ、深會陰橫筋束ヨリ取巻レタル豌豆大ノ腺ニシテ、形狀ハ圓形ナリ、其質硬ク暗黄色乃至褐色ヲ呈シ、着蝕ニ從ヒ漸次縮小ス、此腺ハ管狀及肥狀ノ混合腺ニシテ、粘液細胞ニ類似シタル腺細胞ヲ有シ、其排出管ハ尿道球ヲ越テ尿道ノ底部ニ於テ他側ヨリ

リ來レルモノト相接シテ開口ス、而シテ其分泌物ハ精液ニ混ジテ尿道ニ排出スルモノトス。

尿道球腺ノ構造 結締織及滑平筋纖維之ヲ纏絡ス。

○ 睪丸ノ被膜

睪丸ハ白膜ノ外向數層ノ被膜ヲ有ス、之ヲ内方ヨリ算フレバ固有英膜、總英膜、睪丸筋膜、陰囊之ナリ。

(1) 固有英膜 ハ腹膜ノ延長部ニシテ、内外二葉ヨリ成ル、内臟板及體壁板之ナリ、此二葉ノ移行部副睪丸ノ附屬部ナリ、睪丸及副睪丸ノ間ヨリ固有英膜ノ空タル副睪丸竇進入ス、此膜ニ葉間ニ、少量ノ漿液ヲ含ム、之ヲ漿液囊ト云フ、此囊ト腹膜トノ連絡部ハ精系中ニ走ル、腹膜ノ鞘狀突起ニシテ、最初ハ中腔ニシテ二腔ノ交通ヲ嘗ムモ、後癒合シテ鞘狀突起トナル。

(2) 總英膜 ハ結締組織性ノ被膜ニシテ、睪丸、副睪丸、精系ヲ包ミ、固有英膜ノ體壁板ト密着シ、内鼠蹊輪ニ於テ橫筋膜ニ移行ス。

(3) 睪丸筋膜 ハ内斜腹筋及横腹筋纖維ノ延長部ニシテ、總英膜ト癒合ス。

(4) 柱間鞘 外科腰筋腱膜ノ一系ニシテ、外鼠蹊輪ニ起リ柱間纖維ト癒合ス。

(5) 浅筋膜 ハ浅腹筋ノ一系ナリ。

(6) 陰囊 ハ皮膚ノ擴張シタル部分ニシテ、皮下組織ト外皮ヨリ成リ一對ノ皮皺ヨリ發育シ、中央ノ狭窄部ヲ縫線ト稱シ、其處看ヲ證ス、外皮ハ赤ク、線壁色素及皮脂腺ニ富ミ、糸柱ナル剛毛ヲ生シ、糸柱ナル皮下組織ハ肉膜ト云フ、滑平筋層ヲ有ス、而シテ此陰囊ハ縫線ニ一致スル陰囊中隔ニヨリテ左右二區ニ分レ各區ニ一丸ヲ容ル。

○ 精系

精系ハ睪丸ヨリ腹壁ニ渉ル太キ索條ニシテ、輸精管、尿管、神経、結締組織、總英膜、睪丸筋膜、鞘狀鞘帶及浅腹膜等ノ延長部ヨリ成ル、然レドモ腹壁ヲ穿テスル際天等ノ鞘層ヲ漸々失フモノナリ、即内外鼠蹊輪ニ於テ總英膜、浅腹筋、該管内ニ於テ、睪丸筋膜等ヲ失ヒ、輸精管ハ小骨盤ニ下リ血管神經ハ上方ニ向ヒ鞘狀鞘帶モ相分離ス。

○ 睪丸下行

睪丸ハ胎生時ニ於テハ腹腔内ニアリテ腎ノ位置ニ位ス、産生時ニ先立ツテ下行ヲナシ、鼠蹊管ヲ經テ陰囊ニ下ル、而シテ睪丸ノ被膜モ下行前ニ生ズルモノトノ

睾丸ハ腹腔ニ於テハ前側而已腹膜ニ被ハレ、下行ノ際腹膜重疊シテ體壁板ヲ爲
 シ、下行ノ當時具葉膜腔ハ腹膜鞘狀突起ヲ以テ腹膜腔ニ通ジ、後ニ至リ鞘狀突
 起鞘狀軟帶ニ變ジ、内面癒合シ、下部ハ固有英膜ト成ル、斯クノ如ク腹膜ヨリ
 覆ハレタル睾丸ハ、副睾丸ト共ニ橫腹筋ヨリ來ル鞘即總英膜ヲ被ル、其外學
 筋膜、柱筋筋膜、淺筋膜來リ、外鼠蹊輪ノ外方ハ外皮稱派シテ陰囊ヲ作ル、睾丸
 ノ下端ハ陰囊ト道引帶ニ依リテ連合シ、下行ヲ補フルモノナリ。

(六) 陰 莖

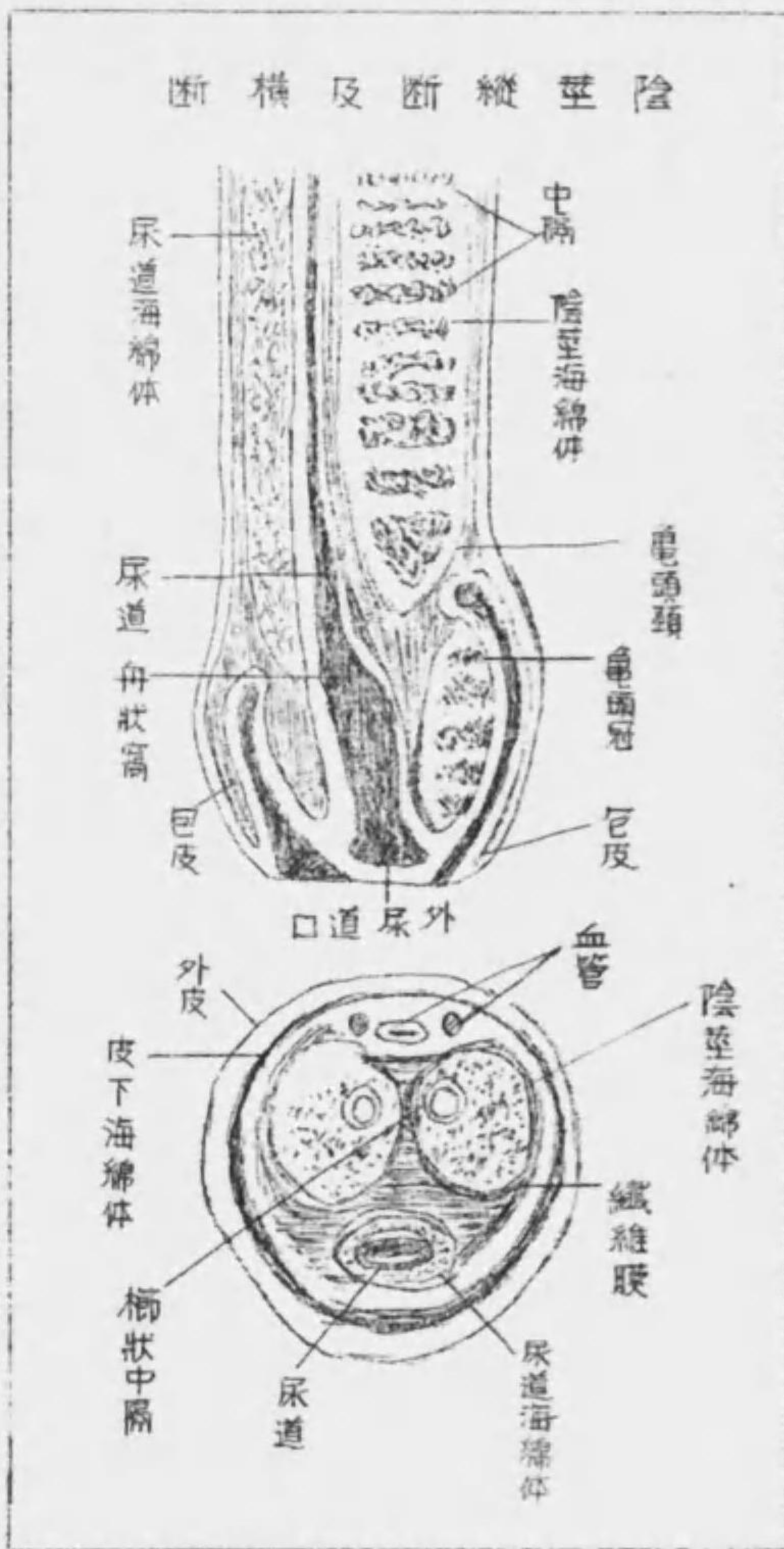
陰莖ハ交接ノ要具ニシテ、圓柱形ヲ呈シ、外陰部ニ於テ恥骨ノ前下部陰囊ノ上
 端ニ在リ、區別シテ根、體、龜頭ノ三部トシ、根ハ陰莖ノ下部ヲ指シ、恥骨ノ
 前面ニ附着シ、其末端ハ龜頭ト云フ、又根ト龜頭ト云フ、又根
 ト龜頭ノ間ハ體ニシテ兩級ハ鈍圓ナリ、上面ハ廣ク陰莖背ト云ヒ、下面ハ尿道
 面ト稱セラル、陰莖ノ實質ハ主トシテ海綿様ノ組織ヨリ成ル、之ヲ三部ニ分ツ
 即尿道海綿體及左右ノ陰莖海綿體是ナリ、左右兩陰莖海綿體ノ間ニハ縱溝ヲ被
 シ、其下方ニ尿道海綿體ヲ容ル、而シテ尿道海綿體ハ尿道ノ始端ニシテ、陰莖

海綿體ハ陰莖ノ支柱ナリ。

(1) 陰莖海綿體 ハ少シク壓平シタル一對ニシテ、相互ニ接著シ、其上下側ニ溝
 ヲ生ジ、下側溝ハ深ク尿道海綿體ヲ容レ、背側溝ハ淺ク、前端ハ尖、後端即根
 ハ互ニ分離シテ恥骨軟骨接合、恥骨及坐骨ノ下枝ニ附着ス、此部ヲ陰莖脚ト云フ。

(圖一十九百第)

斷 橫 及 斷 縱 莖 陰



陰莖背藩ニハ血管神經ヲ通シ、海綿體ノ實質ハ白膜ト固有ノ海綿質ヨリ成ル。
(A) 白膜 ハ強キ結締組織膜ニシテ、二個ノ海綿體ノ間ニ於テ陰莖中隔ヲ爲ス、
中隔ハ陰莖ノ前半ニ於テハ不充分ニシテ無數ノ裂隙ヲ生ジ、桶狀ヲ爲スヲ以
テ桶狀中隔ト名ク、

(B) 海綿質 ハ脊平筋束ヲ有スル結締組織ノ小深網狀ニ結合シ、其間ニ海綿腔
ヲ生ズ、海綿腔壁ハ單層扁平上皮ヲ以テ被ハレ、内ニ靜脈ヲ充タス、海綿質
ノ動脈ハ一部ハ白膜下ニ於テ毛細管網ヲ爲ス、此網ハ海綿質ノ表層ニ在リテ、
次層ニ於ケル海綿腔ニ通ズル靜脈網トモリ、動脈ノ一部ハ直ニ靜脈網ニ注グ、
海綿質ノ靜脈ノ一部ハ靜脈網、一部ハ陰莖背靜脈ニ注グ、

(C) 尿道海綿體 ハ延長シタル圓錐形ニシテ、基底ハ後方陰莖體ノ間ニ於テ膨大
ス、之ヲ尿道球ト云フ、前端ハ更ニ膨大シテ圓錐形ヲ爲ス、即龜頭ト稱スル部
ナリ、龜頭ハ陰莖、海綿體ノ前尖ヲ覆ヒ、陰莖ノ前端ヲ形成ス、龜頭ノ後方ニ
絞結部アリ、之ヲ龜頭頸或ハ龜頭後藩ト云ヒ、其前方ニ管ユル隆起ヲ龜頭冠ト
云フ、又龜頭ノ後境界線ハ斜ニ下面ニ向ツテ走り、正中線ニ位スル所ノ包皮繫帶
ニ終ル、而シテ龜頭末端ノ下方ニ鉛直ナル裂溝ヲ有ス、此レ尿道ノ外口ニシテ

外尿道口ト云フ、其兩緣ハ尿道唇ト云フ、龜頭ノ表面ハ一般ニ滑澤ニシテ、冠
部ニ近クニ從ヒ多少着明ノ乳頭現ハレ小皮脂腺ヲ具フ、但シ龜頭冠ニハ之ヲ缺
ク、

陰莖ノ筋膜 ハ龜頭ヲ除キ三海綿體ヲ包束スル纖維膜ナリ、其白條ニ渉ル部ヲ
深提莖鞘帶ト云ヒ、恥骨軟骨接合ニ連ル部ハ深提莖鞘帶ナリ、

陰莖ノ皮膚 ハ陰阜及陰囊ノ皮膚ニ連續シ、陰莖根部ヨリ頸ニ至ルノ處ハ單ニ
之ヲ被包スレドモ、頸ニ至レバ陰莖ノ上面ヲ離レテ皺壁トナリ龜頭ヲ固抱ス、
之ヲ包皮ト云フ、陰莖勃起スレバ包皮ノ内面ハ反轉シテ外面ニ面シ、且龜頭ノ
後方ニ退フモノトス、龜頭頸ニ於テハ皮膚ハ陰莖ニ密着シ、前下方ニ向テ尿道
口ニ達シ、其粘膜ト連合シ口ノ後方ニ於テ包皮繫帶ヲ成ス、體ニ於テハ皮膚ハ
頗ル菲薄トナリ、脂肪及毛髮ヲ有セス、緩ク附着シテ移動シ易シ、其色ハ暗黒

ニシテ包皮口ニ至レバ皮膚性質ヲ變シテ粘膜ニ類似シ、菲薄柔軟ト爲リ、紅色
ヲ帶ブ、又龜頭尖端ヨリ始リ、正中線ニ於テ包皮及陰莖ノ下面ニ沿ヒ陰囊ヲ越エ
テ、皮膚ニ達スル縫合アリ、之ヲ縫線ト云フ、

陰莖ノ構造 陰莖ハ前述ノ如ク陰莖海綿體、尿道海綿體、白膜及外皮トス、

陰莖ノ血管ハ
陰莖海綿體
陰莖動脈及
同右靜脈、勃
起時經文脈

(七) 尿道

泌尿器ノ部ヲ見ヨ。

(陰) 女子生殖器

女子ノ内生殖器ハ一對ノ卵巢、輸卵管及單個ノ子宮ニシテ、外生殖器ハ陰及外陰部ナリ、外陰部ハ小陰唇、大陰唇及陰核ヨリ成リ、陰ノ側方ニハ大前庭腺、尿道口ニ小前庭腺等アリ、但シ卵巢ハ男子ノ睾丸、攝護腺ト同ジク内分泌腺ノ部類ニ属スルヲ以テ、該腺條下ニ詳述スルコト、セリ。

一 子宮喇叭管 (輸卵管)

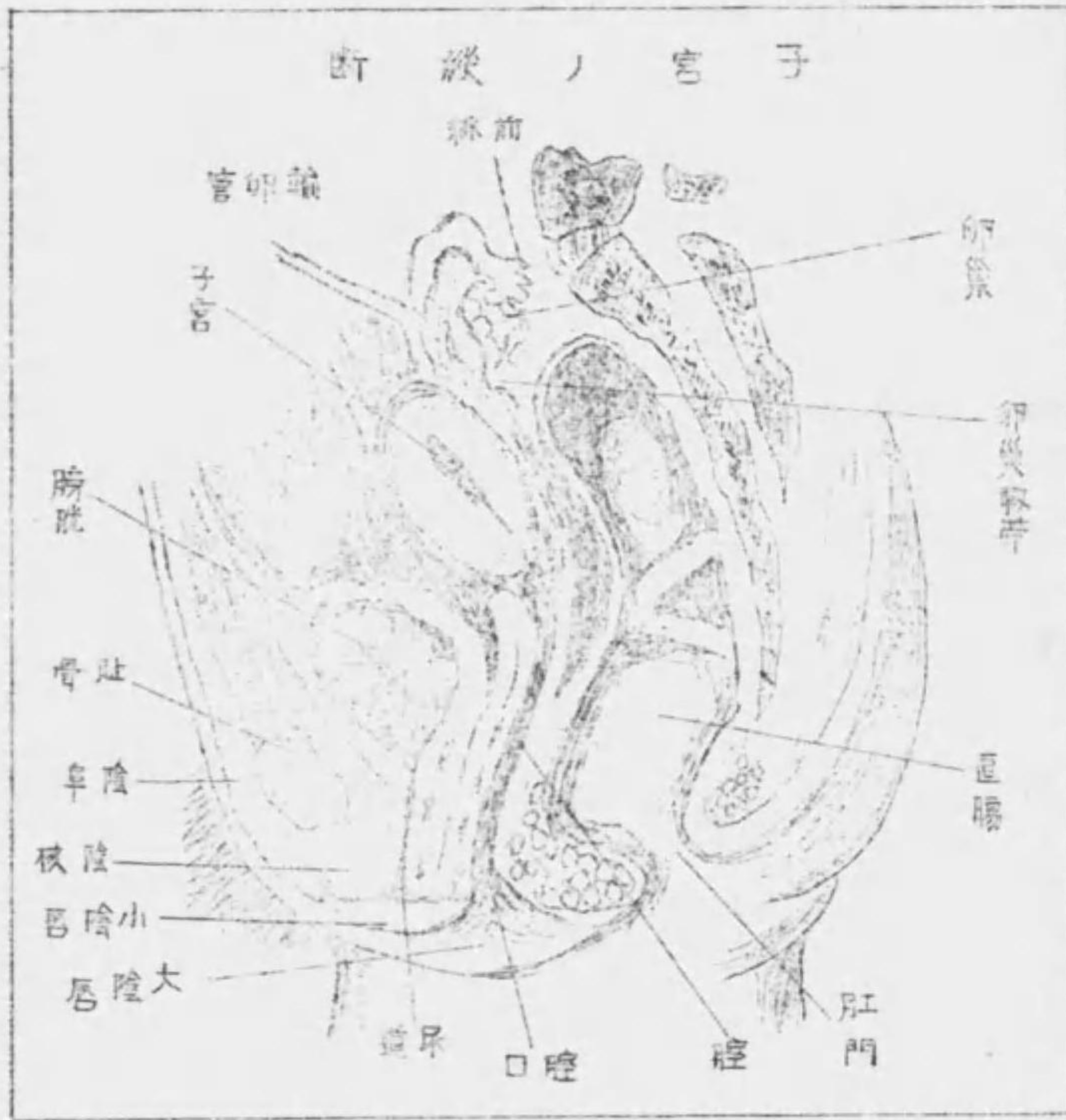
輸卵管ハ卵巢ト子宮ヲ連續スヘキモノニシテ、畢竟卵巢ノ輸出管ニ外ナラズ、形狀ハ喇叭狀ヲ呈シ、子宮ノ兩側ニ於テ子宮扁鞘帶ノ上縁ニ位ス、其内端即子宮端ハ細クシテ子宮外側縁ノ上方ヨリ出テ、外方ニ至ルニ從ヒ擴張シ、末端ハ漏斗狀ヲ以テ腹腔端ニ終ル、此端ノ周圍ハ深痕ニ田リテ數多ノ裂片ニ終ル、

之ヲ剪線ト云フ、而シテ剪線中殊ニ一箇長クニシテ卵巢ニ達スルモノヲ卵巢剪線ト名フ、輸卵管外端ハ始メ卵巢ノ下端ニ達シテ屈曲シ、卵巢ノ内面ニ沿テ上後方ニ上リ、卵巢上端ヲ超ユレバ壺腹部トナリテ急ニ屈曲シ、剪線ハ皮下シテ卵巢上端ヲ圍繞ス、前縁ヨリ圍繞セラル、所ヲ漏斗ト稱シ、其深部ニ小圓孔アリ之ヲ輸卵管腹腔孔ト云フ、卵子ハ此孔ヲ經テ壺腹部ニ達シ、更ニ狭キ輸卵管峽ニ移リ、遂ニ子宮孔ヲ經テ子宮腔内ニ入ル、然レドモ卵子ハ斯ノ如キ経路ヲ取ラズシテ腹腔中ニ入り、此處ニ着床スルコトアリ、之ヲ腹腔妊娠ト云フ、或ハ卵が卵巢中ニ於テ受精シ、此處ニ止リテ發育スルコトアリ之ヲ卵巢妊娠ト云フ、又卵子が輸卵管中ニ止リテ此處ニ發育スルコトアリ、之ヲ輸卵管妊娠ト云フ、輸卵管ノ構造、輸卵管ハ粘液膜、筋織膜及漿液膜ヨリ成リ、其外層ハ漿液膜ニシテ腹膜ノ被覆部ナリ、中層ノ筋織膜ハ縱行及輪狀ノ平滑筋纖維ニシテ、内層ノ粘液膜ハ扁平上皮ヲ附ス、此上皮ノ運動ニ由リ卵子ヲシテ子宮ニ輸送スルモノナリ。

(二) 子宮

子宮ノ血管ハ内
腸骨動脈ノ枝
子宮動脈高心
靜脈
神經ハ下腹神經
叢精系神經叢
及下腸骨神經
ヨリ來ル

(圖二十九百第)



前後壁ニ於テハ中央ヨリ側方ニ向ツテ走ル數多ノ皺ヲ見ハシ、全形羽狀ヲ呈ス、之ヲ蘇嚙狀皺ト云フ、而シテ子宮ハ兩側ニ於ケル子宮扁軟帶及子宮圓軟帶ニ出リテ其位置ヲ固定セラレ、モノナリ、子宮ノ構造、子宮ハ輸卵管ト等シク粘液膜、筋織膜及漿液膜ヨリ成リ、外層ハ漿液膜ニシテ膜腺ノ被覆部ナリ、筋織膜ハ平滑筋ニシテ、其織

子宮ハ肉質ノ器官ニシテ、腔ノ上部ニ位シ、前ハ膀胱、後ハ直腸、上ハ膈嚙側部ノ輸卵管及扁軟帶ノ間ニ在リ、直腸ハ唯嚙嚙狀ノ内腔ヲ有スレドモ、柱一於テハ胎兒ノ莖實ニ直ニ貫入、太サニ違ハ、常時子宮ノ形狀ハ梨子狀ニシテ、膈嚙ハ上方ニ向ヒテ子宮管ニ連リ、下端ハ狭ク腔ニ開ク、子宮ノ形狀ハ常時ニ由リテ差異アリ、即初生兒ニ於テハ縱杆狀、成人ニ於テハ扁平梨子狀、老人ニ變々球形ナリ、區別シテ時、頸、底ノ三部之ナリ、底ハ子宮ノ上部即嚙嚙部ニ在リ、其後方ニモ一脈、軟帶ナリ、之ヲ兩葉固有軟帶ト云フ、頸ハ體ニ次ブ下方ハ漸次狭小ナリ、後面ハ前面ニ比シテ強ク凸隆シ、外側線ニ子宮圓軟帶アリ、其後方ニモ一脈、軟帶ナリ、之ヲ兩葉固有軟帶ト云フ、頸ハ體ニ次ブル部分ニシテ更ニ狭クシテ嚙嚙嚙嚙ニ呈ス、下端ハ腔管ノ上部ニ連ル、子宮腔部ト稱ス、其下端ニ褶裂帶狀ノ子宮口ヲ呈ハス、子宮腔ノ腔管ニ開ク所ナリ、多産婦ニ在リテハ圓形ニ變ス、子宮口ノ縁ヲ前及後唇ト云フ、前唇ハ長ク腔ノノ前壁ニ移行シ、後唇ハ短ク腔中ニ懸垂ス、子宮腔ハ前領部ニ於テハ三角形ニシテ、是底ノ兩端ハ輸卵管ニ通ジ、下端ハ狭小シテ子宮頸管ト成ル、頸管ノ上部ヲ内子宮口ト云ヒ、下部ヲ外子宮口ト云フ、子宮腔ハ平滑ナルドモ、頸管ノ

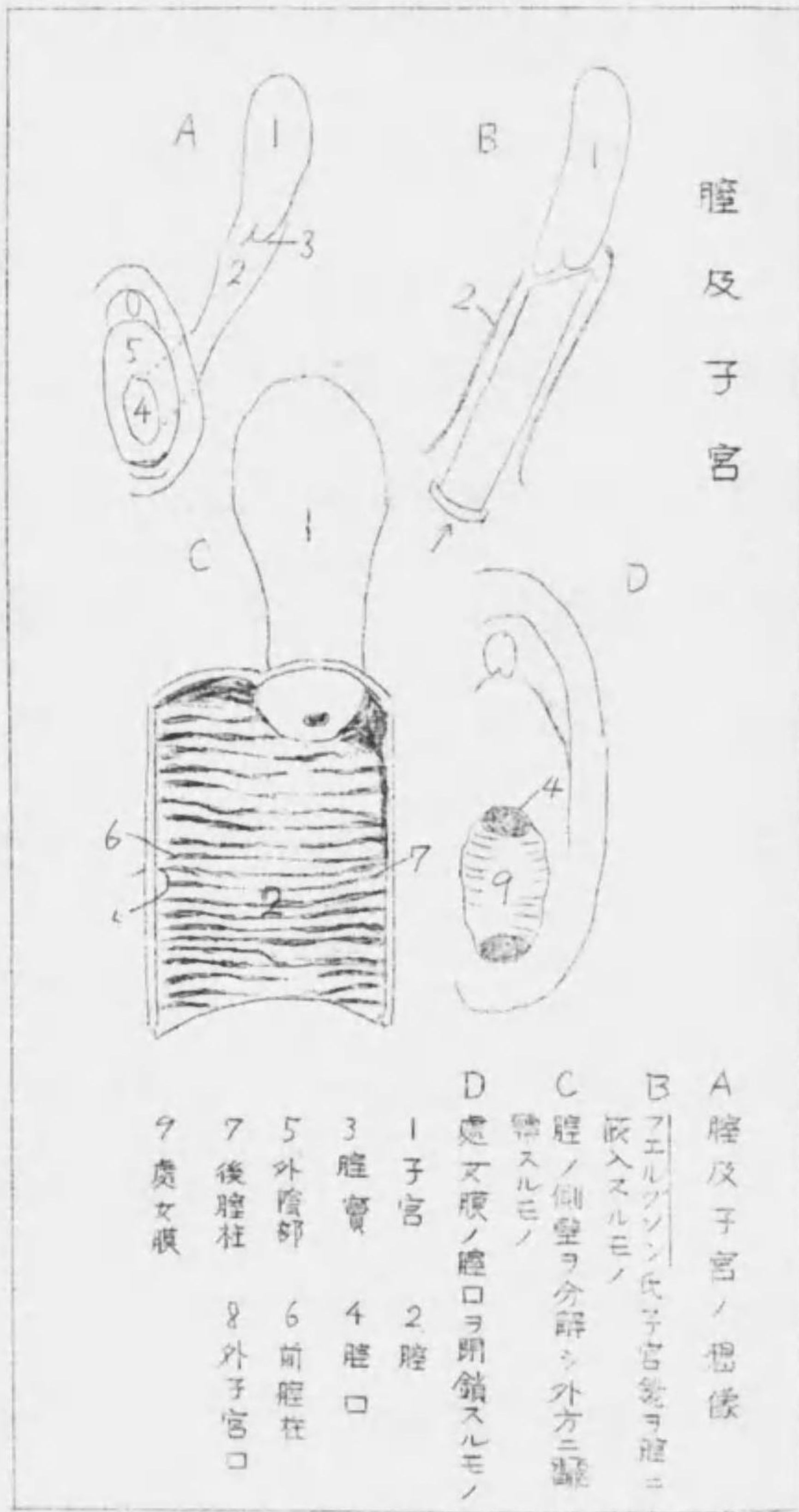
維ハ縱横斜ニ走り大ニ肥厚シ、其ニ錯綜ス、粘液膜ハ筋層ト密着シ、子宮腔ニ於テハ平滑アレドモ頸管ニ於テハ絨狀膜壁ヲ呈シ、全子宮腔及頸管ノ上部ハ氈毛上皮ニシテ、下部ハ扁平上皮ナリ、而シテ許多ノ管狀腺ヲ具有ス、之ヲ子宮腺ト云ヒ、管腔ハ藍色ヲ有セル柱狀上皮ヲ附屬スベシ、又頸管ニ於テハ屢々水泡狀ノ小體ヲ見ル之ヲカボリ氏小卵ト云フ、是レ子宮腺ノ閉鎖スルモノナリ、

(三) 腔

腔ハ子宮ノ下部ニ在ル膜様擴張性ノ管道ニシテ、常時ハ其前後壁互ニ接觸シ、前側ハ膀胱及尿道、後側ハ直腸ニ接シ、上端ハ子宮腔部ヲ圍ム、子宮腔部トノ間ニ輪狀ノ溝ヲ生ス、之ヲ腔穹窿ト云フ、前子宮口膈ノ前ニアルヲ前穹窿ト云ヒ、後穹ノ後ニアルヲ後穹窿ト云フ、下端ハ前方ニ向ヒ、小陰脣ノ間ニ開口ヲ開ク、之ヲ腔入口ト云フ、處女ニ於テハ處女膜ヲ以テ狹メラル、此膜ノ形狀ハ半月狀輪狀、或ハ篩狀、或ハ稀ニハ腔口ヲ全ク閉鎖シ、破壊後ハ疣狀ヲ爲シテ口縁ニ附着ス、之ヲ處女膜痕ト云フ、前腔壁ハ尿道壁ト密着シ、其組織ハ相癒合シ、且ツ此部分ニ於テ最モ厚シ、尚

(圖三十九百葉)

腔及子宮



- A 腔及子宮ノ想像
- B フエルクソン氏子宮鏡ヲ腔ニ
 嵌入スルモノ
- C 腔ノ側壁ヲ分詳シ外方ニ嚙
 嚙スルモノ
- D 處女膜ノ腔口ヲ閉鎖スルモノ
- 1 子宮
- 2 腔
- 3 腔竇
- 4 腔口
- 5 外陰卵
- 6 前腔柱
- 7 後腔柱
- 8 外子宮口
- 9 處女膜

膀胱下端トモ強固ニ結合ス、マ後腔穹窿ハ腹膜ヨリ被ハレ、其下部ニ於ケル腔壁ハ直腹前壁ト密着ス、腔ノ構造、腔ハ粘液膜、筋織膜及絨膜狀膜ヨリ成リ、内層即粘液膜ハ重層扁平

上皮ヲ被リ、無數ノ強厚ナル横線壁ヲ現ハス、之ヲ前及後腔柱ト云フ、中層即筋織膜ハ縱横ノ滑平筋織維ニシテ、蜂窠狀膜ハ最外層ニシテ鬆粗ノ結締織ヨリ成ル。

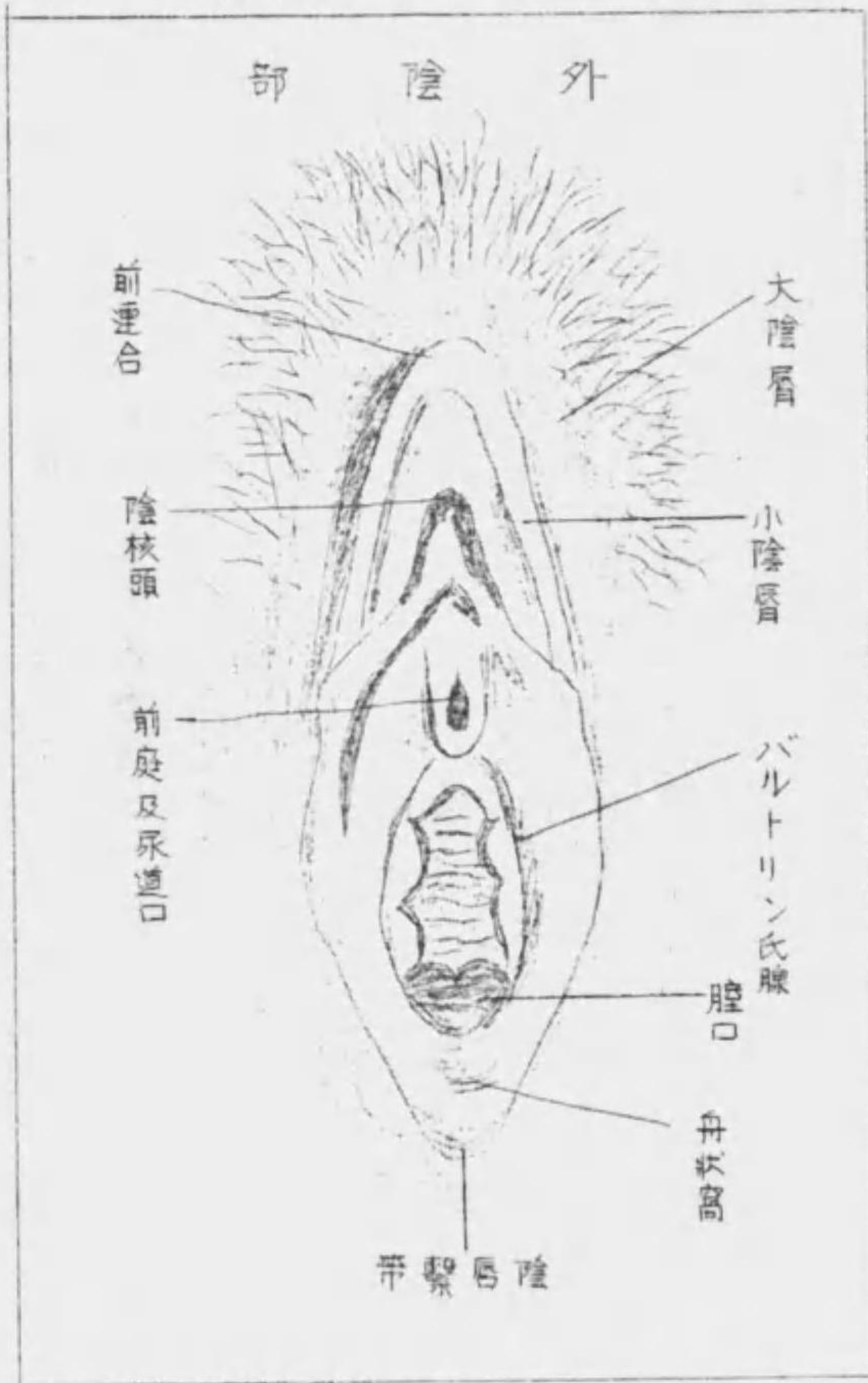
(四) 大陰唇

恥骨縫際ノ前ニシテ、皮下脂肪組織著シク発達シ、甚ダシキ隆起ヲ顯シ、陰毛ヲ叢生スル部アリ、之ヲ名ケテ陰阜ト云フ、大陰唇ハ即其後下方所謂陰部ニシテ、陰裂ヲ圍ム外皮ノ皺壁ナリ、其前上方ハ前連合ヲ以テ陰阜ニ連リ、後方ハ漸々狭小シ、腔口ノ後側ニ於テ左右相合シテ後連合ヲ成ス、其部ニ生シタル薄キ横皺壁ヲ唇繫帶ト云ヒ、後方ノ淺窩ヲ舟狀窩ト云フ、而シテ大陰唇ノ外面ハ春期発動期ヲ經過スル女子ニ在リテハ陰阜ト同ジク剛毛ヲ生ズト雖モ、内面ハ漸次紅色或ハ稍暗色ヲ帯ビテ陰裂中ニ匿レテ湿润シ、粘膜狀ノ外觀ヲ帯ヒ、脂腺ヲ具フ。

(五) 小陰唇及腔前庭

小陰唇ハ皮膚ノ小皺壁ニシテ、腔口ノ兩側ニ位シ、常ニ湿润シ、後端ハ大陰唇ノ内側ニ終リ、前端ハ陰核ニ産シ、二脚ニ分レ、一ハ陰核ノ上方ニ於テ互ニ連合シ、陰核前皮トナリ、一ハ陰核ノ下側ニ附着シテ陰核繫帶ト成ル、兩小陰唇ノ間ニ生ズル部分ヲ腔前庭ト云フ、前庭ハ前後狹ク、中部ハ廣フ、茲ニ尿道口及腔口ヲ見ル、外尿道口ハ前方ニアリテハ其周圍少シク突隆

(圖四十九百第)



ノ間ニ生ズル部分ヲ腔前庭ト云フ、前庭ハ前後狹ク、中部ハ廣フ、茲ニ尿道口及腔口ヲ見ル、外尿道口ハ前方ニアリテハ其周圍少シク突隆

尿道ノ上部ハ結締組織ノ外膜ニ被ハレ、下部ハ腔壁ト密壁ト密着シ、尿道腔
中隔ヲ以テ隔テラレ、腔口ハ後方ニ在リテ圓形ヲ呈スト雖モ、屢々前縁突出シ
テ半月狀ヲ爲シ、處女膜ハ通常其後縁ヨリ突出ス、腔口ノ兩側ニ、男ノ尿道海綿
體ト一致スベキ前庭海綿體アリ、其上端ハ陰核感頭ト相接ス、
小陰唇ノ構造、小陰唇ハ粘膜狀ニシテ、結締組織及彈力纖維ヲ含有シ、脂肪ニ
缺如シ頭ル、皮脂肪ヲ具ス。

(1) 大前庭腺又バルトリン氏腺ハ二個ノ圓形或ハ橢圓形腺體ヨリ成リ、其太サ
豆ニ比スベシ、此腺ハ男子ノカウベル氏腺ニ相當シ、集合性管狀腺ニシテ兩前
ト肛腔口ノ後部ニ接近シ、腔口ト腔括約筋トノ間ニ位ス、後方ハ前庭海綿體ノ
後鈍端ニ密接シ、會陰橫筋ニ達シ、會陰筋膜ノ兩葉ニ由リテ包圍セラレ、此腺
ノ排泄管ハ前方ニ向ヒ、小陰唇ノ内面、處女膜或ハ其殘留物ノ近傍ニ開口ス、腺
造ハ男子尿道球腺ト同シ。
(2) 小前庭腺ハ腔口ノ周圍ニ散在スル無數ノ小粘液腺ニシテ、輪狀ニ配列シ、前
方ニアリテハ尿道口周圍ニ存スル粘液腺ト合ス、而シテ是等ノ粘液腺ハ短管
狀腺ナルアリ、又ハ分岐セルモノアリ。

(六) 陰核

陰核ハ動起性ノ小帯ニシテ、
外膜ハ皮膚ノ
層ヲ經テハ交
感神經ノ節
經及産卵管
經ヨリ來ル

陰核ハ動起性ノ小帯ニシテ、莖莖ト同質異形ニシテ、前連合ノ下後方ニ於テ左
右大陰唇ノ間ニ現ハル、其尖端ハ垂下ス、之ヲ陰核龜頭ト云フ、陰核海綿體及
陰核脚ナル二個ノ支柱ヲ有シ、左右相合シテ陰核體ヲ形成ス、陰核體ノ外面ハ
陰核鞘ヲ以テ被ハレ、其背面ハ恥骨縫隙ニ連繋スル陰核提軟帶アリ、尚陰核ノ
近圓端ハ粘液腺ヲ被リ、知覺過敏ナルヲ特異トナス。

○ 乳房

乳房ハ前胸壁ノ第三乃至第六肋骨ノ間ニ在リ、其形狀大小ハ男女年齢又授乳時
ニ於テ大ニ異ナリトス、即女子ニ在リテ乳汁ヲ分泌スルノ器ニシテ、生殖器ト
密接ナル關係ヲ有シ、春期發育期ニ至ラバ俄ニ發育膨大シテ半球形ノ乳房ヲ形
成ス、然レドモ男子ニ於テハ生殖器トノ關係ナク、只々補乳動物ノ徵候ヲ表ス
ル而已ナリ、而シテ乳房ハ妙齡婦ハ半球ヲ成スト雖モ、一度授乳シタル者ニ於
テハ懸垂乳ト爲ル、乳房ノ中點ニ圓形ノ乳頭アリ、之ヲ乳頭ト名ケ、末端ニ
約十四五ノ乳腺管口アリ、是乳汁ノ出ヅル所トナル、又乳汁ヲ

乳房ノ血管ハ
内乳動脈ノ分
枝及同名靜脈
神經交感神經

ハ乳頭ト共ニ赤褐色ヲ帯ブ、之ヲ乳暈又ハ乳輪ト稱シ、受胎ノ際ヨリ漸次暗黒
色ニ變ズ、由ビ舊ノ状態ニ復スルコトナシ。
乳房ノ構造 乳房ハ十五個乃至二十個ノ腺體即乳腺ヨリ成ルモノニシテ、授胎
状態ニ屬シ、結締組織ヲ以テ結束セラレ、且脂肪ニ由リテ埋没セラル、ト雖モ
授乳時ハ舊シテ脂肪蓄ス、乳腺ニハ乳腺管アリテ其管漸次集合シテ乳頭ニ開口ス
ルニ先ダテテ一ノ膨大ヲ爲ス、之ヲ乳竇ト云フ、乳腺ハ皮脂腺ノ變形物ニシテ
妊娠中ニ肥大シ、産後ニ至リ乳汁ノ分泌ヲ營ミ、授乳期終リニ至レバ自ら漸々
退化スルモノナリ。

○ 會陰

會陰ハ植物性管ノ下壁ニシテ、即骨盤ノ下口ニ一致シ、形状ハ菱形ナリ、其前
隅ハ恥骨軟骨接合ニ對シ、前側部ハ恥骨弓ニシテ、左右側隅ハ坐骨結節ナリ、
而シテ後隅ハ尾陰唇ニ向ヒ、後側部ハ薦生結節軟骨及大臀筋ノ下緣ナリ、今之
ヲ左右ノ坐骨結節ニ引ケル橫線ニ由リ、前後ノ二部ニ分隔スル時ハ、其前部ノ
前隅ハ耻骨軟骨接合ニシテ、前側部ハ恥骨下枝及坐骨下枝ヨリ成ル、男子ニ於
テハ尿道、女子ニ於テハ陰及尿道口ヲ圍繞スベシ、故ニ之ヲ泌尿生殖橫隔トス。

腹膜諸壁板ハ
荷重性ニシテ
内臓板ハ無痛
性ナリ

フ、而シテ後方ノ後隅ハ尾陰骨ニ對シ、後側部ハ薦骨前面ヨリ坐骨結節ニ緊張
スル薦坐軟骨及大臀筋下緣ヨリ成ル、男女共ニ肛門ヲ圍繞ス、之ヲ骨盤橫隔ト
云フ、而シテ會陰ニハ肛門括約筋、外肛門括約筋、坐骨海綿體筋及派會陰橫筋、
球海綿體筋等ノ六筋ヲ有ス

○ 腹膜

腹膜ハ腹腔及骨盆腔ヲ被ヒ、且内臟諸器ヲ被包スル漿液膜ニシテ、内臓板及體
壁板ヨリ成ル、内臓板ハ腹部内臓ノ表面ヲ、體壁板ハ腹壁ノ内面ヲ被覆シ、此
二板固ニハ裂痕狀ノ腔アリ、之ヲ腹膜腔ト稱シ、其中ニ少量ノ帶黃色ヲ呈セル
漿液ヲ蓄フ、之ヲ腹膜液ト云ヒ、又アル殺菌性ヲ有シ、常ニ腹膜ヲ湿润セシム
而シテ二板間ノ腔隙ハ男ニ於テハ無口囊アレドモ、女ニ於テハ子宮喇叭管ノ腹
腔孔ヲ以テ體外ニ通ズ。
腹膜ノ内外二板ハ腸間膜ニ由ツテ互ニ附着ス、而シテ腸間膜ハ腸ノ間ニ緊張シ
テ結締織ヨリ成ル、固有腸膜板ト其表面ヲ被覆スル腹膜ヨリ成ルモノニシテ、
場所ニ由リ名稱ヲ異ニス、胃ノ下縁ニ附着スル部ヲ胃間膜、小腸ニ附着スル部
ヲ小腸間膜ト云ヒ、結腸ニ附着スル部ヲ結腸間膜ト稱シ、蟲様突起ニ附着スル

(圖五十九百第)

腹膜ノ斷面圖型



部ヲ蟲様突起向膜、直腸ノ上部ニ附着スル部ヲ直腸間膜ト云フ、是等ノ諸間膜ハ種々臟器ニ緊張シテ若明ナル級壁ヲ現ハスモノナリ、之ヲ鞅帶ト名ケ、其數多ナカラズ、又夫々ノ名稱有リト雖モ餘リ必要ナシト思ヘバ之ヲ記セズ、諸内臟ハ初メ後腹壁ニ於テ腹膜ノ外部ニ在リテ漸次昇高旺盛トナルニ從ヒ漸々遊離的ヲ以テ囊内ニ突出スルモノアリ、或ハ後壁ニ於テ其位置ヲ固定セラルモノアリ、茲ニ於テ只關係愈々複雑ト

トシテ、其部部ヲ大腸膜ト云ヒ、後部ヲ小腸膜ト云フ、大腸膜ハ内臟トシテ、小腸膜ハ外臟トシテ、小腸膜ハ脊柱ト胃ノ後部ノ間ニ残ル狭小ノ腔隙ナリ、而シテ小腸膜ハ八根膜トシテ、肝ノ下部ヨリ胃ノ上縁ニ跨リテ小腸膜ノ後葉トナリ、腹膜ノ下縁ヨリ延鳴シテ大腸膜ノ内葉ヲ爲シ、重複シテ後腹壁ニ連

結腸膜ノ構造、腹膜ノ組織は層状上皮ヨリ成リ、結締織ノ纖維ハ縦横一方向ニ伸長シ、弾力纖維ヲ混ズ、上皮ニハ諸々ニ裂孔アリ、之ニ由リ淋巴管ト腹

腔ニ入ルモノナリ、腹膜組織ハ緻密ナルアリ、或ハ鬆粗ナルアリ、或ハ其中ニ

第五款 内分泌腺學

第一章 内分泌腺學總論

内分泌腺ハ一ニホルモン腺ト稱ヘ、導管即排泄管ヲ有セザル腺體ニシテ、只產生物ハ直ニ血管又淋巴中ニ附與シ、以テ血中ノ有害成分ヲ無害ニシ、體質代謝上ニ影響ヲ及ボシ、各般ノ植物性官能ヲ支配シ、隨ツテ機能的ニ働作ノ亢進、或ハ抑制ヲ爲スト共ニ、形成的作用即生長、體形、體質、進ンデハ心性等ニ深甚微妙ナル影響ヲ與フルモノナリ、而シテ確實ニ内分泌腺トシテ數フベキモノハ甲状腺、上皮小體、胸腺、睪下垂體、松下腺、睪臟、脾臟、副腎、睪丸、卵巢、攝護腺及恐ラクハ尾圍骨腺、頸動脈腺等ナリ、其他肝臟、胃粘膜、腸粘膜、淋巴腺、胎盤等ヲ數フル人アレドモ未ダ確定セス。

第二章 内分泌腺學各論

(一) 松果腺

松果腺ハ四邊形錐形ノ上ニ占位セル、一應ノ灰白色ナル錐體大ノ小胞體ニシテ、
其正ノ初期ニ於テ尚ほ球形ニ充塞充起ト稱スル突起ヲ生ジ、其後端ハ廣大シテ松
果體ニ形成シ、夫レト連絡スル松果莖ト稱奇リテ松果腺ヲ成ス。
松果腺ノ構造 松果腺ハ表面ヲ覆ヘル軟腦膜ヨリ進入スル結核細胞ニ由リテ實
質ヲ多ク充塞ニ區別セラレ、網狀組織ニ近似ス、實質細胞二三種アリ、一ハグ
リ状細胞ニシテ、一ハ線粒ニ富ミタル松果腺細胞ト云ヒ、他ハ球形ト稱スル小
細胞ナリ、腺實質ハ四乃至六歳ノ頃ヨリ進行的萎化ヲ示シ、軟化空癩ノ形成、
結核細胞ノ増殖、巨核ノ充塞ヲ起ス、但シ高生ニ至ルモ通常萎化ノ活動スル細胞

(二) 腦下垂體

腦下垂體ハ頭骨底ノ蝶鞍骨土耳新鞍ノ中ニ位シ、小指頭大ノ小體ナリ、腺性ノ
前葉ト神經性ノ後葉ヨリ成リ、甚ダ血管ニ富ミ腺腔ニ膠質液ヲ充シ、甲状腺、
副腎皮質、脾ノランゲルハンス氏島ト同ジク、模範的内分泌腺タルノ機能ヲ有
シ、其分泌物ヲ直接血液内ニ分泌ス、前葉ニハ腔隙アリテ直接後葉ヲ被包スル
部ト、然ラサル部ヲ分ツ、前者ヲ中間部ト云ヒ、後者ヲ腺部ト稱ス、又前葉ノ
一部ガ下垂體莖ヲ被包シ、灰白部ニ達スル部ヲ灰白部ト云フ、漏斗體ノ媒介
ニ由リテ第三腦室ト通ジ、其分泌物ヲ腦室液ニ與フ。

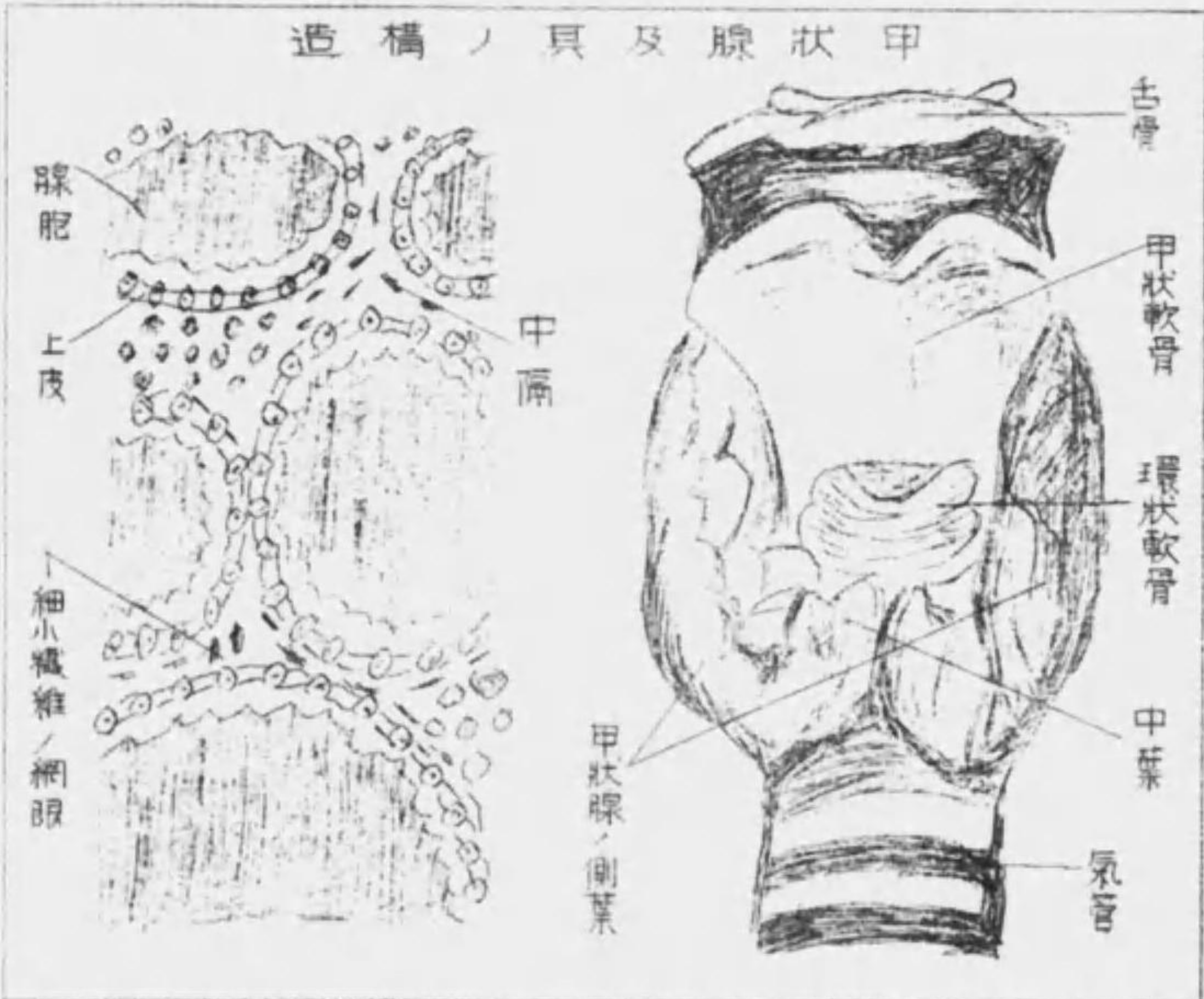
腦下垂體ノ構造 腺性ノ前葉ハ網狀ニ配列スル染色性及非染色性上皮腺細胞
ヨリ成リ、後葉ハ組織的ニグリヤ細胞及其突起神經纖維色素等ニシテ、兩葉共
ニ膠質液ヲ充ス。

(三) 甲状腺

甲状腺ハ氣管ノ前部喉側部ニ於テ表面小顆粒状ヲ呈シ、形馬蹄形ニシテ長圓形
ノ兩側部即右葉左葉ト廣狹不同ノ中央部即峡ヨリ成ル、而シテ其面即氣管及喉
頭ニ接スル面ハ、之ニ應シテ陷凹シ、下舌骨筋ハ甲状腺ノ一部ヲ被ヒ、頸筋膜ハ
(391)

甲状腺の構造
 甲状腺は、舌骨の
 下、甲状軟骨の
 前方にあり、その
 構造は、左右の
 葉に分かれ、中央
 に結合部がある。
 甲状腺は、血液
 による栄養を受け、
 副交感神経の支配
 を受ける。

(圖 六十九百第)



其表面ヲ通過ス。此腺ハ通管
 後方ニ延長シテ咽頭ニ達シ、
 左側ニ在リテハ食道ニ接ス。
 又後縁ハ兩側トモ後部大血管
 ニ近スルモノナリ。右葉通常
 左葉ヨリモ長ク、又幅モ少シ
 フ廣シ。各葉ノ方向ハ下方ヨ
 リ斜ニ後上方ニ向ク。第五乃
 至第六氣管軟骨輪ヨリ甲状軟
 骨ノ下縁ニ向ツテ延長シ、結
 締組織ヲ以テ甲状軟骨、板環
 状軟骨及氣管ニ附着シ、該ハ
 大小不定ニシテ往々缺アルコ
 トアリ。
 甲状腺ノ構造 活潑組織ヨリ

成ル處ノ皮質ト、腺胞ヨリ成ル處ノ髓質トヨリ成ル。皮質ハ髓質ニ進入シ、多
 数ノ小葉ニ區別ス、腺胞ノ壁ハ圓柱上皮細胞ニシテ、胞腔ニハ圓柱上皮ノ分泌
 即コロイドト稱スル蛋白質濃厚液ヲ有ス。

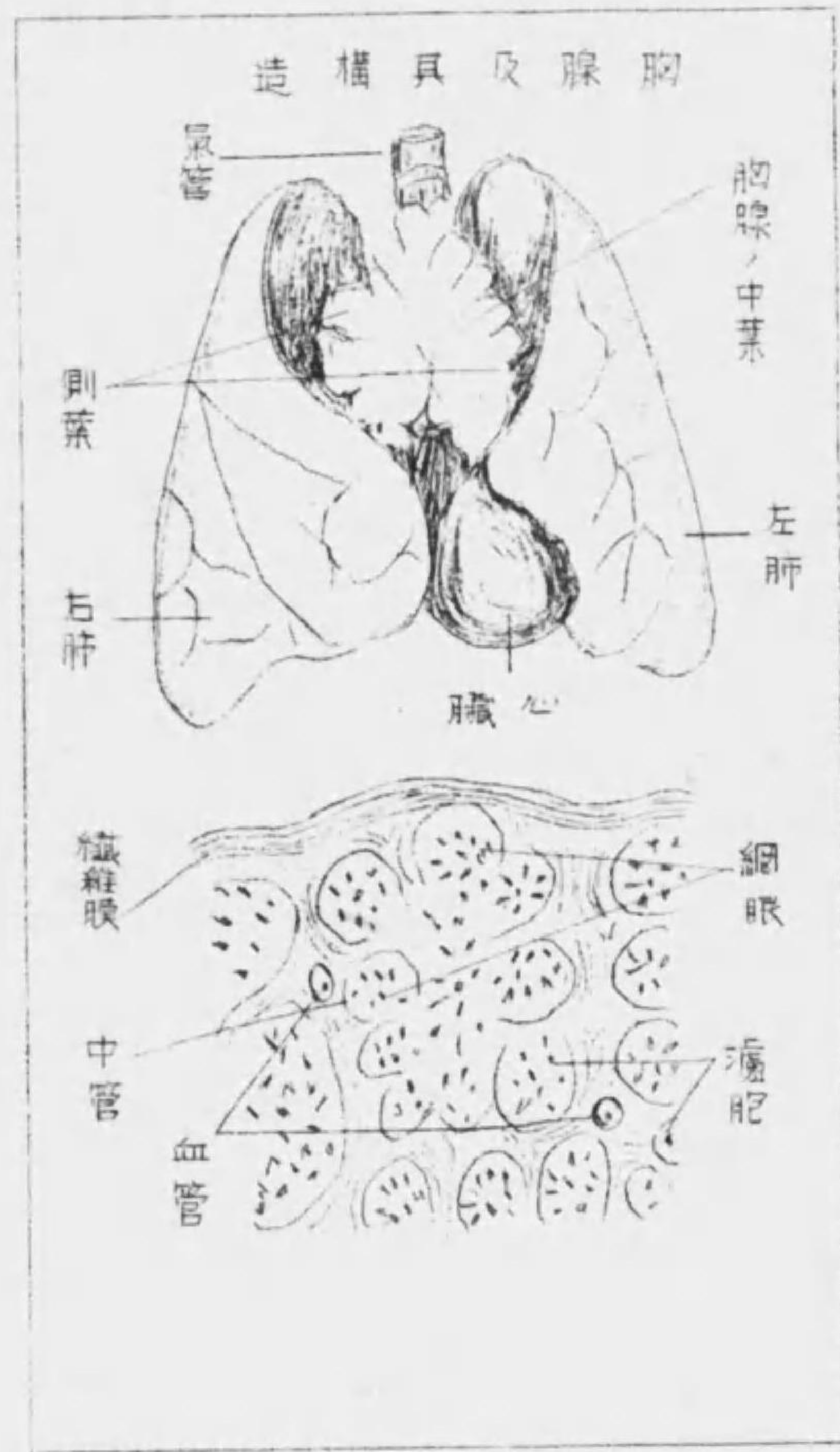
(四) 上皮小體 (副甲状腺)

上皮小體ハ約小豆大ニシテ鮮紅色ヲ呈シ、甲状腺ノ後面ニ在リ、其數左右ニ各
 二個ヲ附シ、之ヲ上及下副甲状腺ト名ヅク、上側副甲状腺ハ輪状軟骨ノ高サニ
 位シ、下側副甲状腺ハ甲状軟骨ノ下端ニ於テ甲状腺側葉ト食道ノ間ニ存在ス、其
 他遠隔ノ地ニ或ハ甲状腺ニ存在スルコト亦無キニ非ズ。
 上皮小體ノ構造 上皮小體ハ圓形小細胞相寄テ群集ヲ作り、細血管ニ由リ線維
 セラル、稀ニ小體內ニ不分明ナガラ管腔ヲ認ムルコトアリ。

(五) 胸腺

胸腺ハ胸骨上部ノ後側ニ於テ、大血管ノ前ニ在リ、此腺ハ小兒期ノ機官ニシテ、
 初生兒ニ於テハ扁平圓形ヲ呈シ、長楕圓形ノ不一様ナル兩葉ヨリ成ル、其下端
 (393)

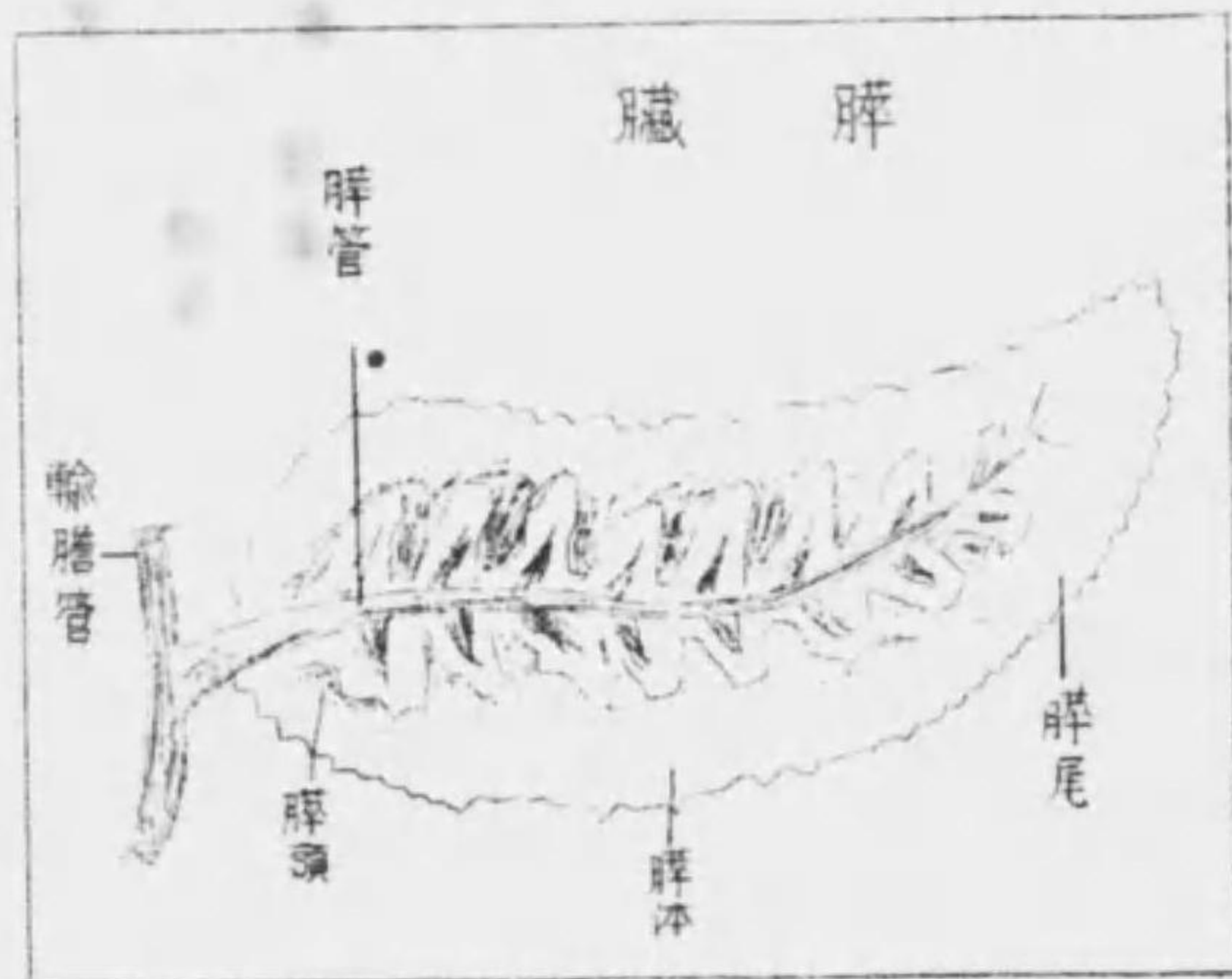
(圖七十九百第)



ル心前ノ
脂肪組織
中ニ具在
跡ヲ檢出
シ得ベシ
胸腺ノ質
造 胸腺
ハ纖維膜
及濃肥ニ
リ成リ、
其表面ハ

ハ優ク、上端ハ尖銳ニシテ、一葉ハ高ク上方ニ延長シ角トナル、而シテ初生兒ノ胸腺ハ諸腺官ト共ニ第一年ノ終リ迄發育スト雖モ、第二年ニ於テハ發育止ミテ殆ド静止ノ態ヲ取り、第三年ヨリ第八年或ハ九年迄漸々退化シテ脂肪組織之ニ代リ第十二年ニ至レバ全ク消滅ス、然レドモ尚大人ニ於テモ前縦隔ニ於ケ

(圖八十九百第)



(六) 脾臓

織膜ヲ以テ被ヒ、深ク實質内ニ穿入シ中隔リ大小不同ノ小葉ヲ分界シ、更ニ網取ヲ形成シ多クノ淋巴球ヲ含有スベシ。

脾臓ハ複管狀腺ニシテ輕度ノS字狀彎曲ヲ爲シ小槓ニ近似ス、胃ノ後壁第一腰椎ノ高ニ於テ腹却大動脈及下大靜脈ノ前ニ横位シ、其一端ハ大ニシテ十二指腸彎曲ニ箱入シ、仍チ其後方ニ延展シ、輸膽管及脾ヨリ穿通セラル、之ヲ脾頭ト云フ、他端即左方ハ漸々狹小シ尖端ヲ以テ脾ノ内面ニ接ス、之ヲ脾尾ト云フ、又頭尾ノ間ハ脾體ナリ、脾頭ノ十二指腸彎曲中ニ入ルヤ一部ハ上方ニ、一部ハ下方ニ延ブ、而シテ其下方ニ向フモノハ鉤狀ヲ爲シテ後方ヨリ上腸間膜動靜脈ヲ

團糖ス、之ヲカインスロト氏脾ト云フ。

脾臓ノ前面ハ腹膜ヨリ被ハレ、網膜囊ト稱スル空隙ニ由リテ胃ヨリ隔テラル。脾ハ又體腔動脈、上腸間膜動脈間ニ位スルガ故ニ、其後面ハ下大動脈、上腸間膜動脈、脾門脈ノ始部、横隔膜部等ニ結締織ヲ以テ附着シ、脾ト上部膈腔間ニハ淋巴管及腹アリ、脾動靜脈ハ脾ノ上後縁ニ於ケル者ヲ走り、脾臓ハ十二腸腸壁ノ凹側ニ密着シ、且少シク其縁ノ周圍ヲ掩ス。脾臓ノ構造、脾臓ノ導管即脾血管ハ其腹ノ中央稍々其後方ヲ尾端ヨリ脾頭ニ向ツテ走り、小葉ヨリ來ル數個ノ枝管之ニ注流シ、末端ハ輪應管ノ左方ヨリ十二腸下行部ノ後内壁ヲ穿通シ乳頭ニ開口ス、又其副管ヲ副脾管ト云ヒ、屢々異常ニ發達シテ恰モ本來ノ脾管ノ如キ觀ヲ呈スルコトアリ、稀ニ副脾ト稱スルモノアリテ上方胃ノ附近ニ達シ、下方ハ小腸ノ下部ニ達ス。

(七) 脾 臟

脾臓ハ殆ド橢圓形ノ臟器ニシテ、胃底ノ左方ニ於テ横膈膜ノ下面ニ接シ、脾臓紅色乃至深灰白紅色ヲ呈シ、其質軟ナリ、之ヲ内外兩面、前後兩縁及上下二端

脾ノ血管、脾動靜脈、脾ノ神經、脾ノ分泌、脾ノ分泌、脾ノ分泌

ヲ區別ス、内面ハ扁平若シクハ少シク陷凹シ、石方ニ向ヒ、中央縦走隆線ニ由リテ前後二面ニ分レ、前部ハ大ニシテ胃底ニ接スルヲ以テ胃面ト呼ビ、後部ハ狭小ニシテ腎及副腎ニ接シ腎面ト名ケラル、外面ハ凸隆シテ左方ニ向ヒ横膈膜ニ接ス、故ニ横膈膜ト稱ス、又腎面ノ下部ハ脾尾及左結腸屈曲部ニ接シ底面ト云フ、縦走隆線ノ前部ニハ小陷凹ノ不規則ニ並行スル處アリ、之ヲ脾門ト稱シ、血管、淋巴管神經ノ出入部ナリ、前縁ハ銳ニシテ多數ノ切痕ヲ有ス、故ニ又截痕線ト名アリ、後縁ハ幅廣ク隆起ス、故ニ鈎縁ト云ヒ、上端ハ稍々廣ク下端ハ狭シ、脾臓ノ構造、脾臓ハ緻密織膜及脾髓ヨリ成ル、緻密織膜ハ脾ノ表面ヲ被ヒ、尚其下ニ彈力纖維及平滑筋纖維ヲ含有シタル一層ノ結締組織膜ヲ被ル、之ヲ白膜ト云フ、此膜ハ其内面ヨリ實質ニ向ツテ入り、更ニ種々分裂シテ細小纖維ノ網眼ヲ構成ス、之ヲ脾材ト云フ、脾髓ハ顆粒狀質ニシテ微細ナル網狀締結組織ト饒多ノ細胞ヨリ成リ、赤色ヲ帯ビ脾材ノ網眼内ヲ充填ス、又脾實質ノ動脈管壁ニ沿テ屢々ニ無數ノ白血球アリ、血管鞘之ヲ經絡シテ饒多ノ膜囊ヲ形成ス、之ヲ脾結核又マルヒギト氏小体ト云フ、又此膜囊ヨリ幽微ノ纖維ヲ生ジ細ヲ作り白血球ヲ含有ス、故ニ白髓ノ稱アリ、副脾ハ屢々見ル處ニシテ一個或ハ多數アリ、太サ

ハ小豆大ヨリ胡桃大迄ノ差アリ、通常胃脾靱帯ニ附着シ、脾トノ距離モ一握ナラズ
(398)

(八) 副腎

副腎ハ腎臟ノ上端ニ於テ恰モ帽ノ如ク扁平三角形ニシテ、帯横褐色ナリ、尖端ハ溝ク上方ニ向ヒ、其底ハ稍厚ク陷凹シテ腎ノ上端ニ接シ、後面ハ横隔膜ニ接シ、前面ノ右側ハ肝臓、左側ハ胃及脾ヨリ被ハレ、色ハ帯褐色ヲ呈シ、腎ノ脂肪嚢内ニ被包セラレ結締組織性ノ被膜ヲ被リ、前面ノ下部ニ血管神経ノ通路ナル副腎門アリ、通常左右不同ニシテ右ハ縦徑長ク、上端ハ尖リ、左ハ廣ク、上端ハ圓シ。

副腎血管ハ
副腎動脈下極
降腹動脈ノ分
枝腎動脈分枝
腎動脈分枝

副腎ノ構造 副腎ハ纖維膜、皮質及髓質ヨリ成ル、纖維膜ハ副腎ノ表面ヲ被ヒ、且皮質ニ分散シテ數條ノ纖維束ヲ構成ス、而シテ髓質ニ達セバ細小ノ纖維ト成リ網眼ヲ形成シ、皮質ニ在リテハ横徑ニ微弱ノ纖維ヲ生ジ纖維束ヲ連絡シ腔洞ヲ作り細胞ヲ成ス、皮質ハ黄色ニシテ稍々硬ク三層ヲ爲ス、表層ニ於ケル細胞ハ扁平ニシテ圓形ヲ爲ス、中層ハ索状ヲ爲スト雖モ、下層ノ細胞ハ稍々

副腎動脈ト
ナリ下大動脈ニ
シテハ大動脈
ノ分枝ハ大動脈
ノ分枝ハ大動脈
ノ分枝ハ大動脈

締組織中ニ不規則ニ存在シ、黄色若クハ黄褐色ノ色素顆粒ヲ含ム、故ニ皮質ヲ別チテ球状帯、索状帯、網状帯トス、髓質ノ細胞ハ紡錘状ニシテ顆粒ヲ含ミ、薄壁ノ静脈管ヲ圍擁シ、相連リテ網状ヲ呈ス。

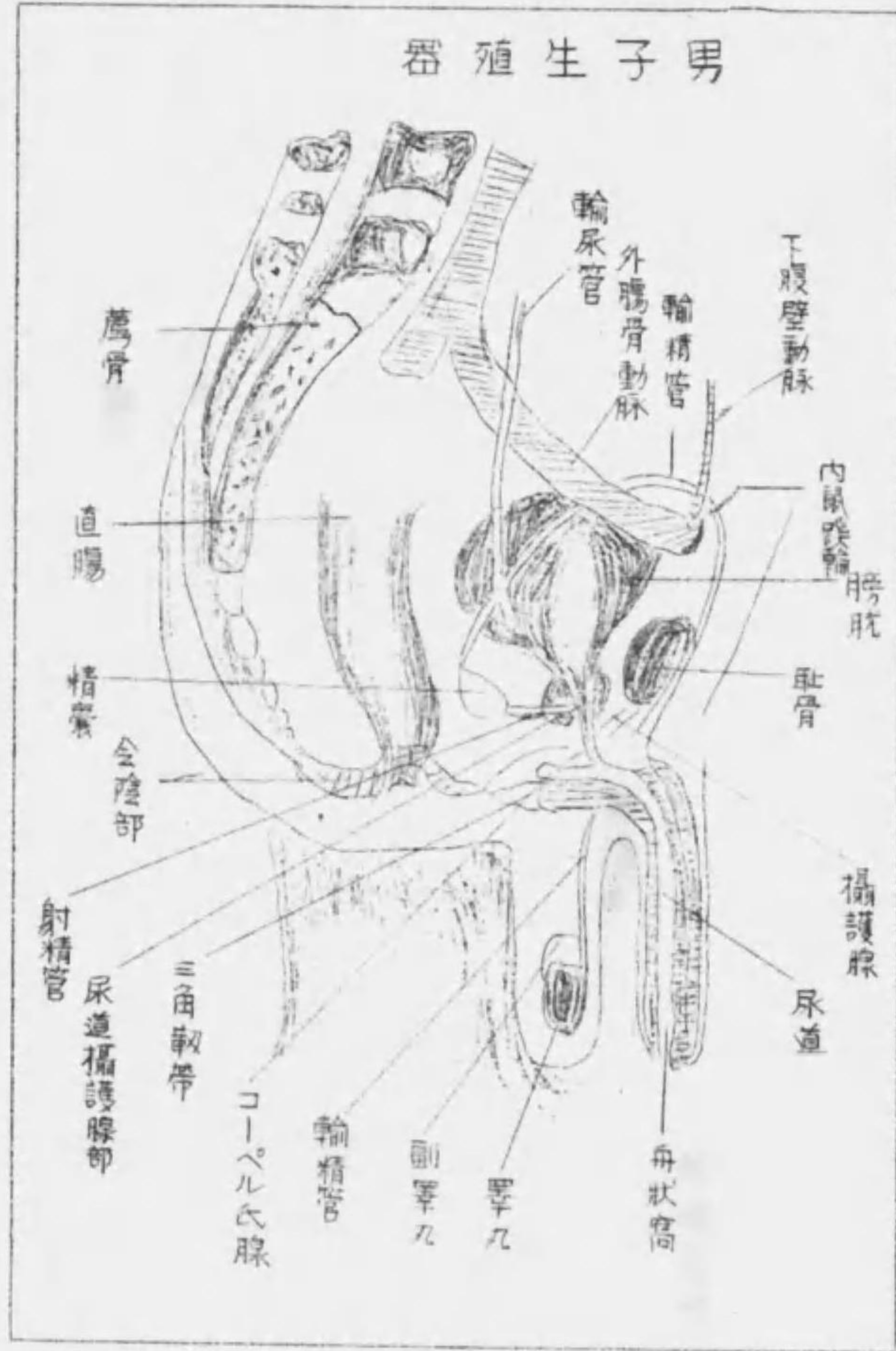
(九) 睪丸

睪丸トハ陰囊中ニ存在シ精液ヲ造ル機關ナリ、而シテ其形狀ハ側方ニ壓平セラレタル橢圓形ニシテ内外兩面、側面、前後兩縁及上下兩端ヲ區別スルコトヲ得ベシ、後縁ハ副睪丸及輸精ニ附着シ、此部分ニ於テ血管及神経ヲ受容ス、前縁兩側面及上下兩端ハ遊離シ、其遊離面ノ前三分ノ二ハ光澤無クシテ帯灰赤色ヲ呈スレドモ、後部副睪丸ニ接近スル處ハ白色ニシテ光澤ヲ有ス、上端ハ前方ニ向ヒ、下端ハ後内方ニ向ヒ、從ツテ後縁即附着縁ハ上内方ニ向ヒ、外側面ハ少シク後方ニ向フ、

睪丸ノ構造 睪丸ハ睪丸白膜、小葉及細精管ヨリ成ル、睪丸白膜ハ白質ノ纖維膜ニシテ睪丸ノ表面ヲ被覆シ、尚進シテ後縁ヨリ僅カニ實質中ニ進入シ縱隔ヲ

(圖 九 十 九 百 第)

器 殖 生 子 男



表面ニ向ヒ放射状ニ分散ス、之ヲ睾丸中隔ト云フ、是即睾丸小葉ヲ分界スルモ
ノナリ、小葉ノ形状ハ長圓錐形ニシテ、尖端ハ睾丸中隔ニ向ヒ、基底ハ周圍ニ向
ヒ、二三
ノ細精管
ヲ圍繞ス
ベシ、精
管ハ小
葉中ニ迂
回シ漸次
尖端ニ向
ヒ稍々直
達ス、之
ヲ直精管
ト云フ、
是ニハ

モル氏體內ニ穿入シ無壁ト成リ、互ニ吻合シテ網ヲ成ス、之ヲ睾丸精網ト稱シ、
其精網ノ上部ヨリ十乃至二十條ノ細管出デテ睾丸後縁ノ上端ヲ出ヅ、之ヲ輸出
管ト云フ、氈毛上皮ヲ附シ螺旋状ニ回轉シテ副睾丸頭ヲ形成ス。

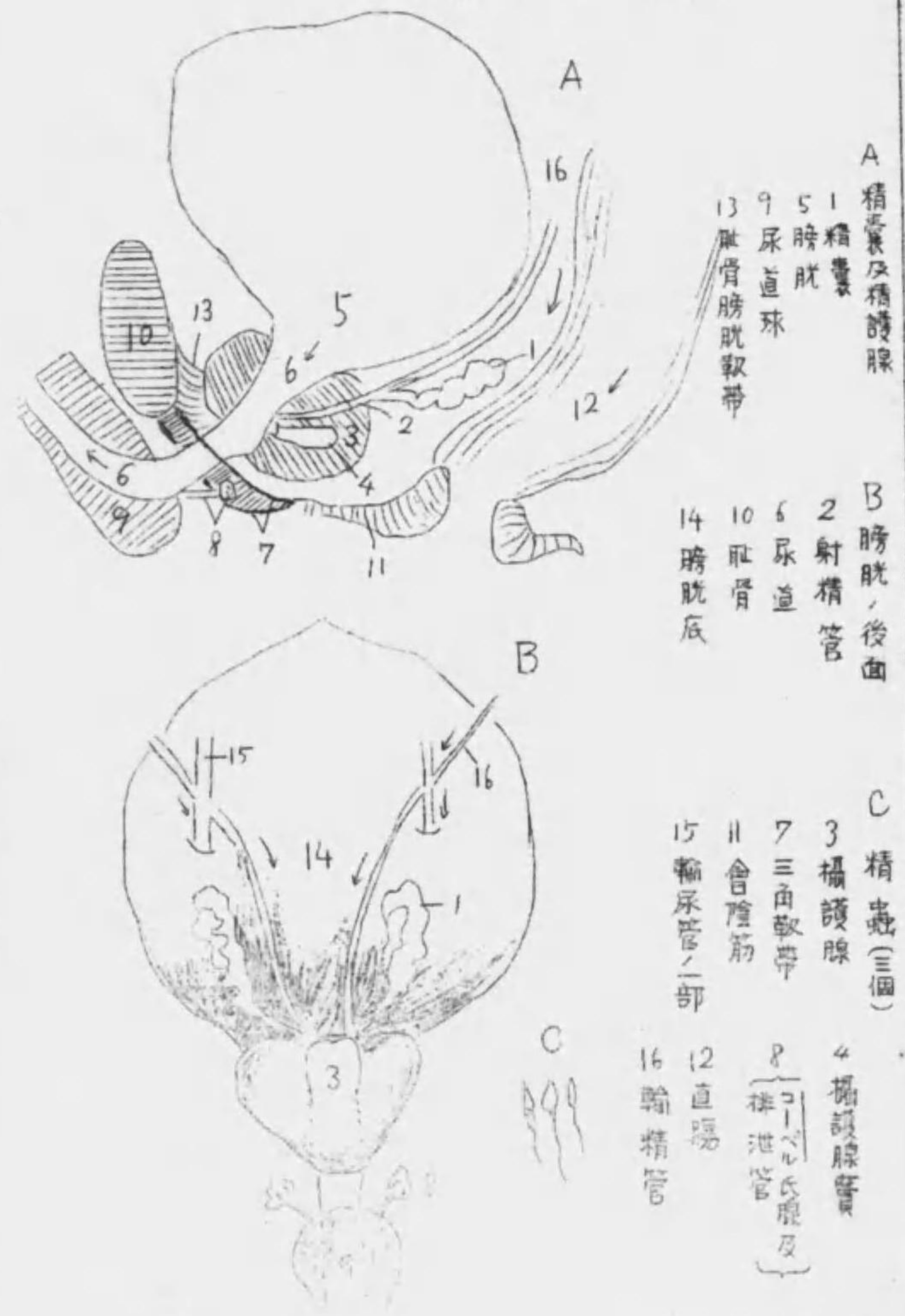
(十) 攝 護 腺

攝護腺ハ栗子状ヲ呈スル一個ノ腺ニシテ、膀胱ノ尖端ニ於テ尿道ノ始部ヲ通過
スルモノナリ、之ヲ區別シテ基底、尖端、前後ノ二面及側縁トス、基底ハ之ヲ
膀胱面ト云ヒ、上方ニ向ヒ膀胱ト接ス、尖端ハ之ヲ攝護腺尖ト云ヒ、精囊ニ對
ニ面シ、前面ハ之ヲ恥骨面ト云ヒ恥骨ニ對シ、骨盤筋膜ノ皮壁ニ由リテ之ト連
接シ、後面ハ豊隆ニシテ直腸ニ觸接シ茲ニ二條ノ縱溝ヲ呈ス、是レ射精管ノ穿
通部ニシテ、後面ヲ左右中ノ三葉トナスモノナリ、側縁ハ穹隆ヲ帯ビ、膀胱筋
ニ觸接ス、腺ノ實質中ニ小囊アリ、尿道精阜ノ中央ニ開口ス、之ヲ攝護腺竇ト云
フ、而シテ攝護腺ハ二個ノ側葉及中葉或ハ腺岐ヨリ成リ、側葉ハ腺ノ前面ニ存
ズル淺溝ニ由リテ左右ノ兩葉ニ分カル、中葉ハ通常特別ノ葉ヲ爲サズシテ中葉
ノ後面ニ於テ兩側葉ノ連合ヲ媒介スル、而已ニシテ一種ノ透明粘稠液ヲ分泌ス

攝護腺ノ血管
ハ下膀胱動脈中
奇動脈ノ分岐部
脈ハ膀胱動脈ハ病
靜脈表ニ入ル
神經ハ交感神
經ヨリ來ル

(圖 百 = 第)

腺 攝 護 及 囊 精



精液ニ混シテ尿道ニ排泄ス。

攝護腺ノ構造 攝護腺ハ纖維膜、筋組織及腺質ヨリ成リ、纖維膜ハ腺ノ表面ヲ被覆シ骨盤筋膜ト密着シ、恰モ攝護腺囊ノ如シ、筋組織ハ平滑筋纖維ニシテ所々ニ横紋筋纖維ヲ混合シ腺質ヲ纏結ス、海绵状ナル腺質ハ葡萄状腺ヨリ成リ、數小葉ヲ呈リ、許多ノ排泄管ヲ精阜ノ周圍ニ開口ス。

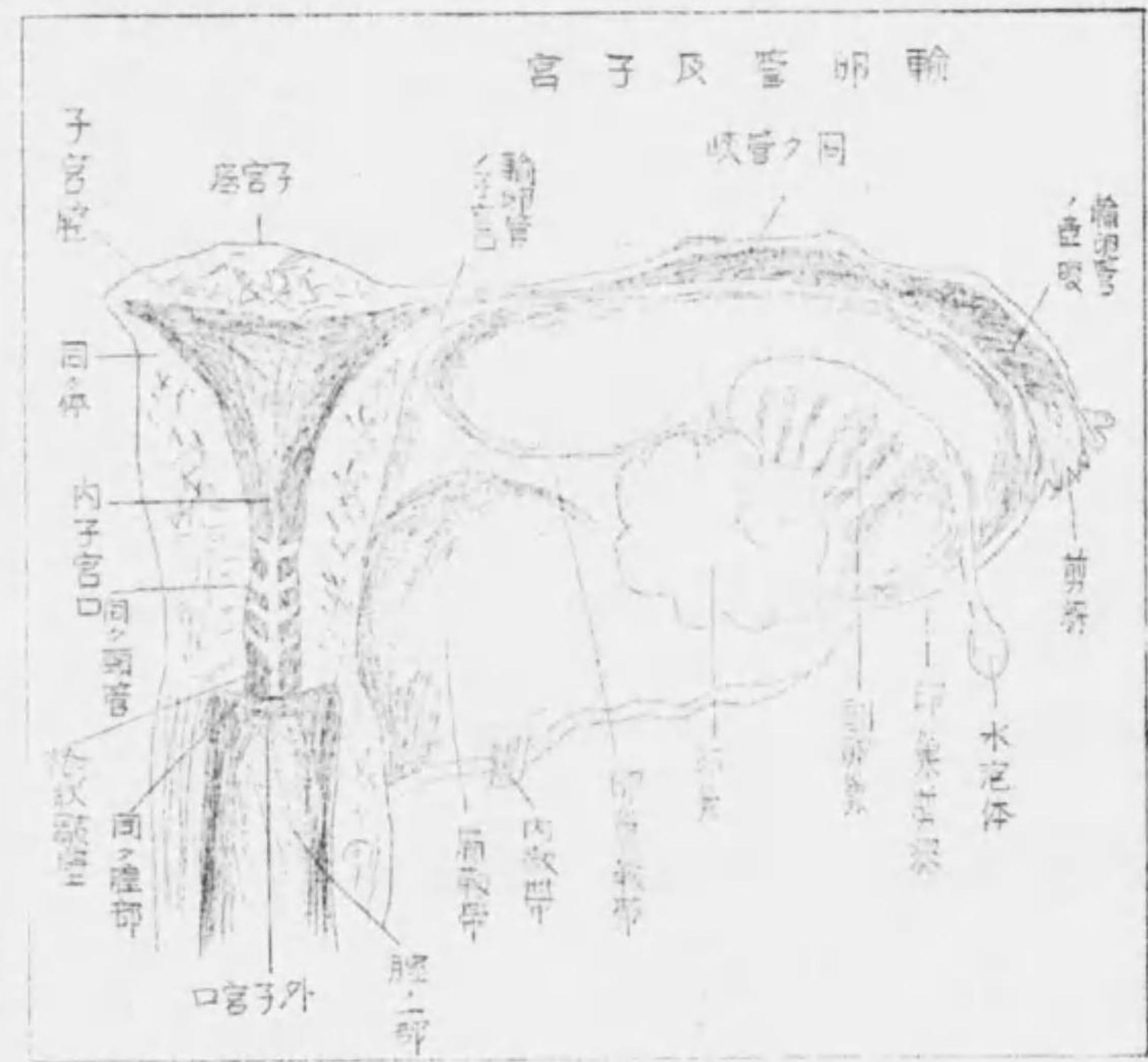
(七) 卵 巢

卵巢ハ扁平卵圆形ナル卵ヲ生成ノ器関ニシテ、又一種ノホルモーン腺ナリ、小骨盤内ニ於テ子宮體ノ兩側、子宮角軟帶ノ後側ニ位シ、後部ハ腹膜ヲ以テ被ハル、此部分ヲ卵巢囊ト稱シ、卵巢固有軟帶ニ由リテ子宮側縁ノ後上方ニ附着ス、蓋蔽色ヲ帯ビ、前後ノ二面上下二縁内外ノ兩端ヲ有ス、内端ハ鋭クシテ固有卵巢軟帶ニ由ツテ子宮ニ連繫シ、外端ハ緩クシテ卵巢前縁ニ連リ、上縁ハ稍々穹隆ニシテ、下縁ハ頗ル平坦ナリ、茲ニ一着アリ、之ヲ卵巢門ト云ヒ、即血管神經ノ出入部ナリ、又前面ハ骨盤腔ニ、後面ハ骨盤壁ニ向フ。

卵巢ノ構造 卵巢ハ固有膜髓質及皮質ヨリ成ル、固有膜即卵巢白膜ハ纖維様結 (403)

卵巣・血管ハ
子宮動脈ノ分
枝ト卵巣動脈
トシテハ交感
神経トシテ
神経及血管
トシテ

(圖一百二第)



締織ニシテ卵巣ノ表面ヲ被
覆シ、其門ニ由テ髓質ニ移
行ス、髓質ハ結締組織及滑
平筋纖維ヨリ成リ、大ニ血
管ニ富鏡ス、又皮質ハ髓質
ノ外部ヲ爲スモノニシテ幽
微細結核結締織ヨリ成リ、
是ニ大小無数ノ濾胞ヲ含有
ス、其大ナルモノヲグラッ
フ氏胞、又泡狀卵胞ト稱シ
胞液ヲ藏ス、益々发育スレ
バ固有膜ニ向テ突出スベシ、
而シテ胞ノ内壁ハ顆粒狀ヲ
附シ、其一側ニ於テ細胞ノ
核積卵アリ、之ヲ卵享ト云

神經ハ交感神經
ニシテ尾閥管
ヨリ来ルモノナリ

フ、其中心ニ一箇ノ大ナル細胞アリ卵子上云フ、透明ナル菲薄ノ膜ヲ具ヘ蛋黃
ヲ藏シ核ヲ含ム、胚胞ト稱シ復タ肝點ナル仁ヲ有ス。
(A) 副卵巢ハ卵巢ノ附近ニ於テ子宮廣軟帶ノ兩葉ノ間ニ存シ、其充分發育シタル
時ハ縱走及横走ノ二管ヨリ成リ、前者ハ輸卵管ニ並行ス、之ヲ特ニ縱走副卵巢
管或ハカルトネル氏管ト云フ、此ニ子宮ノ外側壁ニ沿テ下方ニ走り腔ニ連スル
コトアリ、後者ハ之ヲ横走管ト云ヒ、卵巢門ノ近傍ヨリ起リ縱走管ニ注グ、而
シテ胎生期床生殖器ノ遺物ニシテ、形三葉形ヲ呈ス。
(B) 側卵巢ハ副卵巢ニ比スレバ小ニシテ、且ツ是ヨリ内側ニ寄り子宮廣軟帶ノ内
半部中ニ位シ、子宮外側縁ニ連スルコト稀ナラズ、同ジク胎生期ノ遺物ニシテ
分岐シタル數個ノ管管ヨリ成リ、内面ハ圓柱上皮ヲ被ル。

(三) 尾閥管腺

尾閥管腺ハ小麥粒狀ニシテ帶黃赤色ヲ帯ビ、尾閥管尖端ノ前面ニ在リ。
尾閥管腺ノ構造 尾閥管腺ハ結締組織ト平滑筋纖維ニシテ、中萇管動脈ノ末端
恰モ囊ニ膨大スルモノノ如シ、而シテ管腔ハ圓形ニシテ數條ノ微絲血管ヲ發生
(405)

シ、管壁ニ於テ網ヲ作り、遂ニ一二ノ静脈トナリ、中層骨静脈ニ返ルモノトス。

(三) 頸動脈

頸動脈ハ同ジク多粒大ノ小脈ニシテ、内外頸動脈分岐部ノ内側ニ在リ、
頸動脈ノ構造 頸動脈ハ結締織ト少量ノ滑平筋織維ニシテ、壁面ヲ構成シ、
僅ニ蹄係状或ハ糸絨状ノ微細血管ヲ圍擁スルモノナリ。

第六款 感覺器学

第一章 感覺器学總論

感覺器トハ外界ノ現象ヲ神経系統ニ導キ、以テ感念感覺ヲ誘起セシムル装置ニシテ、外界ノ刺激ニ直接スル末梢感覺装置ト、認識スル所ノ精神中枢部間及ミ、
稍ハ中枢トヲ連絡セシムル所、中枢間筋肉ヨリ構成セラレルモノナリ。固體液体気体ノ接觸、温熱ノ昇降、光線響波ノ傳播、香味反匂、物質穿透末梢感覺装置ノ刺激トナル、固テ是等ノ刺激ヲ感ズル所ノ装置ヲ分テテ、觸覚、嗅覚、視覚、味覚反聽覚トス、即皮膚、鼻、眼、舌、耳ノ五種ニシテ、又五官器トモイフ。然レドモ知覚神経ハ筋肉、骨、歯牙、粘膜等ニ於テモ一定ノ末梢装置ニ終リ、或種ノ刺激ヲ感知スルノ能力ヲ有ス、故ニ外界ノ刺激ヲ感知スルハ、能カハ極リ及ニ所謂、感覺器專信ニハアラザルヲ知ルベシ、然レドモ、鼻、眼、舌、耳ニ於ケル嗅、光、味、音等ノ感覺性ニ至リテハ他ニ比類ナキモノナリトス。

外皮ハ薄有、円形ニ覆ヒ大ニ彈力ヲ有シ、口、鼻、肛門、尿道口及腔口ニ於テ直ニ粘膜ニ移行シ、腹中温帯、觸圧等ノ刺激ヲ感スベキ神經終末管ヲ藏シ、且爪、毛、脂腺、汗腺等ヲ具シ、表皮層ハ上皮細胞ヨリ成リ、深層ハ專ラ結締組織纖維ニシテ、血管淋巴管及神經ノ細枝橫横ニ走り、下面ハ一般ニ鬆結締組織ヲ以テ筋膜ト連結ス、之ヨリ區別シテ三層トナス。表皮、真皮及皮下結締組織ニナリ、就中真皮ハ確然表皮ト分界スト雖モ、皮下組織トハ漸ク移行シテ證明ナル境界ヲ認ズ。

(A) 表皮 ハ更ニ分ナテ粘液層及角質トナス、粘液層又ハマルキキリ氏層ハ角質円形ノ細胞ニシテ、角層、下隣真皮乳頭ノ上ヲ覆ヒ、且乳頭間谷ヲ充填シ、常ニ分体増殖シテ角層細胞ノ缺ヲ補フ、有色人種ニ於テハ、尚色素顆粒ヲ含ム、其最深層ノモノハ、円柱形ノ無細胞ニシテ、楕円形ヲ呈シ、又ハ円形ノ棘細胞層ニシテ、散細ナリ線状突起ヲ以テ相連結シ、細胞間橋ヲナス、色素、ミグ

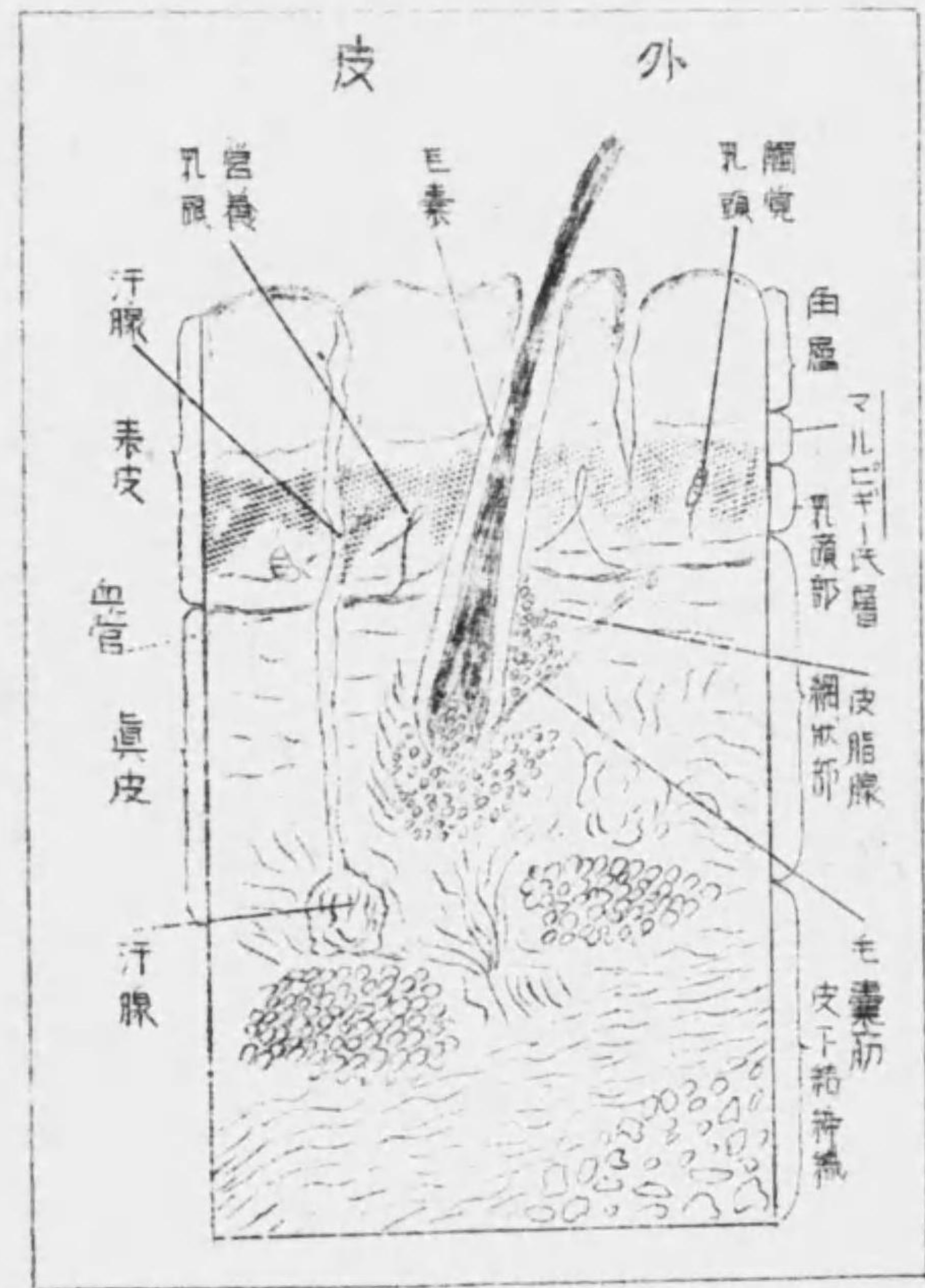
扁平ノ細胞ニシテ、最も深部ニ在リ、不断ニ漸次鱗片狀ヲ以テ剝離シ、新陳代謝ヲ営ムモノナリ、但シ手掌及足跡ノ如キ強厚ノ部位ニ於テ、粘液層及角層兩層、一ハ中間層ヲ區別スベシ、而シテ粘液層ハ死後直ニ腐敗性ヲ来スト雖モ、角層ハ却ツテ乾燥シ、其ノ手足ニ於テハ、容易ニ角層ヲ剥離スルヲ得ベキ時期アリ。

(B) 真皮 ハ緻五ナル纖維束結締組織ヨリ成リ、彈力纖維及扁平筋纖維ヲ混ジ、神經血管ニ富饒ス、之ヲ分ナテ乳頭層及網狀層トナス、乳頭層ハ其ノ血管密ニシテ、許多ノ乳頭ヲ有シ、血管系ハ神經ノ末端各乳頭中ニ入ル、其ノ血管ノ入レルヨリ管腔乳頭ト云ヒ、神經ノ入レルヲ觸覚乳頭ト云フ、網狀部ハ其下層ニシテ其質細軟ヲ呈シ、扁平筋纖維ヲ混ジ、汗腺脂腺並ニ其ノ排泄管口及毛根ヲ藏ス。

(C) 皮下結締組織即皮下峰窩組織 ハ纖維束結締組織ト僅ニ彈力纖維ヲ混ジ、真皮ニハ緊密ニ連絡スト雖モ、筋膜及骨膜トハ柔軟ニ連結スルヲ以テ、易ク移動スベク、質中大ニ脂肪ヲ含ミヲ以テ、又脂肪組織ノ名アリ、殊ニ腹壁下部坐骨部ニ於テ富有ナリ、外皮ノ骨面ヲ移動スル部分ニ於テハ屢々皮下粘液層ヲ生ズ、

即膝蓋骨、鼻峰突起反大轉子等ニ於テ見ルガ如シ。

(図二第百二)



(一) 皮膚ノ附屬

器官

(410)

汗腺ニ呈スルヲ以テ、一ニ管狀狀腺トモ稱シ、之ニ四種アリ、汗腺、汗毛、汗腺管、汗腺管。

皮膚ノ附屬器官
ニ分テテ、皮膚
ノ腺皮毛髪、乳
トナス。

△皮膚ノ腺
皮膚ノ腺ニハ
管狀腺及胞狀腺
ノ二種アリ、管
狀腺ハ多クハ、
迂迴回轉シテ、

汗腺ノ構造、汗腺ハ、纖維底、固形腺反及球形、細胞ヨリ成ル、但シ排泄管ハ在
次又ハ扁平上皮ナルコトアリテ、腺窩ノ如キ大ナルモノニアリテハ、纖維膜ハ
内部ニ縱走筋纖維ヲ見ルベシ。

(一) 腋毛腺又ヨリ汗腺、ハ腺管ニ於ケル汗腺ヲ存ス、而シテ其腺管、線球狀ヲ作
ルコトナリ、管腔ニシテ管腔ノ迂曲ヲ呈シ、腺毛ノ毛囊ト共ニ開口ス、又腺管ニ
於テハ通常ノ汗腺トモル汗腺トノ移行形ヲ呈スル腺アリ。

(二) 汗腺、ハ軟骨性外腺直皮下脂肪層、細腺中ニ於テ交互ニ集結シテ存在ス、
腺管ハ僅カニ旋回シ、小児ニ於テハ毛囊ニ、成人ニ於テハ毛囊ノ傍ヲニ於テ、
開口シ、數層ノ上皮細胞ヲ以テ被ヘル。

(四) 肛門腺、此腺ハ肛門周囲ヲ輪狀ニ取り囲ムモノニシテ、汗腺ヨリモ大ナリ、
(411)

然レドモ深部ニ内肛門括約筋ノ部ニ蔓延スルモノハ小ナリ。

(1) 皮膚腺 ハ又毛囊腺ト稱シ。單胞狀腺ニ屬シ。表皮ノ網狀部中ニ在リテ、主
トシテ 毛囊中ニ開口シ、其腺体ハ 葡萄狀腺ニシテ小腺胞ヲ有シ、排泄管ハ
短ニシテ 毛囊中ニ開口シ、口部ノ邊緣、小陰唇、陰茎冠反包皮等ニアリテハ
蓋ニ表穴ニ開口ス。
皮膚腺ニ屬ス。皮膚腺ハ腺推体 固筒膜 円形或ハ壱核形細胞ヨリ成リ、管腔
細胞細胞ニ因テ有ス。

B 三 髮

毛髮、其構造ニテ 毛根トシテ 毛囊内ニ位シ、大ニ膨大ス、之ヲ毛球ト云ヒ、
手更ニ縮短シテ 毛根トシテ 毛根トシテ 毛根トシテ 毛根トシテ 毛根トシテ 毛根トシテ
皮ニ生ズルニシテ、
一 毛根 ハ表皮ノ網狀部中ニシテ毛囊内ニ位シ、大ニ膨大ス、之ヲ毛球ト云ヒ、
其部ニシテ方形形ノ有核細胞ヨリ成リ、漸次上部ニ至ルニ從ヒ扁平ノ細胞トナル
或ニ扁平ノ有核細胞トシテ 毛母トシテ 毛母トシテ 毛母トシテ 毛母トシテ 毛母トシテ

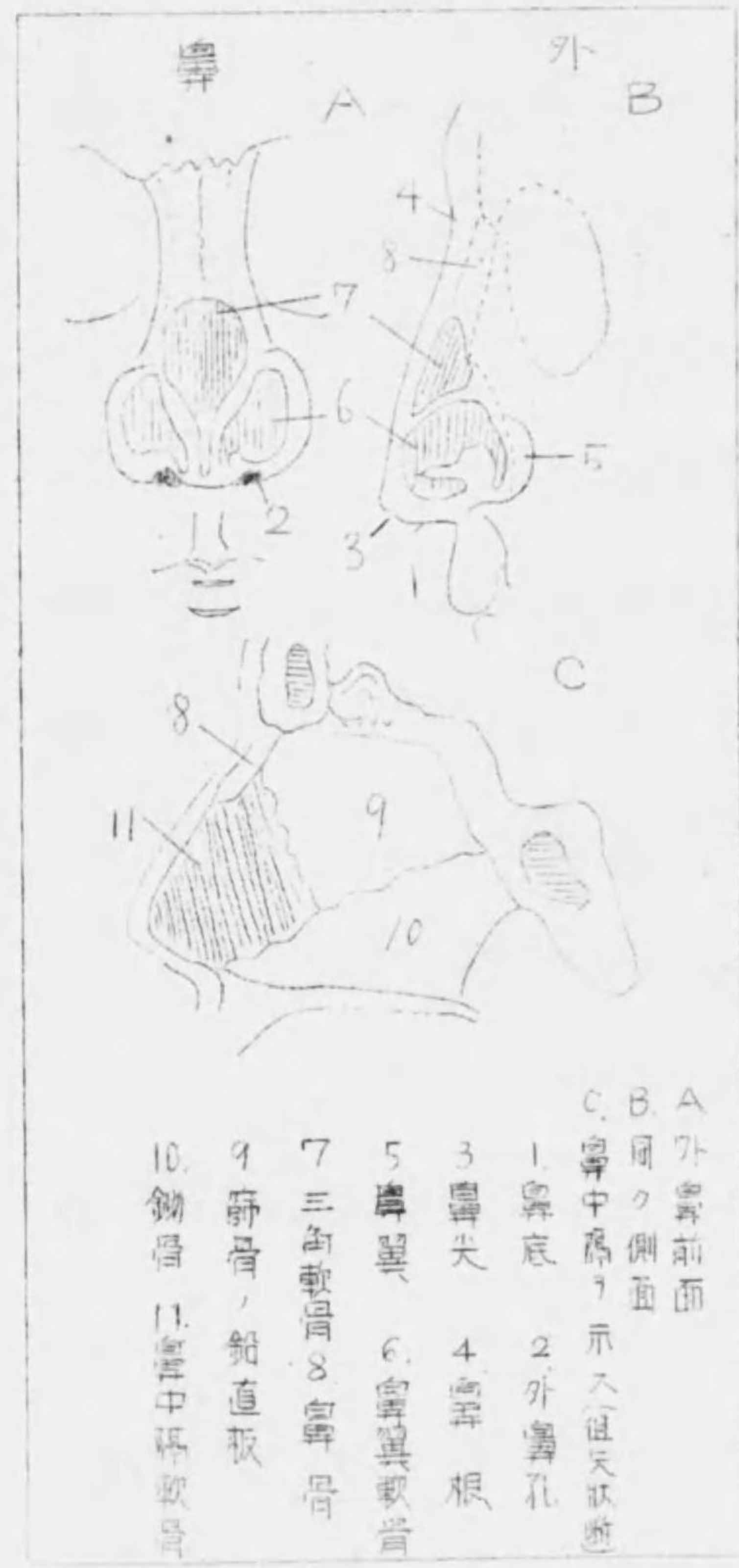
皮膚腺ハ毛幹ノ基礎ニシテ 纖維形ノ扁平細胞ヨリ成リ、毛幹上皮下ニ在リテ、
液層ニ在リ、而シテ皮膚腺ハ 葡萄狀腺ニシテ 細胞間ニ小腔隙アリテ 空氣
ヲ含ス、又毛幹上皮下ニ毛根ニ在リテハ 無色單層ノ多角細胞部ニ在リテハ 橫行
溝推狀トシ、

以テ毛根ハ毛幹ノ中軸ニシテ、暗紫色ノ顆粒ヲ呈シ、脂肪色素及空氣ヲ含フ、
其下部ニ在リテハ 之ヲ球狀トシ、毛根ノ下部ニ在リテハ 大ナ
ク多角形ノ細胞ヨリ成リ、
毛囊、表皮ノ網狀部ニシテ毛根ヲ鞘狀ニ包圍シ、之ヲ分テテ毛根鞘トシ、
其一部トシテ、更ニ毛母及毛囊前部ヲ有ス、而シテ毛根鞘ハ更ニ之ヲ内外ニ分
ク、外毛根鞘ハマルヒキト氏屬ノ一系ニシテ、小多角形ノ有核細胞ヨリ成リテ
厚層ナリ、内毛根鞘ハ薄層ノ一系ニシテ下等ノ細胞互ニ配列シテ、二層ヨリナリ、
毛母、毛囊前部ニ在リ、血管神經ニ圍繞シ毛球ニ接ス、是レ即チ毛髮生
シムルトコロナリ、毛囊前部ハ表皮ノ上部ヨリ斜ニ皮下脂肪ノ下際ヲ經テ毛囊鞘ノ
外層ニ附着ス、蓋シ此筋收縮スレバ皮膚腺ノ分泌ヲ起シ、或ハ毛髮ヲ上製シ、
毛皮ヲ生ゼシム。

乙 嗅 器

嗅器、呼吸器、先端即鼻腔基底、媒介セラル、而シテ鼻腔ハ顔面ノ中部ニシテ

(図五 鼻 = 算)



方ニ向ヒ、正中ノ鼻中隔ニニ分セラレタル二個ノ外鼻孔ヲ呈シ、前端ヲ鼻尖ト云ヒ、両側ヲ鼻翼ト云ヒ、先端即鼻根ハ左右両眼ノ中間ニ位シ、頗ル狭小ニシテ直ニ鼻背ニ移行ス

外鼻ノ構造 外鼻ハ硬骨軟骨反外皮ヨリ成リ、硬骨ハ二個ノ橋面骨ニシテ鼻背上、頭骨ノ前額突起ナリ、鼻軟骨ハ硝子状軟骨ニシテ、其枚ニ個アリ、一ハ鼻中隔軟骨ニシテ二部ヨリ成リ、其、一ハ鉛直ニシテ稍方形ヲ帯ビ、骨鼻中隔ノ前部ヲ形成ス、他、一ハ扁平三角形ニシテ、鼻背ニ附着シ、鼻背ノ軟部ヲ構成ス、是ヲ三角軟骨ト云ヒ、蓋覆軟骨ハ三角軟骨ノ前部ニ在リ扁平ニシテ馬蹄形ヲ呈シ、鼻背ノ軟部ヲ覆フ、其、後端ニハ柱状軟骨ヲ懸ルベシ、外皮ハ硬骨軟骨ニ蓋蓋シ、隙間ニ狀ニシテ皮脂腺ニ充塞ス、且シ外鼻孔ニ在リテ、直ニ

筋皮膜ニ移行シ、鼻中隔軟骨ノ前部ニ當リ、滑動性ノ膜杯中隔ヲ爲ス、内鼻ノ粘衣膜ハ頗ル強厚ニシテ、纖維亦粘着性力強シヨリ成リ、大ニ血管ニ充塞シ、其上部ヲ嗅部ト名シ、即嗅神経ノ分佈地ニシテ、在狀上皮反膜、汗腺細胞ヲ含シ、下部ハ呼吸部ト名テ後鼻孔ニ通シ、鼻毛上皮ヲ附シ、小葉菌腺ヲ

有ス。

丙 視 器

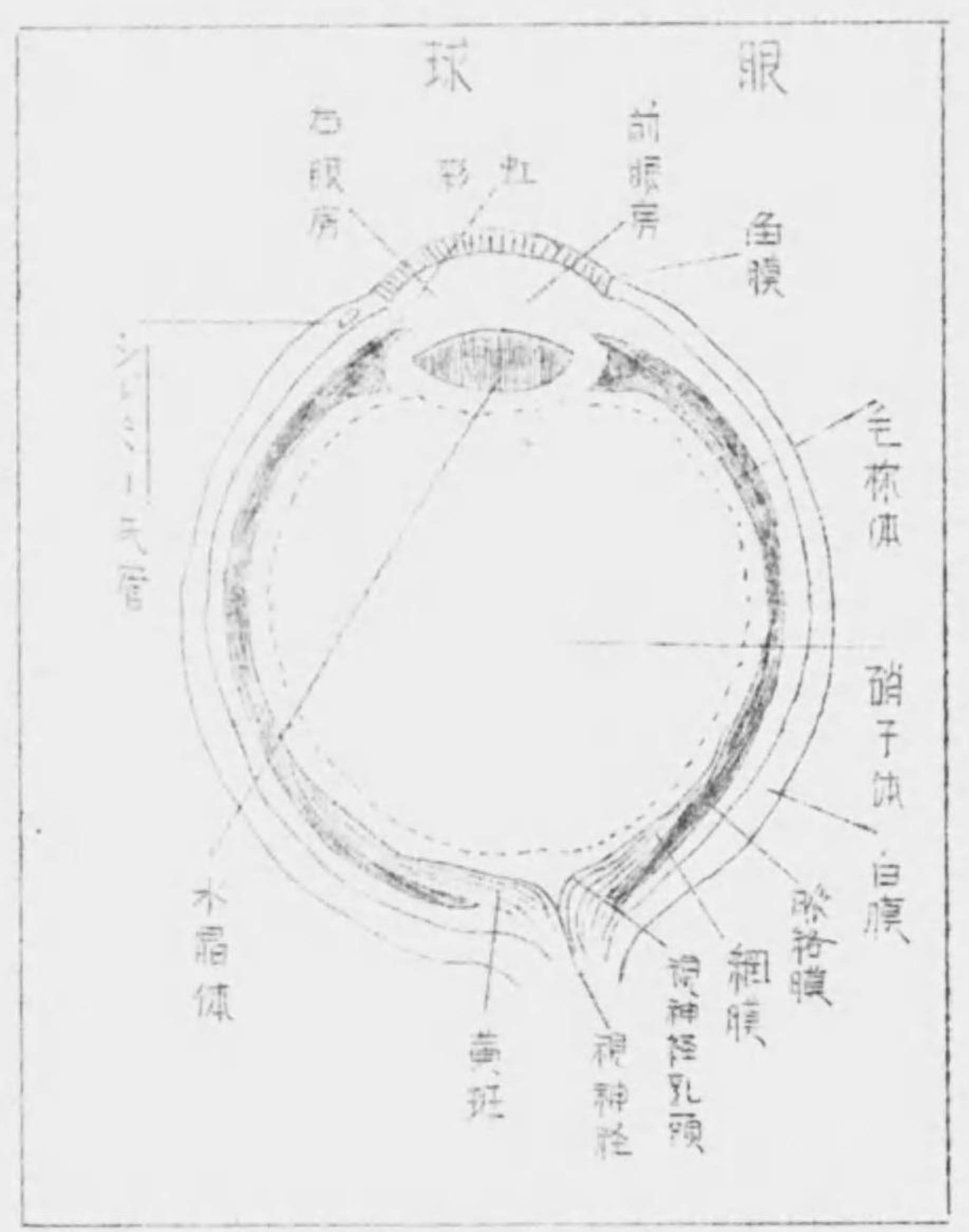
視器トハ眼球ノ謂ニシテ、左右眼窩内ニ在リ、内外中、三層トシテ透明体即水晶体、水晶体及硝子体ヨリ成リ、後方ハ視神経ニ連続シ、眼瞼、眼筋、淚腺等之ニ附屬ス、眼窩内ニハ脂肪組織アリテ眼球神経血管及筋肉等ノ間隙ヲ充填シ、且其外固ヲ被覆ス。

(一) 外層ハ厚キ強靱ナル纖維膜ニシテ、鞏膜及角膜ノ二部ヨリ成リ、外界ニ露出スル部分ハ鞏膜及角膜共ニ眼瞼ノ内面ヨリ延長シテ、血管ニ圍繞スル菲薄ナル一膜ニテ被ハル、之ヲ眼球結膜ト云フ。

(二) 鞏膜 白膜ノ纖維膜ニシテ白眼ヲナシ、前方ハ角膜ニ移行シ、後方ハ視神経ニ穿通シラル、此部ヲ篩板ト云フ、鞏膜ハ後方厚ク前方薄ク、外面ニ眼筋ヲ附著セシメ、内面ハ粗粗ナル色素組織ヲ有ス、之ヲ灰白板又脈絡板ト云フ。

(三) 白膜 ハ透明ニシテ眼窩ニ長ク在リ、即外層ノ前小部ヲ隔ヒルニシテ、

第 二 百 六 十 四 圖



テ、中央少シク薄ク、固線ハ厚ク、鞏膜トノ境界部ニ鞏靜脈竇アリ、而シテ角膜

上皮、前弾力膜、固

有膜、後弾力膜、角

膜内皮、五層ヨリ成

ル。

(二) 中層 ハ脈絡膜、

毛様体及虹彩ノ三部

ニ分ツ。

(三) 脈絡膜ハ後方ノ中

央ニテ、視神経ヨリ

穿通セラレ三層ヨリ

成ル、其ノ外層ハ脈

絡板ニシテ、專ラ毛様

動脈及渦狀靜脈ノ枝

ヲ含ム、(419)

筋ヨリ成リ、其ノ基礎ヲ成ス前ノ結締組織中ニハ緻力纖維、色素細胞等ヲ含ム、(419)

次層ナリ脈絡毛細板ハ毛細管層ニシテ色素ヲ有セズ、内層基礎板ハ薄ク、
明ニシテ細膜ノ色素上皮ニ接ス、

(b) 毛細管スモ突起ハ放射状ニ位シタル隆起ニシテ、後方ハ低ク脈絡状ニ隆
リ、前方ハ高ク、虹彩ノ周縁ニ附随ス、其廣ハ毛細管ヨリ成ル、之ヨリ毛細
管維反輪狀纖維ニ別リ、前方ハ脈絡膜系筋ニシテ、子午線ノ方向ニアリ、毛
膜ト鞏膜ノ境界部ヨリ起リテ、脈絡膜ノ外面ニ終リ、後者ハ其内面ヨリ起ルニ
走ル。

(c) 虹彩ハ毛細管ノ前方ニ附隨シ、角膜ト水晶球トノ間ニ在リ、前面ハ前々穹
隆ニシテ、色素ノ光澤ニヨリ、内外ノニ輪ヲ呈ス、之ヲ大及小虹彩輪ト云フ
後面ハ、稍々陥又シテ黒色ヲ帯ビ、僅ニ小皺壁ヲ呈ス、内縁即瞳孔縁ハ瞳孔
ト稱スル小孔ヲ囲ム、光ヲ入ル、所ニシテ、光線ノ強弱ニ由リ、自ら縮長ス
ベシ、外縁即毛細管ハ結締織ノ束條ニ由リ、デニメット氏膜ト共ニ、楕狀割
帯ヲ以テ、角膜ノ周縁ニ連接セラル、又人ニ由リテ、虹彩ノ色ヲ異ニスル、

(色素ノ多寡ニ関スルモノナリ)

経ノ穿入部アリ、僅ニ穹隆シテ、白色輪状ヲナス、之ヲ視神経孔頭ト云フ、相
及、其ノ小方ニ當リテ黄斑ノ部ヲ見ル、之ヨリ黄斑ト云フ、黄斑中卓更ニ凹陥ス、
之ヨリ正中窩ト云ヒ、細膜中最も薄キ部分ニシテ且最も明視シ得ル所ナリ、而シ
テ、細膜ノ前部ハ凹陥ニシテ、毛細管ニ消失ス、尚毛細管上ニ延長シタルセル
結締組織性質ヨリ成ル部分ヲ細膜毛細部ト云フ、更ニ延長シテ虹彩ニ移行ス、
故ニ細膜ヲ分テ細膜部、毛細部及虹彩部、三部トス、角膜部ハ厚ク視力ヲ異
ナル部分アリ、以下專ラ細膜部ノ構成ヲ述ブズ。

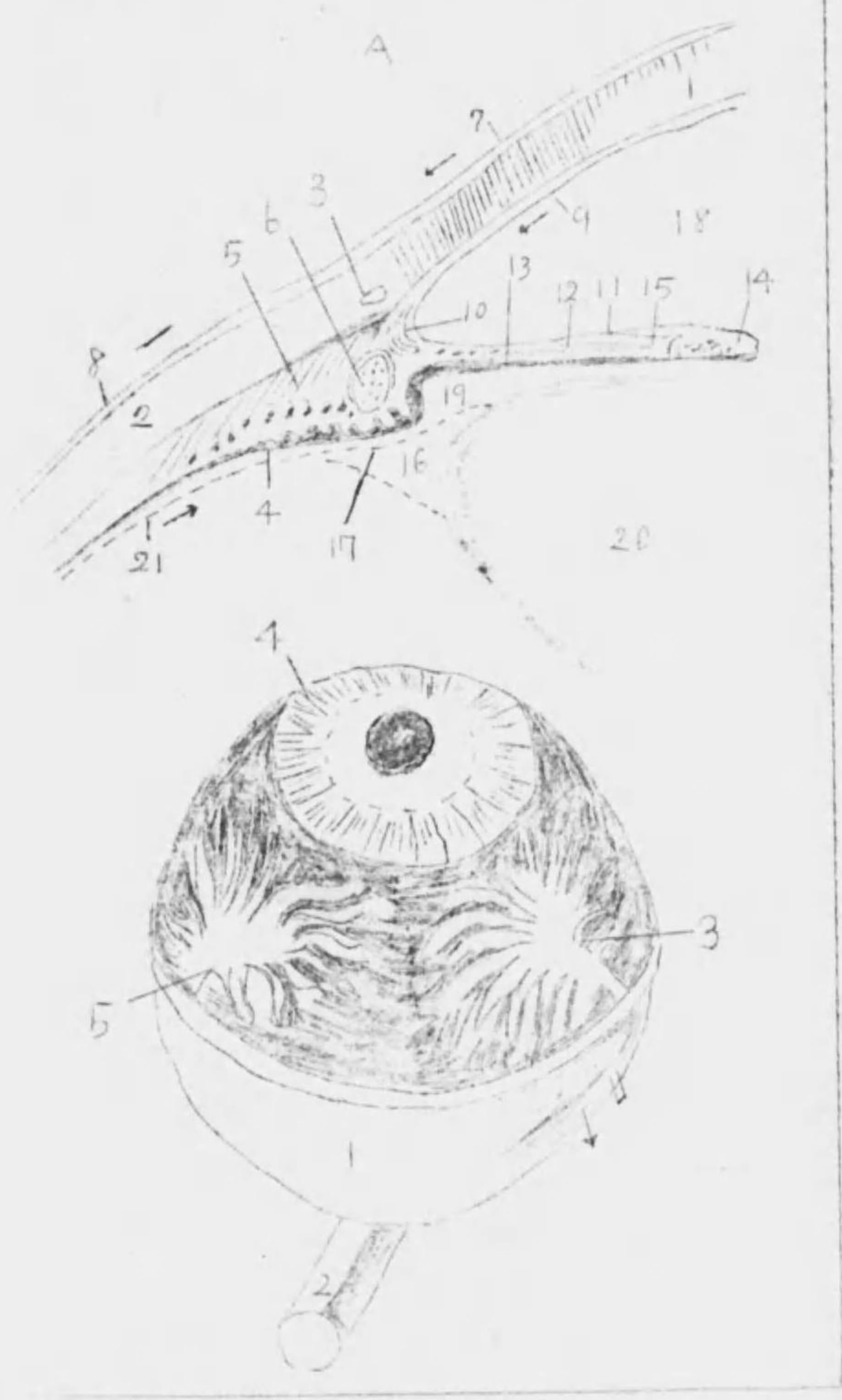
(a) 色素層、(b) 桿体及錐体層、(c) 外層線膜、(d) 外層顆粒層、(e) レンズ核層、(f) 内
網層、(g) 内網層、(h) 内網層、(i) 節細胞層、(j) 神経纖維層、(k) 内層線膜、
此等ノ諸層ハ專ラ、上皮性並ニ神経性ノ分子ヨリ組成セラル、中ニ支柱層ヲ説
ス。

(a) 水晶球、ハ厚ク在リ、兩面凸出ニシテ、チン氏帯ト稱スル透明ナル物質ニ
由リテ、毛細管ニ連繫ニラレ、前面ニ僅ニ穹隆シテ虹彩ノ瞳孔縁ニ向ヒ、後面
ハ瞳孔体前側ノ凹陥部ニ坐シ、菲薄透明ナル水晶球ニ以テ、水晶球ヲ被巨ス、
之ニ由リテ、凸面ノ度ヲ度ジ、光線ヲ屈折シテ、遠近ノ物体ヲシテ細膜ニ映出ス、(421)

マシムルモノナリ。
 乙水杯体 ハ又房水トモ稱シ、白膜ト虹彩及水晶体、固、即前眼房及虹彩、後

(圖七五二系)

毛杯体及虹彩



- A 毛杯体及虹彩
- 1 角膜
 - 2 白膜
 - 3 シレノム氏管
 - 4 毛杯体
 - 5 毛杯筋
 - 6 固ク輪状モノ
 - 7 角膜結膜
 - 8 白膜筋膜
 - 9 デゼルト氏膜
 - 10 網状筋帯
 - 11 前障房膜
 - 12 固ク虹彩
 - 13 後障房膜
 - 14 瞳孔收縮筋
 - 15 固ク開張筋
 - 16 ベナト氏管
 - 17 チン氏管
 - 18 前眼房
 - 19 後眼房
 - 20 水晶体
 - 21 硝子体素集

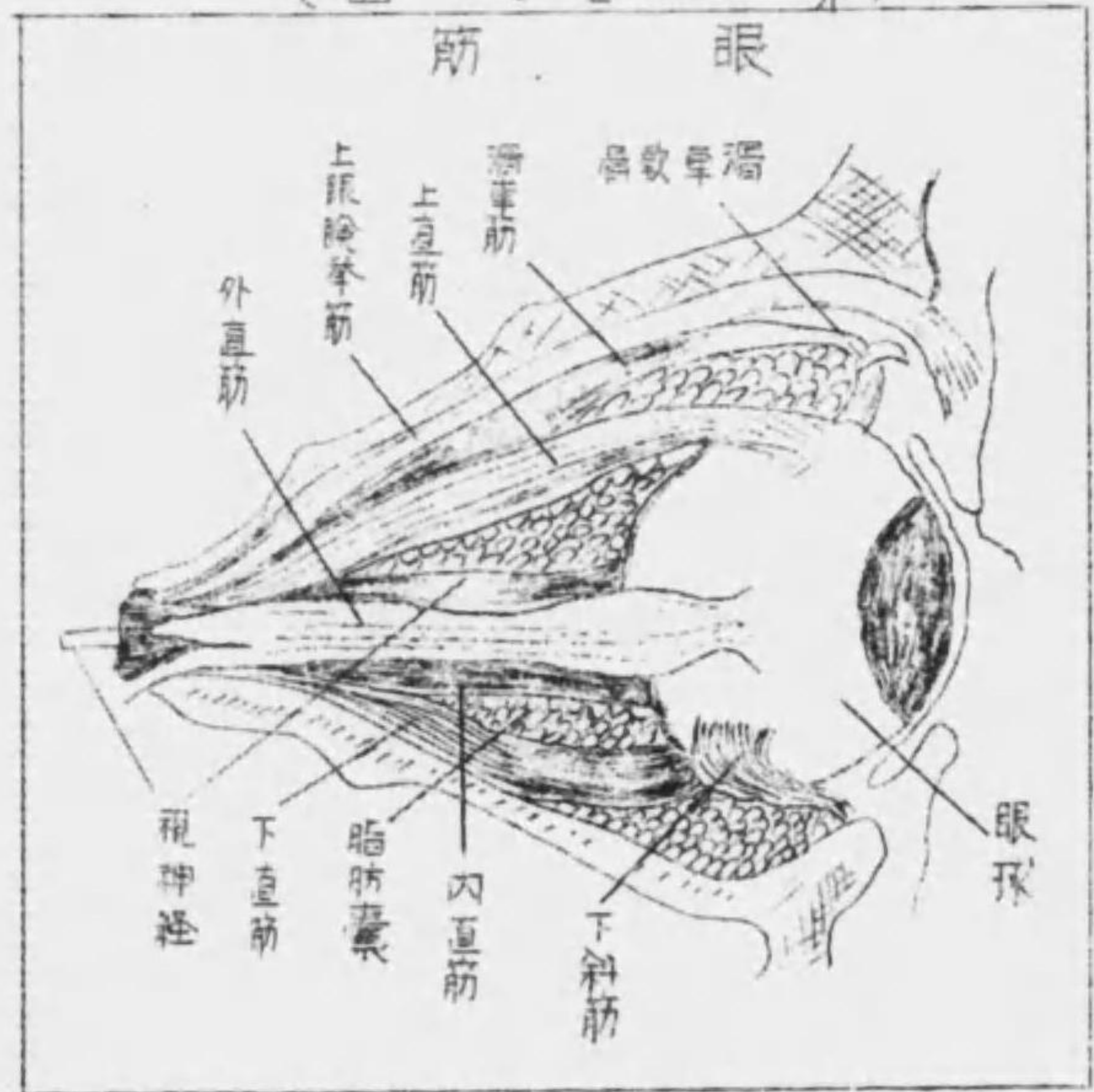
- B 白膜、前部ヲ示ス
- 彩及脈絡膜ヲ示ス
- 1 白膜、後部
 - 2 視神經
 - 3 湯試靜脈
 - 4 虹彩、前面
 - 5 瞳孔

面ト、チン氏管ト、固膜即後眼房トニ在ル水ノ如キ流動物ニシテ、瞳孔ニ由リテ互ニ交通ス。

(六) 硝子体 ハ透明ナリ粘液状体ニシテ、著ク無構造、硝子体ヨリ以テ巨マレ、形ハ、稍マ球ヲ帯ビ、前部ハ水晶体、後面ノ凸産部ニ達スリ高クナス、之ヲ硝子体高ト云フ。

眼球ハ以上ノ諸物ニ由リテ構成セラレ、眼窩内ニ於ケル。上直筋、下直筋、外直筋、内直筋、上斜筋、下斜筋ノ作用ニ由リテ、其ノ名ノ示ス如ク、眼球ニ適種ノ方向ニ廻轉シ、向眼筋正筋、上眼筋等筋ハ眼瞼運動ヲ司ル。

(圖 八 百 二 第)



動容昂ナリ。之ヲ分テ。上及下眼腺ノ二部トナス。上眼腺ハ大ニシテ。穹隆
ヨリニ。上眼腺線ニ直クノ横溝ヲ呈シ。其上部ハ弓状ニ延モヨ発生ス。之ヲ呈

(一) 眼ノ守護器官

眼ノ守護器ヲ分テ。眼葉脂肪囊
及眼腺トス。

(A) 眼葉 骨學ヲ参照スベシ。
(B) 脂肪囊ハ結締織ノ薄膜ト許多ノ
脂肪ヨリ成リ。直前筋。漏斗状腔
内ヲ充填ス。而シテ其蓋膜ハ視神
経ト緩ク連接シ多少ノ空隙ヲ造リ。
眼環ノ前面ニ附着ス。之ヲテノ
氏膜ト云フ。

(C) 眼腺 ハ瓣状ヲ呈シ眼葉縁ノ上
下ニ位シ。眼環ノ被蓋トナリ。連

(圖 九 百 二 第)



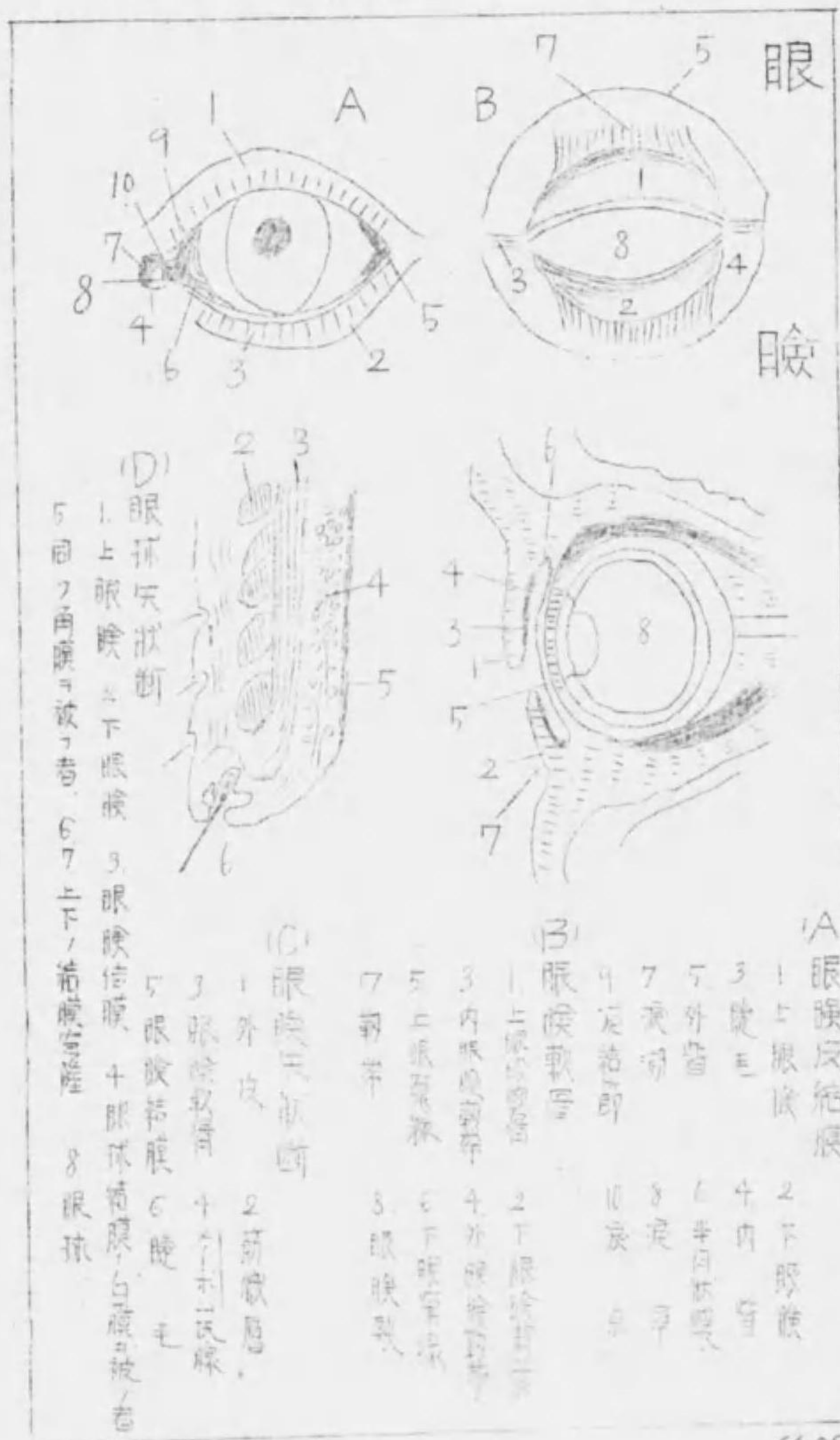
發圖ノ纖維結締織ニシテ。眼腺ノ基礎ヲ構成シ。稍々半月状ヲ帯ビ。ノイホム
(425)

毛ト汗ビ。前筋。流汗ヲ防止スベシ。上眼腺ハ小ニシテ。下眼腺線ニ沿ヒ。曲
微ノ横溝ヲ呈シ。又上下ノ眼腺腔ハ直ニ対向シテ一ノ洞隙ヲ成ス。之ヲ眼腺破
裂ト云フ。上下ノ眼腺線ハ短モヨ発生ス。之ヲ睫毛ト稱シ。其内端ハ鈍角ニ。
外端ハ銳角ニ合合ス。之ヲ内直筋反外直筋ト云フ。甲ハ内眼腺割厚ヲ以テ。強ク上

顎高ノ前頭突起ニ附着シ。乙ハ外眼腺
割厚ニ由リ緩ク視管ニ連接ス。又眼腺
腔離縁ノ後側ニ小口アリ。メドボム氏
腺ノ開口部ナリ。

守護器ノ構造 眼ノ守護器ハ外皮筋。軟
骨。軟骨膜。及結膜。五層ヨリ成ル。外
皮ハ緻密ニシテ毛モヨ生ジ。皮下結締
織ハ脂肪ニ充テシ。緩ク筋織層ニ連接
シ。筋織層ハ即眼輪筋。眼腺部ニシ
テ頗ル菲薄ナリ。又眼腺軟骨ハ緻密且

(圖十百二第)



氏腺ハ軟骨ノ後面ニ並列スル葡萄狀腺ニシテ、各一條ノ長管、數腺胞ヲ包シ、
 眼瞼ヲ分ツス。結膜ハ外皮、一系ニシテ大ニ血管ニ富ミ、眼瞼ノ内面ニ在リ、

眼瞼ニ屈轉ス。之ヲ分ナテ眼瞼結膜及眼瞼結膜トス。甲ハ小孔膜反小筋軟骨ニ
 同シ。密ニ眼瞼ノ内面ヲ被ヒ、續テ眼瞼ニ屈轉ス。此部ヲ結膜穹隆ト云フ。之
 ハ延ク白膜ヲ被覆シ、強ク角膜ト密接ス。而シテ之ヲ眼瞼部位ニ、從ハ白膜
 透膜及角膜ノ名アリ。又結膜ハ内眦部ニ於テ反折シテ、部分ヲ構成ス。即半同狀腺ハ
 眼瞼ニ在リ、管徑ノ或強クマモ、ニシテ、其内側ハ直ニ内眦ニ向ヒ小管ヲ
 生シ。之ヲ淚管ト云フ。管中ニ小室ヲ見ル。之ヲ淚管ト稱シ、幽微ノ小室ヲ
 生シ。數層ノ皮層腺ヲ藏スベシ。又之ヲ対シ上下眼瞼ノ内端僅ニ突出シタル腺
 胞即アリ。茲ニ小管管ノ開口部ヲ見ル。之ヲ淚管ト云フ。

(二) 淚腺

淚腺ヲ分ナテ淚腺反排管ニ部トス。
 淚腺ハ扁圓ニシテ、前頭骨ノ淚腺窩中ニ在リ、上大下小。二部ニ別レ、約十個ノ
 小管管ヲ以テ、結膜穹隆ノ外部ニ通ス。此腺ハ漿液性ノ腺管狀腺ニシテ、排管
 管ノ分枝ハ漸次中間部ニ移リ、末端部ハ顆粒狀ノ漿液細胞ヨリ成リ、固形膜ヲ
 以テ包マレ、腺管ノ周囲ハ環形ノ纖維細胞ヨリ成リ、網ヲ以テ圍繞セラル中間

部上皮ハ單層ノ毆子形上皮、排泄管ハ重層ノ柱狀上皮ヲ被ル、
 排泄管ハ尿道ヨリ結膜面ニ注レタル尿道ヲ鼻腔ニ排泄スル通路ナリ、之ヲ小液
 管、淚管、鼻管、三部ニ分ツ、小液管ハ前部上下、淚管ニ注ジ、直ニ膨大スル
 モ又狭小ナリ、内指ニ至リ上下互ニ結合シテ、淚囊ニ連ル、淚囊ハ同名管中
 ニ在リ上方ハ盲端ニ終リ、下方ハ直チニ淚管ニ移行ス、淚管外側ノ中部ヲ、
 眼窩隔膜ノ延長部横過シ、内眼瞼筋帯ニ達ス、淚管管ハ境界ナク淚囊下端ヨリ
 始リ、骨淚管管内ヲ下リ、後下方ニ傾キ、下鼻道ノ粘膜面ニ通ス、其開口
 部ハ下疋ノ裂隙狀ニシテ、下鼻道ノ上壁ニ現ハル、小液管壁ハ重層磚狀上皮ヲ
 被ハル、固有膜外ニ縱走ノ横紋筋纖維アリ、淚囊及淚管管ハ重層ノ柱狀上皮ヲ
 被ハリ、固有膜ハ腺狀組織ノ性質ヲ具フ。

丁 味 器

味器トハ水棲動物ニ於テハ廣ク体表ニ分布スト雖モ、空中ニ棲息スル者ニ於
 テハ狭ク口腔内ニ局限ス、而シテ舌ノ表面味ニ輪廓孔、葉狀孔、頭狀孔、乳
 頭ニ存在スル、所謂味器ヲ舌ハモクニシテ、球形又ハ指四形ヲ呈シ、上端ハ表

面ニ開キ、下唇ハ短く、固有膜面有皮ニ呈シ、上指ニハ小ナル陥凹部アリ、之ヲ舌
 ト名ク、又味器ハ固有膜細胞、被覆細胞及基礎細胞ノ三種ヨリ成リ、味細胞
 ハ長クシテ種々ノ形状ヲ呈シ、核ハ或ハ高ク、或ハ低ク、外部ハ大體ニシテ
 小桿(表皮形成)ト成リ、重層扁平上皮ヨリ成ル、其上端ハ味孔ニ突出シ、舌
 咽神経ノ末端末リテ神経叢ヲ造リ、以テ味覺ヲ司ル、一名此レヲ小葉細胞トモ
 稱ス、被覆細胞ハ専ラ味器ノ外部ヲ爲スト雖モ、一部ハ其ノ内部ニ存シ、神経
 形ニシテ外部ニ大ニ味孔ニ向ニ、基礎細胞ハ小葉細胞ノ下方ニ在リテ味器ノ最
 低部ヲ爲ス。

戊 聽 器

聽器ハ物體ノ振動音ヲ感知スル器官ニシテ、外耳、中耳及内耳ノ三部ヨリ成ル、
 外耳ハ頭蓋ノ側方ニ位シ、中耳及内耳ハ岩部中ニ在リ、就中内耳即迷路ハ聽
 神経ノ終ル所ニシテ最も大切ナル部分トス。

(一) 外 耳

外耳ハ漏斗状ノ耳殻ト、管状ニシテ、管中ニ導ク外聽道ノ二部ヨリ成リ、其ノ内端ニ於テハ、中耳ノ腔界ニ鼓膜ヲ存ス。

(圖一十百二第)



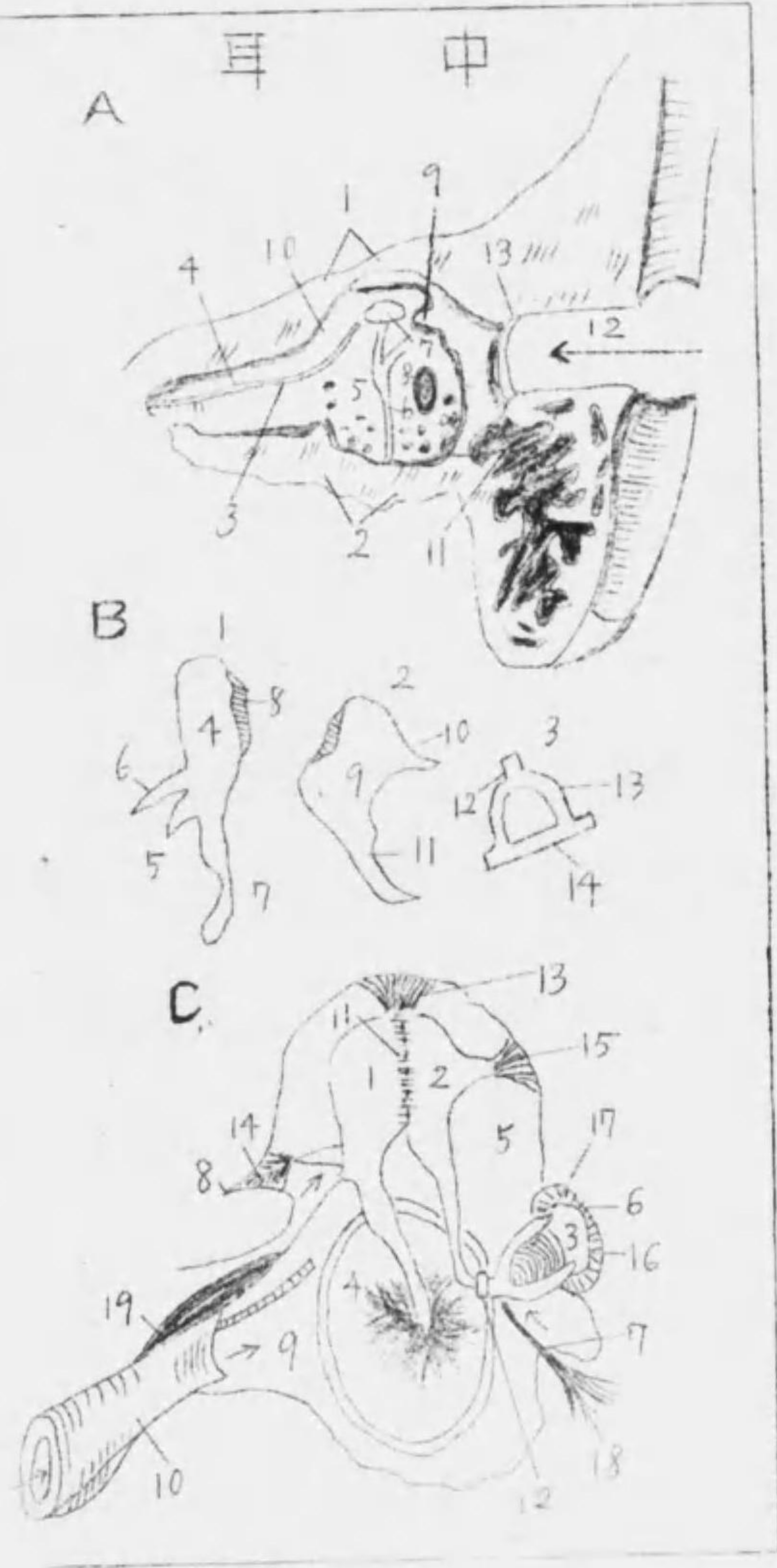
(一) 耳殻或ハ耳翼ハ左右顯
 顯骨ノ下際ニシテ、形ハ稍
 貝殼状ヨリ呈シ、其裏面ニ
 シテ大ニ厚クヨリマ、外皮
 軟骨及軟種ノ筋ヨリ成リ、
 表面ハ種々ノ凹凸ヨリ呈シ、
 内外共ニ皮膚ヲ以テ被ハレ
 固縁ハ輪状ニ弯曲ス、之ヲ
 耳輪或ハ耳廓ト稱ヘ、下端
 ハ軟弱ニシテ、軟骨ヲ缺キ
 耳垂ヲ(耳朶)ヲ構成ス、
 (二) 外聽道トハ深サ一才餘
 ノ管ニシテ、耳翼ヨリ成リ

眼瞼骨、岩部ニ進入シ、鼓膜ニ達スル迄ノ間ヲ云フ、而シテ外聽道ノ外方三分ノ一ハ軟骨ヲ以テ構成セラレルヲ以テ、軟骨性外聽道ト稱シ、其内外三分ノ二ハ硬骨ニ由リ構成ナレルヲ以テ、骨性外聽道ト云フ、又外聽道ノ皮膚ニハ細毛ヲ生ジ、皮脂腺ヲ具ヘ、軟骨部ニハ特殊ノ分泌腺即チ耳腺ヲ多ク存シ、耳腺ヲ分泌ス、
 (三) 鼓膜ハ緊張シケル円形ノ薄膜ニシテ、外聽道ノ鼓室ノ内ニあり、上方ヨリ下方内方ニ向テ斜ニ位ス、其下部ハ肥厚シタル線ヲ以テ鼓膜蓋ニ入リ、鼓膜ノ中心部ハ内面柱層稱シ、下端ニ附着シテ、少シク内方ニ牽引セラレ、其外面ニ厚ハルル肌層部ヲ鼓膜筋トシテ、上縁ニ直クハ突起アリ、此筋筋ヨリ生ス、鼓膜ノ実質ハ三層ヨリ成リ、中層ハ薄キ結締組織性固有膜ニシテ、外層ハ外聽道外皮膚、内層ハ鼓室粘膜炎、一層ヲ以テ被ハル。

二) 中耳

中耳ハ外耳ト内耳トノ中間ニ位シ、鼓室ヨウスタイ氏管反乳痛蜂窠ノ三部ヨリ成ル、
 一) 鼓室ハ鼓膜ノ内部ニシテ、眼瞼骨ノ岩部ト、鱗形部ト、圓ニ在ル所ノ處(431)

(第 二 百 十 二 圖)



狀突起ノ内板ニ沿ヒ下テ咽鼻腔ノ側壁ニ開口ス、之ヲ咽鼻口ト云フ
 三孔咽鼻管ハ鼓室ノ一系ニシテ、乳竇突起ノ実質ニ存在スル甚ダ不齊ノ腔隙
 ナリ

四ナル腔洞ナリ、内外上下長前後ノ六腔ヲ有シ、其中心後壁、開放シテ、直ニニ
 乳竇腔ニ交通シ、前壁ハ、漸次狭小トナリ、上下ノ二管ニ移行ス、甲ヲ鼓室系
 筋管ト云ヒ、乙ヲエウスタイ氏管ト云ヒ、中隔アリテ互ヲ分界ス、上下ノ二管
 ハ狭小ニシテ、内壁ハ稍豊隆ニシテ之ヲ鼓室岬ト云フ、茲ニ幽微ノ腔洞アリ、
 鼓室神経蓋ト稱シ、其上方ニ横卵円ノ一孔アリ、卵円窓ト云フ、其後ニ三更ニ
 円孔アリ、之ヲ正円窓ト云ヒ、共ニ鼓室ニ交通ス、又卵円窓ノ前後兩側ニ小突
 起アリテ、互ニ対向ス、甲ヲ匙状突起、乙ヲ錐体突起ト呼ブ、而シテ外壁ハ前
 部鼓室ナリ、向鼓室内ニハ柱骨、柄骨、馬蹄骨、三小聽骨アリ、互ニ連鎖シテ
 柱骨ハ鼓膜ニ、馬蹄骨ハ卵円窓ニ附着シ、以テ鼓膜ニ受テタル音波ヲ内耳ニ
 傳フ、鼓室ノ前後ハ結締織ト少量ノ渾力纖維ヨリ成リ、鼈毛或ハ扁平上皮ヲ附
 シ、種々ノ皺壁ヲ構成シ、中耳ノ空氣ヲ交換スルノ用ヲ爲ス。
 ニエウスタイ氏管ハ又耳咽管トモ名ツテ、咽頭ノ上側壁ヨリ鼓室ノ間ニ存
 スル扁平管ニシテ、常ニ空氣ヲ通ジ、或ハ粘液ヲ排泄ス、之ヲ硬骨部及軟骨
 部ノ二部トナス、硬骨部ハ鼓膜系筋管ノ下際ニシテ鼓室ヨリ岩部尖端ノ向ニ
 在リテ、全管ノ三分ノ一ヲ占メ、軟骨部ハ岩部ノ尖端ヨリ前下方ニ向ニ

A 鼓室

- 1 鼓室ノ上壁
- 2 同ノ下壁
- 3 鼓室ノ前壁
- 4 内壁即鼓室神
- 5 鼓室ノ後壁
- 6 鼓室ノ外壁
- 7 卵円窓
- 8 正円窓
- 9 錘骨突起
- 10 匙状突起
- 11 錘骨
- 12 外聽道
- 13 外壁

B 三聽骨

- 1 槌骨
- 2 砵骨
- 3 馬蹄骨
- 4 槌骨頭
- 5 錘骨短突起
- 6 錘骨長突起
- 7 手柄
- 8 前節面
- 9 前骨体
- 10 錘骨短突起
- 11 錘骨長突起
- 12 馬蹄骨頭
- 13 同ノ弓部
- 14 同ノ基部部

C 聽骨筋及韧带

- 1 槌骨
- 2 砵骨
- 3 馬蹄骨
- 4 鼓膜
- 5 鼓室
- 6 卵円窓
- 7 錘骨突起
- 8 グラマーセル氏破裂
- 9 ヨウスノ氏管硬骨部
- 10 同ノ軟骨部
- 11 橈状韧带
- 12 同ノ硬骨馬蹄骨突起部
- 13 上側韧带
- 14 前側韧带
- 15 後側韧带
- 16 錘骨筋
- 17 砵骨筋
- 18 鼓膜張筋
- 19 前鎖韧带

三 内 耳

内耳ハ音波ヲ聽神經ニ媒介シ、音覺トシテ感ゼシムル所ニシテ、頭蓋骨岩部ノ内耳室ニ在リシテ、下管ニシテ五粒ト稱ス。是体ヲ含司スル所ニシテ、

一) 岩部連絡 岩部更ニ前庭三半規管及蝸牛殻ノ三部トナス。

(1) 前庭ハ蝸牛殻ト三半規管トノ中間ニシテ、不正卵円形ヲ呈シ、上方ハ蝸牛殻ト、前方ハ槌骨筋、後方ハ三半規管、外方ハ鼓室、内方ハ内聽室ニ通ル。其ノ前壁ニ於テハ前小管大ノ兩管アリ、甲ヲ正円窓ト云ヒ、乙ヲ卵円窓ト云フ。其中間ニ幽微ノ横線アリ、此ヲ分界ス。之ヲ前庭線ト云フ。但シ横線ノ後下部ニ於テ前庭水管、内口ヲ見ル。又内側ニ於テ内聽室ヨリ來ル前庭神經ノ通路ニ向ニ幽微ノ數孔ヲ見ル。之ヲ篩斑ト云フ。

(2) 三半規管 ハ上下外ノ三部ニシテ、前庭兩側共ニ前庭ニ開口ス。即ち、如シ。

三半規管	部 位	管ノ全長	前庭開口部	後庭開口部
1 上半規管	上管部ノ前面ニ在リ	全管ノ三分ノ二	前庭ノ上方ニ在リ	後庭ノ上方ニ在リ
2 下半規管	上管部ノ後面ニ在リ	同	前庭ノ下方ニ在リ	後庭ノ下方ニ在リ
3 外半規管	上下半規管ノ向ニシテ、外側ニ在リ	二分ノ一	前庭ノ外側ニ在リ	後庭ノ外側ニ在リ

(C) 蝸牛殻ハ前庭ノ前側部ニシテ、形成ハ蝸牛殻中狀ヲ呈シ、基底ハ内聽室ノ

(c) 膜様前庭部ハ楕円管、正円囊及内淋巴管、三部ヲ云フモノニシテ、楕円管ハ前庭ノ楕円管ニ存シ、後側ハ膜様三半規管ニ交通ス。正円囊ハ同ク正圓高内ニ存シ、下方ハ狭小ノ連合管ト成リ、血角ヲ以テ蝸牛殼管ニ連接ス。内淋巴管又迷路管ハ狭小ニシテ二脚ヲ有シ、室状ニ兩囊ヲ連接シ、更ニ前庭滲水管内ニ入り、盲端ニ終ル。故ニ兩囊ハ迷路管ノ媒介ニ由リテ漸ク交通ヲ營ムモノナリ。

(d) 膜様三半規管ハ荷三半規管ノ中ニ在リテ楕円囊ニ交通ス

(c) 膜様蝸牛殼管ハ更ニ蝸牛殼管、基礎膜、ライスネル氏膜、三部トス。蝸牛殼管ハ三角形ノ小室ニシテ、基礎膜トライスネル氏膜ノ中間ニ位シ、前部ハ齒囊状ヲ以テ、前庭ノ下部ニ起リ、連合管ニ由テ、正円囊ト連接ス。基礎膜成ハ環螺旋板ハ環螺旋板ノ遊離縁ニ於テ軟骨層ノ上層ヨリ生ジ、蝸牛殼ノ外壁ニ緊張シテ鼓室直ト蝸牛殼管ノ中間ヲ成ス、而シテ鼓室直ニ淋巴液ヲ藏ス。又ライスネル氏膜又前庭膜ハ環螺旋板ノ上面ヨリ蝸牛殼ノ外壁ニ緊張シテ蝸牛殼管ノ前庭直ノ中間ヲ成シ、前庭直ニモ同ク外淋巴液ヲ藏ス。

蝸牛殼管内ノ構造、凡蝸牛殼管内ノ構造ヲ司ル處、主要ナル部分ニシテ、其ノ

聽覺裝置ヨリコルナ氏細胞ト云フ、此ノコルナ氏細胞ハ基礎膜ノ上面ニ連リ、中央部及兩側部ノ二部ニ區別ス、而シテ中央部ハ内外ニ列ノ支柱細胞ヨリ成ル、故ニ之ヲ内コルナ氏柱及外コルナ氏柱ト稱シ、其ニ鉤状ニ彎曲シテ、其ノ上端互ニ接合シ、基礎膜トノ間ニ三層形ノ腔隙ヲ造ル、之ヲコルナ氏管又コルナ氏腔道ト云ヒ、之ヲ造ル兩柱ヲ總稱シテ、コルナ氏弓又コルナ氏螺旋弓ト云フ、又兩側部ハ聽細胞即内及外毛細胞及支柱細胞ヨリ成リ、同ジク内及外側ニ分レ内側ノモノハ唯一列ヲ爲セドモ、外側ノモノハ三乃至四列ヲ爲シテ並列シ、聽細胞ノ間ニ介在スル支柱細胞ニ由リテ又ハラル、而シテ茲ニ分布スル神經ハ聽神經ノ支別タル蝸牛殼管中聽神經ニシテ、其始ノ内聽管ヨリ蝸牛殼管内ニ來リテ、基礎膜ヲ穿過スルヤ、神經纖維ハシユワソ氏鞘反神經髓ヲ失ニテ、鞘膜ハ基礎膜トナリ、三乃至四ノ板ニ行ル、其ノ分タレタル各板ハ更ニ無數ノ細小板ヲ発生シ、聽細胞ヲ連絡シテ終止シ、以テ聽覺ヲ掌リモノナリ。

第七編 脈管學

第一章 脈管學總論

人体其他高等ノ動物ニ於テハ、身体ヲ構成スル諸組織ハ絶ヘズ新陳代謝ヲ營ム
ガ故ニ、常に新鮮ナル栄養物質ヲ身体諸組織ニ給與シ、且新陳代謝ニ因リテ生
ジタル老廃物質ヲ吸取シテ、身体外部ニ排泄センガ爲ニ全身ニ大小數多ノ血管
系統アリ。之ヲ脈管系統ト名ケ、其中ヲ流通スル物質ノ性状ニ由ツテ脈管系統ヲ
血管系統ト淋巴管系統トニ分ツ。

血管系統ハ血液循環ノ通路ナリ、而シテ血液ハ初メ心臓ヲ出テ大動脈ニ入り、
次テ其枝脚ニ從ヒ全身各部ニ到リ、遂ニ管壁細小ノ毛細管トナリ組織中ニ入り
茲ニ於テ血液中ノ成分ヲ交換シ、更ニ靜脈ヲ經テ心臓ニ帰流ス、之ヲ大循環又
身体循環ト名ケ、則クシテ心臓ニ帰流セル血液ハ再び心臓ヲ出テ肺動脈ニ到リ
テ肺臓ニ達シ、茲ニ於テ毛細管トナリ瓦斯交換ヲ營爲シ後、肺靜脈ヲ經テ心臓
ニ到ル之ヲ小循環又肺循環ト稱ス。

心臓ニハ右房右室及左房左室ノ區別アリ、初メ動脈血ヲ駆出スルニハ左室ニシ

テ、大動脈ハ之ヨリ起ル、而シテ靜脈血ハ右室ニ帰リ、次テ右室ニ至リ、更ニ
是ヨリ肺動脈ニ達シ、後肺靜脈ヲ経テ左房ニ入り、遂ニ左室ニ達スルモノナリ。
心臓ハ血液流通ヲ催起スル原動力ニシテ、其收縮ニヨリ血液運行ヲ營爲スル収
縮ハ恰モ脚踏装置ノ如シ。而シテ心臓ヨリ出ル血管ハ總テ動脈ト稱シ、又心臓
ニ入ルモノハ靜脈ト云ヒ、動脈ハ常ニ毛細管ヲ経テ靜脈ニ移行ス。
淋巴管系統ハ組織内ニ發生セル流動液ヲ漸次集メテ總管ヲ造リ、靜脈ニ開口シ
テ遂ニ心臓ニ送ルモノナリ、又其一種乳糜管ハ腸管ヨリ營養分ヲ吸収スル淋巴
管ナリ。

第一章 脈管學 各論

第一節 心臓

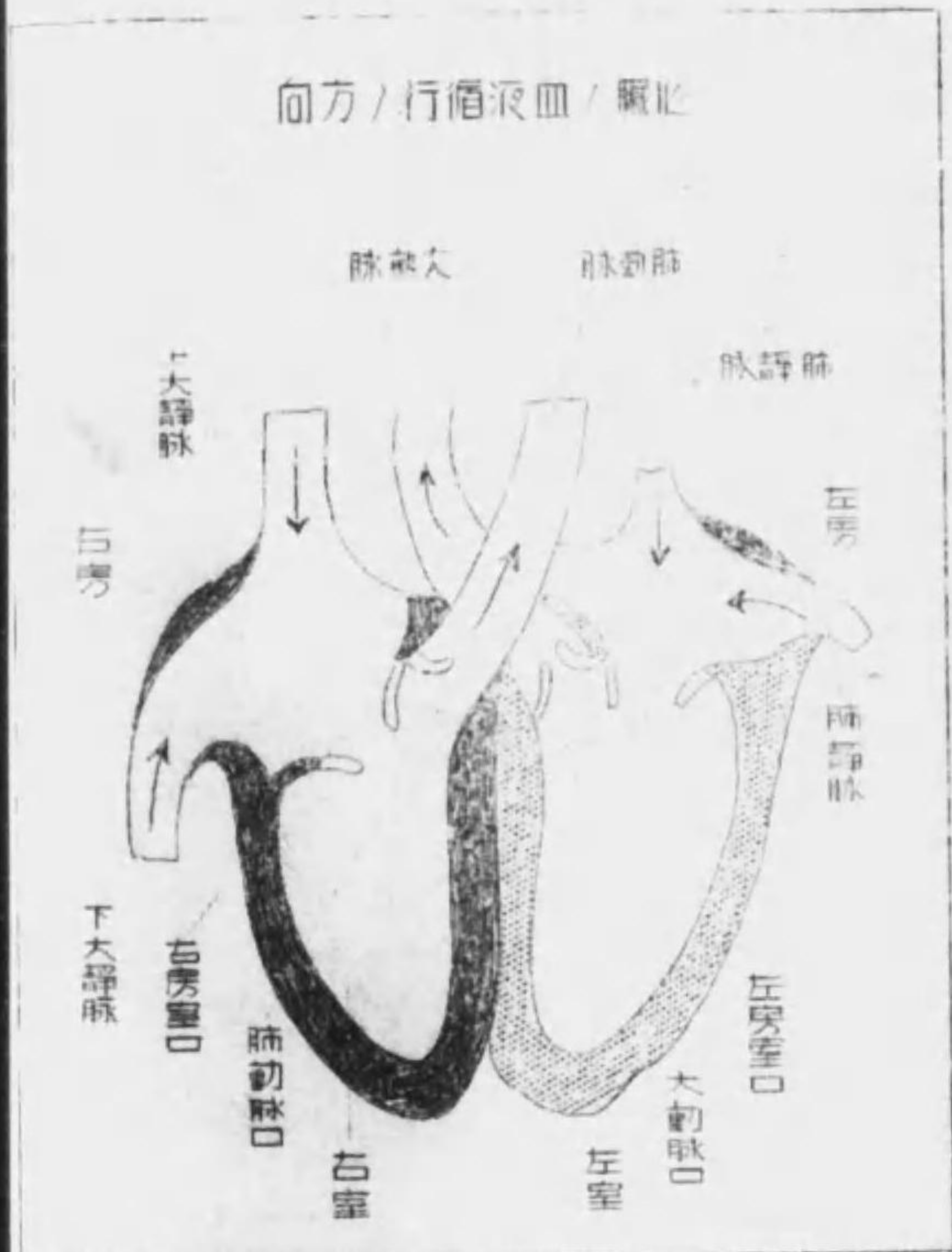
心臓ハ胸腔内ニ於テ左右兩肺ノ間ニ在リ、心嚢ニ由テ被覆セラレ、形状略ク四錐
體ニシテ蓮花ノ蕾ニ似タリ、基底ハ上、尖端ハ下ニ向フ、基底ハ前房ヨリ成リ、
尖端ハ心尖ト稱ス。前壁ハ胸切面ト名ケ前胸壁ニ對シ、稍壺隆シ、後面ハ橫隔
膜面ト稱シ、橫隔膜穹窿ニ對シ、殆ト平坦ナリ。

心臓ハ左右兩半ヨリ成リ、各縦溝ニ因ツテ隔テラル、之ヲ前及後縦溝ト稱ス、
而シテ左右兩半ハ更ニ横溝即冠狀溝ニ因リ二部ニ分ル、其一ヲ右房又一ヲ左室
ト呼ブ。故ニ心臓ニハ四部アリ、右房、右室、左房、左室是ナリ。而シテ右房
ノ内腔互ニ交通シ、其境界ニ房室孔アリ、左右各房異ノ辨膜装置ヲ有ス。又左
右兩半ノ間ニ中隔アリ、房中隔及室中隔ト云フ、而シテ房室孔ノ位置ハ外表ニ見
ラル、冠狀溝ニ又中隔ハ前後縦溝ニ一致ス。期クテ、右房ハ上下大靜脈ヲ受容
スルガ故ニ、全体ノ靜脈血ハ先ツ右房ニ入り次テ房室孔ヲ経テ右室ニ入り、更
ニ之レヨリ発スル肺動脈ニヨリ肺臓内ニ輸入セラル、而シテ肺臓ノ血液ハ肺靜
脈ニ因テ左房ニ入り次テ左側ノ房室孔ヲ通シテ左室ニ達シ、左室ヨリ大動脈ニ

由テ身体ノ各部ニ循行ス。

A. 心臓ノ各部

(二百五十五圖)



(1) 右房
 右房ハ大ニシテ右半部ニアリ、形大凡鈍三角ニシテ、上壁ハ上大静脈幹ノ開口部ナリ、而シテ下壁亦右房室孔ノ開口部ナリ。前壁ハ豊隆ニシテ上左方ニ向ヒ、大動脈ノ右前面ニ寄リ一ノ鈍突起ヲ主ズ、是ヲ右心耳ト云フ。

右房ノ内面ハ一般ニ平滑ナレドモ、心耳ニ於テハ多数ノ筋柱ニ並列ス、之ヲ橋状索ト云フ。後壁ハ下大静脈幹ノ開口部ニシテ、茲ニ狭小、縦壁アリ、開口部ノ下際ニ緊張ス、之ヲヨウスタク氏瓣ト稱シ、胎児ニ在リテハ発育強大ニシテ、成人ニ在リテ其痕跡アルノミ。又下大静脈幹ノ開口部ノ下際ニ大冠状静脈口ト稱スル□アリ、此□ニモ又狭小、縦壁アリ、之ヲテベス氏瓣ト稱ス。又□ノ附近ニ二三ノ小□アリテベス氏孔ト云ヒ、小静脈ノ開口部ナリ。内面ハ房中隔ニシテ茲ニ長円形ノ陥凹部ヲ見ル、之ヲ卵円窩ト稱ス、胎生卵円孔ノ遺跡ナリ、其周縁ハ肥厚ス之ヲ卵円窩輪ト云フ。外壁ハ前後両壁ノ間ナリ。

(2) 左房

左房ハ最後方即基底ノ左半部ニシテ、自然ノ位置ニ於テハ大動脈幹ト肺動脈幹ノ後側ニ臨ル、上壁ハ穹窿ヲ呈シ狭小ナリ、下壁ハ大ニシテ左房室孔ノ開口部ナリ、前壁ハ肺動脈大動脈ニ対向ス、後壁ハ遊離シ左右肺動脈ノ開口部アリ、内面ハ房中隔ニシテ、外壁ハ前方ニ向ヒ細長ノ突起アリ、之ヲ左心耳ト稱シ、右心耳ノ如ク筋状筋ヲ呈スレドモ強大ナラズ。

(圖六十百二第)



室ハ左心房ノ下部ニアリテ、一側ハ動脈口ニ由テ動脈幹ニ連接シ、他側ハ房室口ニ出テ房ト交通シ、共ニ瓣膜ヲ有ス、而シテ室ハ閉液時ニ於テハ房ノ血液ヲ受容シ、收縮時ニ於テハ血液ヲ動脈ニ駆出ス、形状ハ円錐形ニシテ壁ハ頗ル

強固ナリ、而シテ其裏面ハ心内膜ニ由テ被覆セラレ肉柱ヲ呈シ、不齊ノ筋束絶状ニ錯綜ス、又房室口ニハ孔膈筋アリ其尖端ハ致小トナリ瓣膜ニ附着ス、之ヲ健康ト云ヒ薄膜 附着ヲ制限スルモ、ナリ

(1) 右室

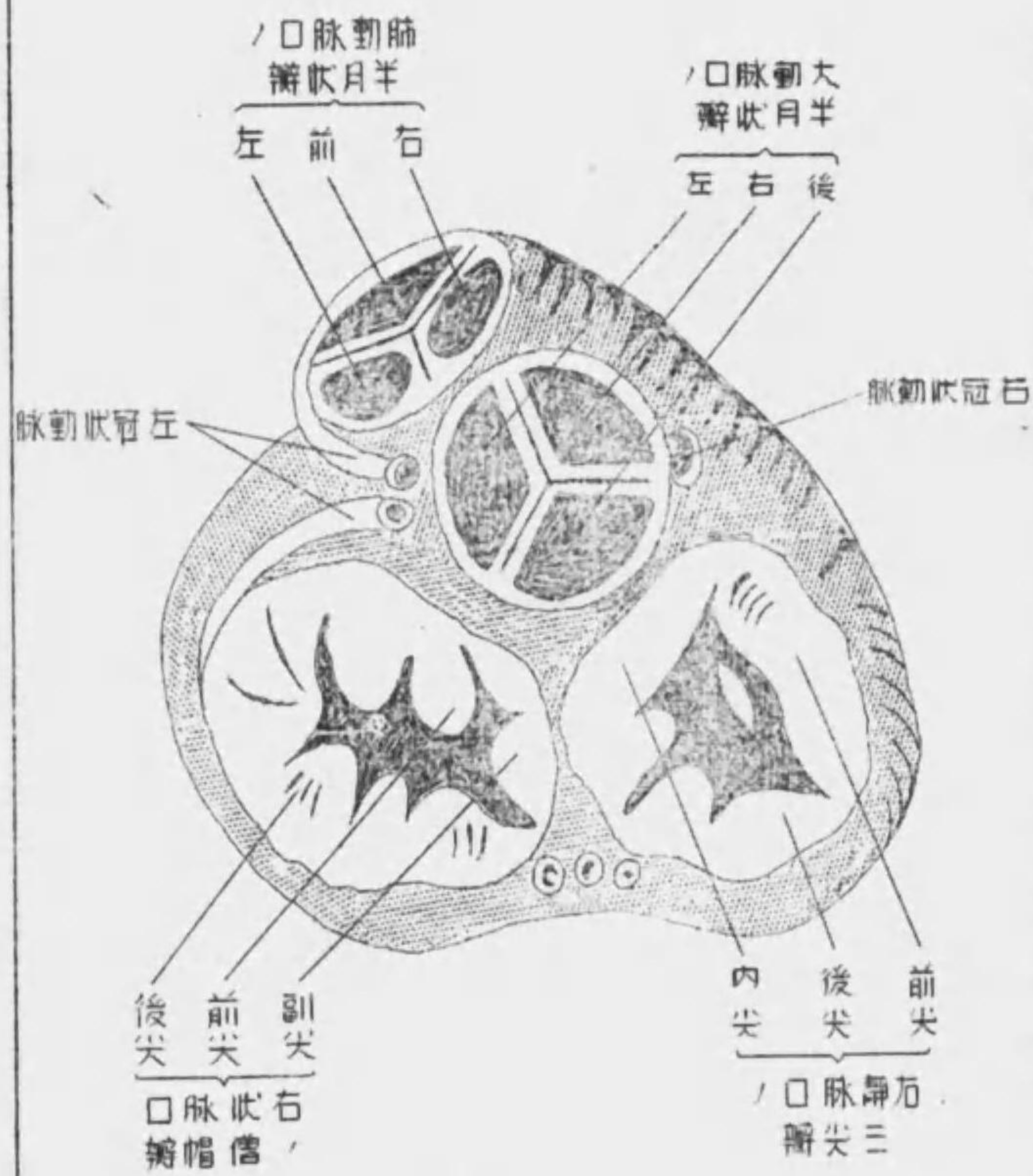
右室ハ右房ノ下部ニアリテ心ノ右半部ヲ占メ、形状ハ逆位ノ円錐状ニシテ壁實頗ル菲薄ナリ、基部ハ冠狀溝尖端ハ下方ニ向ヒ、前壁ハ左上方ニ延ビテ肺動脈ニ移行シ、右室動脈樣錐体ト成ル、肺動脈口ハ肺動脈ノ移行部動脈樣錐体ノ尖端ニアリテ左上方ニ向ヒ、其壁鈍ク三個ニ膨大ス、定ヲ肺動脈球ト云ヒ、内面ハ半月瓣ニ一致ス、半月瓣ヲ左房前ノ三瓣ニ分ツ。瓣ハ肺動脈ニ向ツテ開散シ且齒縁線ハ中尖ニ小結節ヲ有ス、之ヲアランズ氏結節ト云フ。右房室孔ハ略及円形ニシテ三片ノ瓣ヲ有ス、之ヲ三尖瓣ト云ヒ、前液内ノ三側ニ在リ健康ニ連

(2) 左室

左室ハ同ク左房ノ下部ニアリテ、心ノ左半部ヲ領シ、右室ニ比マレバ長且狭ニシテ其壁遙ニ強固ナリ、故ニ心尖ハ独リ左室尖ヨリ形成セラレ、左室動脈樣筋

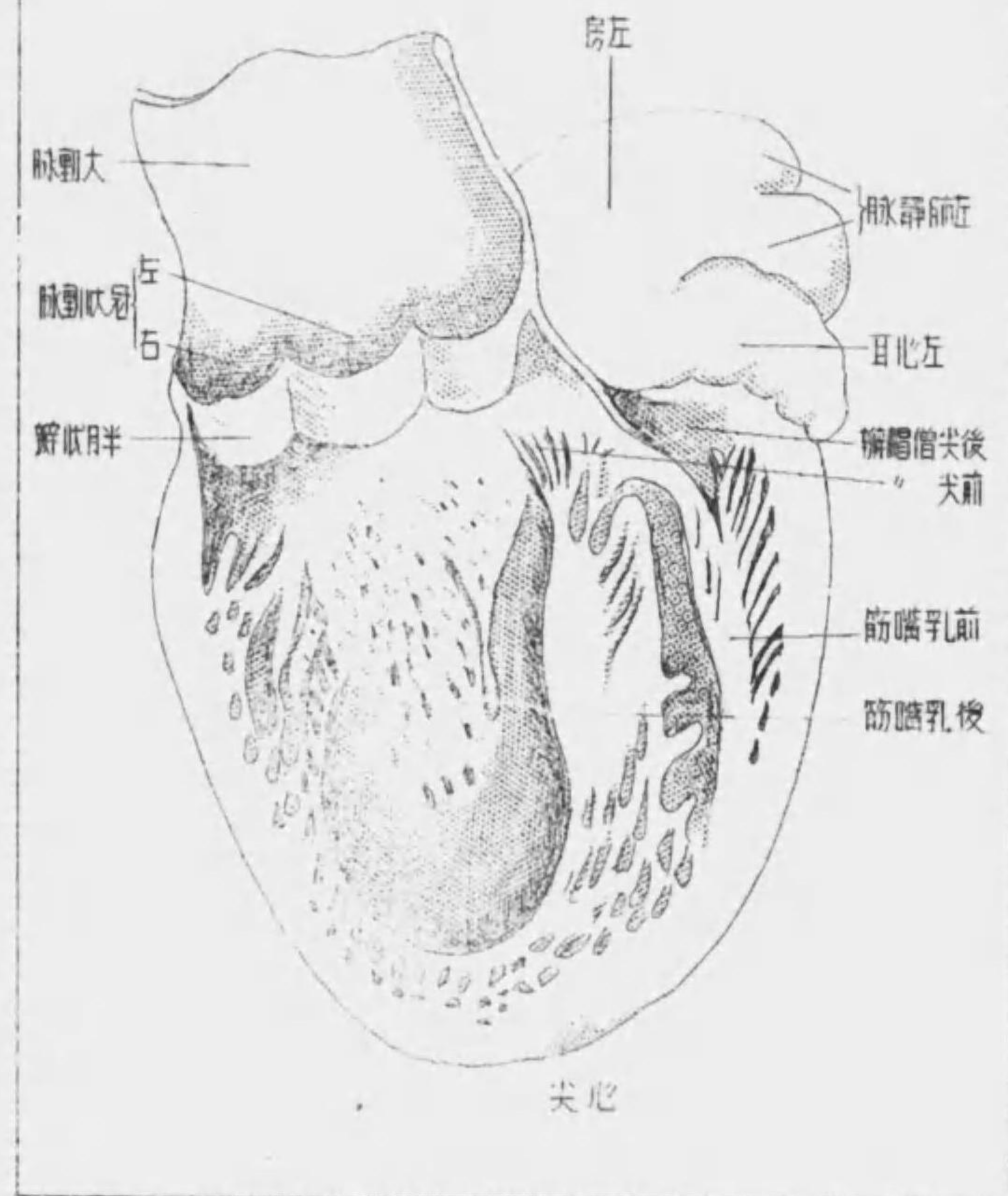
(図 八 十 百 二 第)

又示ヲ口脉靜ニ及口脉靜ニ除截ヲ房心ノ右左ヲ示ニ上直ノ溝状冠

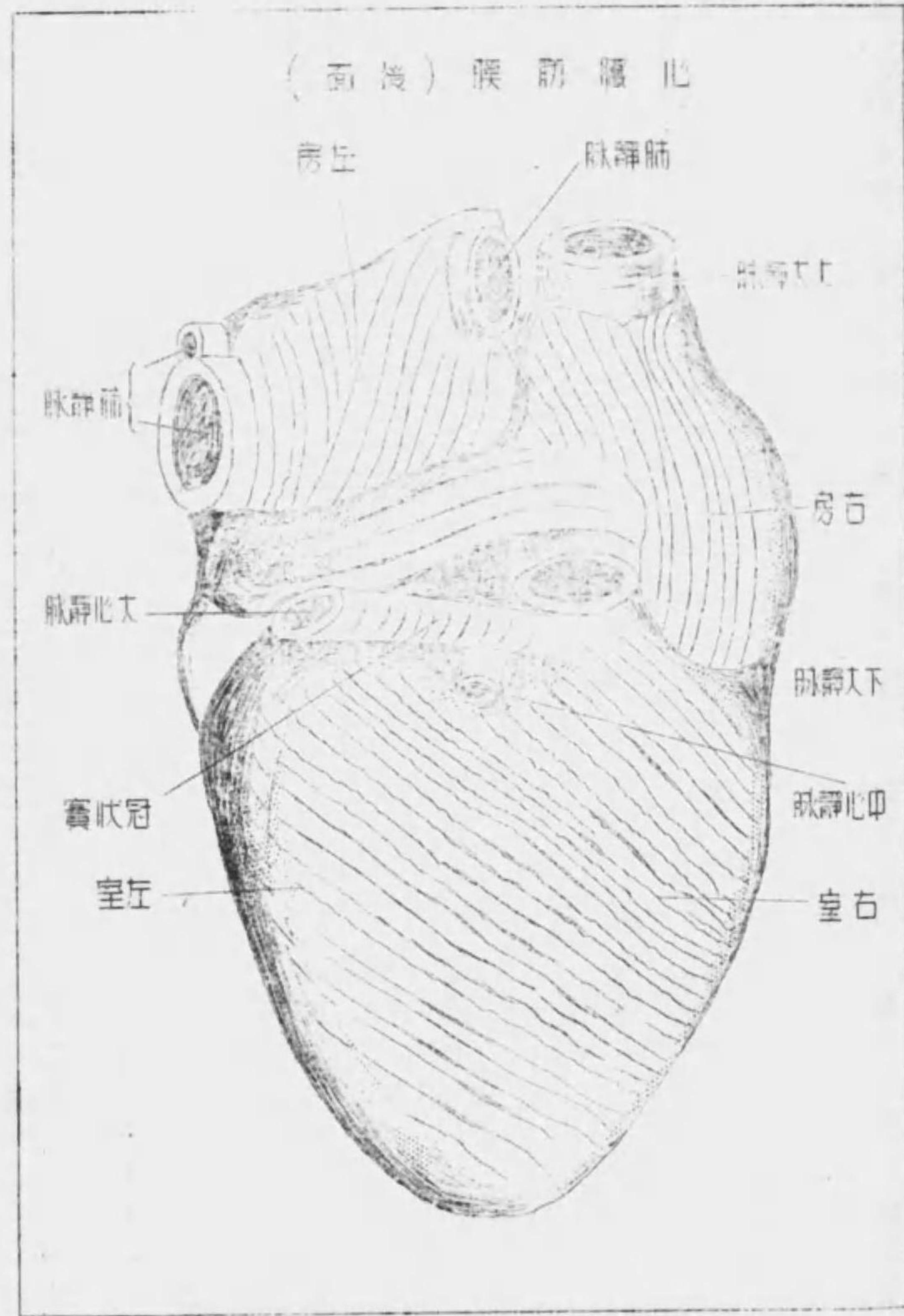


(図 七 十 百 二 第)

又示ヲ室内共ヲキ開ヲ脈動大ニ及室左



(圖九百二十第)



(二) 心臓壁

錐ハ左室ノ上右方ニ起リ肺動脈ノ後方ニ位ス、大動脈口ハ比動脈様円錐ノ尖端
 ニアリ、其壁ハ強ク三個ニ膨大ス、之ヲ大動脈球ト稱シ、三片ノ半月瓣ヲ附ス、
 此瓣ハ左右後、三瓣ニアリ、大動脈ニ向シ開故シ、ソノ遊離縁ニ同ジクアラン
 弁氏結節ヲ見ル。左房室口ハ大動脈口ノ後上方ニ位シ、二片ノ瓣ヲ附ス、是ヲ
 二尖瓣又ハ僧帽瓣ト稱シ、可成強固ニシテ其ニ繩索ニ連繫ス、室中隔ハ右室
 ニ向ヒ凸隆スルガ故ニ心室形ニシテ右室ハ半月形ヲ呈ス、

心臓壁ハ分チテ三層トス、心室内膜筋層及外膜是ナリ、
 心臓内膜ハ心筋線ノ内面ニ附着シ、結締織及弾力纖維ヨリ成ル、薄膜ニシテ心
 臓以外ニ於テハ血管内膜ニ移行ス、房室口及動脈口ニ於ケル瓣膜ハ心内膜ノ鞞
 襞ト見ナスベク、動脈口ニ於テハ動脈管壁房室口ニ於テハ纖維輪ニ附着ス、
 心臓筋膜ハ心臓壁ヲ構成スル主要部ニシテ、心室殊ニ左室ニ於テハ最も強厚ニ
 シテ、心房ニ於テハ大ニ薄弱ナリ、此面部ノ面即冠状溝ノ部分ニハ結締織ヨリ

表層及深層ノ二部ヨリ成ル。表層纖維ハ左右心房共通ニシテ之ヲ横徑ニ圍繞ス、

深層纖維ハ各房特異ニシテ係蹄狀及輪狀ノ二種アリ、係蹄狀纖維ハ心房ヲ縦ニ
 取巻キ、而端ハ纖維輪ニ附着ス。輪狀纖維ハ心耳、大靜脈、肺靜脈ノ開口部、卵円高
 弁ヲ輪狀ニ圍繞ス。

表層纖維ハ係蹄狀ノ經過ト同一ニシテ、房室口ノ纖維輪及大血管根部ヨリ起リ、
 右上方ヨリ斜ニ左下方ニ下リ心尖ニ達シ、茲ニ於テ屈曲シテ深層纖維トナリ、
 更ニ斜ニ上方ニ向フ。心尖ニ於テハ總テノ筋纖維集合シ來リテ心洞ヲ構成ス、
 中層纖維ハ以上而層ノ間ニ介在スル輪狀強層ノ纖維層ナリ。

心臓外膜ハ二板ヨリ成ル、即壁部及内臓部是ナリ、共ニ結締織ヨリ成ル、薄膜
 ニシテ対向面扁平上皮細胞ニヨリ被ル。内臓部ハ心上膜トモ云ヒ、心筋膜ニ密
 接シ心尖ヨリ起リ心室ヲ被ヒ、冠狀溝ニ達シ、次テ心房心耳及大血管ヲ別々ニ
 被包シ、上テ大動脈及肺動脈ノ分岐部ニ達シ、此ニ於テ翻転シテ壁部トナル、
 壁部ハ心臓全体ヲ寛ク包ミ、下降部ニ横隔膜ノ上面ニ達シ、其腱狀中心ニ附着
 ス。収ニ又心囊ノ再アリ。心囊ハ形円錐狀ニシテ其底ハ横隔膜ヲ覆ヒ、尖端ハ
 大動脈分岐部ニ在リ内ニ心室部ト内臓部ト同一ニ成リ、心室部ヲ覆ヒテ其底ニ注動

(圖 十 二 百 二 第)

過心ヲ即合集、維縮筋ルテ於ニ尖心

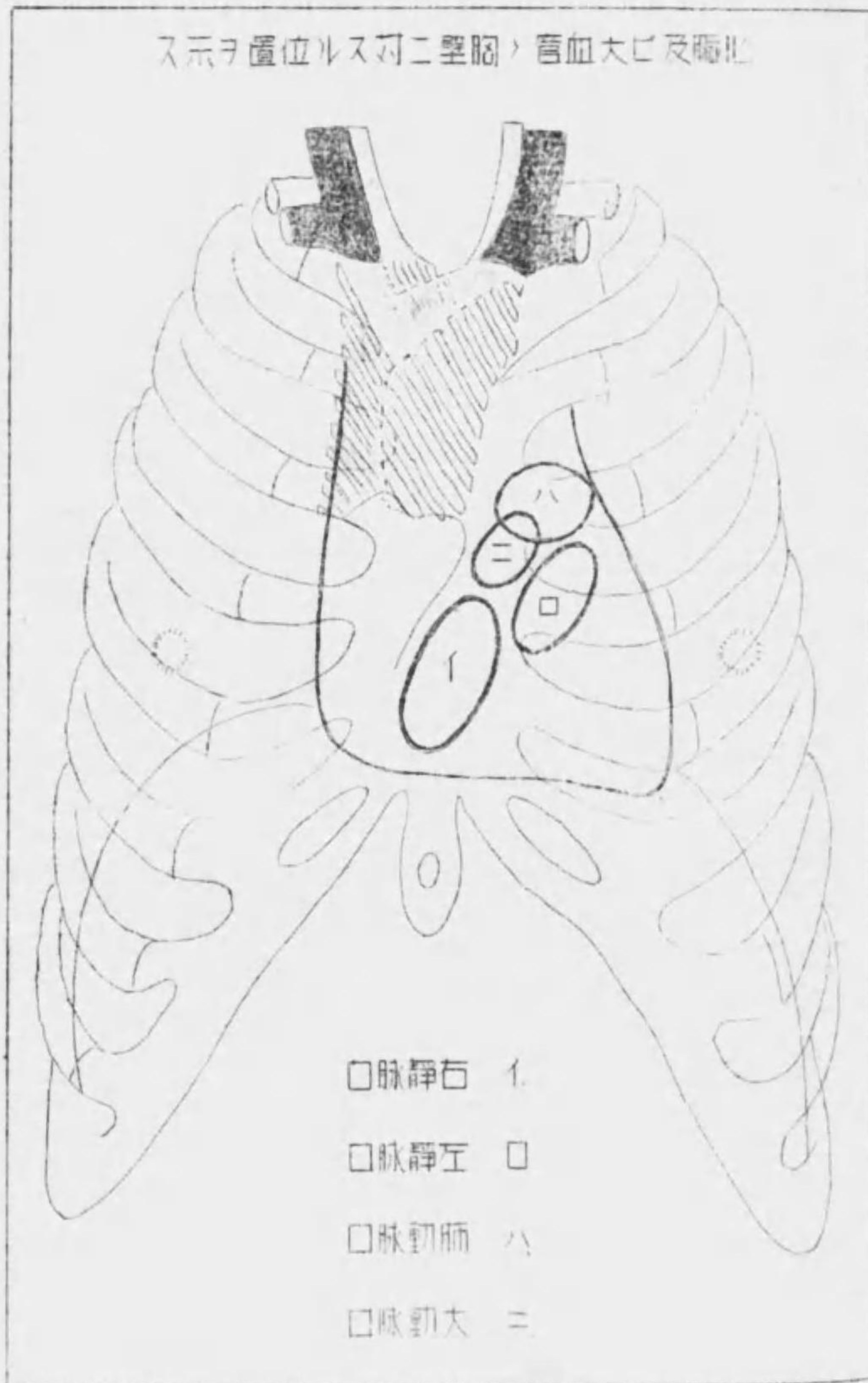


液ヲ有ス、之ヲ心囊液ト云フ、
 心囊腔中左右心房ト大動脈及
 肺動脈トノ間ニ深キ腔所アリ、
 之ヲ心囊横竇ト云フ。前壁ハ
 以上二大血管、後壁ハ左右心
 房、上壁ハ心囊外膜、下壁ハ
 心臓左右面壁ハ開放シ、心囊
 腔ト交通ス。

(三) 心臓ノ位置

(圖一十二百二第)

ス示ヲ置位ルス可ニ壁胸、管血大及脈心



- 脈靜右 1.
- 脈靜左 2
- 脈動肺 3
- 脈動大 4

心臓ハ前縦膈腔中ニ於テ心囊ニ被覆セラレ、左右両肺ノ間ニ介在シ、横隔膜ノ上面ニ在リ、而シテ前側ハ胸壁ニ向ヒ、後側ハ食管及腹部大動脈幹ニ由リテ脊柱ト分界シ、上ハ第三肋骨ノ高サヨリ、下ハ劍状突起基根ノ高ニ及ヒ、其三分ニハ正中線ヨリ左側ニ偏在ス、而シテ心ノ長軸ハ右上方ヨリ左下方ニ傾斜スルガ故ニ、上端ハ左房ニ、下端ハ右室右縁ニ適シ、上端タルヘキ右房ハ最右側ニ、又下端タル心尖ハ左側第五肋骨軟骨外端ノ内下方(第五肋骨間乳線ノ内方)ニ在リ、又右心ハ前ニ、左心ハ後ニ在リ、右室ノ小部分及左室ノ大部分ハ後下方ニ面シ、横隔膜ノ上面ニ架シテ心高ヲ造ル。右静脈口(右室口)ハ左第三肋骨間節ト右第七肋骨間節ト、結合線ニ一致シ、中心左右第五肋骨間節、結合線ニ在リ。左静脈口ハ左第三肋骨間節ニ適シ胸壁トハ遠ク距ル。肺動脈口ハ左第三肋骨間節ノ直上部ニ在リ、大動脈口ハ左第三肋骨間節ノ高サニシテ肺動脈口ノ後方ニアリ、稍右下方ニ奇ル。

附記心臓ノ大キサハ、概シテ各人ノ平拳大トス。

第一節 動脈及靜脈

血管ハ彈力ニ富ム腹管ニシテ、内腹中腹外腹ノ三層ヨリ成リ、動脈靜脈共ニ結締組織ヨリ成ル血管鞘ヲ被覆スベシ。動脈ハ主幹深ク屈曲ニアリテ動脈血ヲ含ミ、身体ノ諸組織ニ輸出給與スルモノナリ。而シテ其經過固ニ於テハ樹枝ノ如ク大小不齊ノ枝別ヲ生ジ、又枝別互ニ連合スルモノアリ之ヲ吻合ト云フ。之ニ二種アリ、即チ一小枝互ニ吻合スルヲ單吻合ト稱シ、數小枝ノ吻合ヲ網狀吻合ト云フ。所謂訓練環ヲ稱スモノナリ。然レドモ稀ニ獨立シテ他血管ト吻合セザルモノアリ。之ヲ終端動脈ト稱シ脾臟腎臟等ニ於テ見ル。

靜脈ハ靜脈血ヲ毛細管ヨリ心臓ニ還流セシムルモノニシテ、脈搏ニ比シ其壁薄ク収縮性弱シ、故ニ死体ニ於テモ血液ヲ含有ス、之ニ反シ動脈ハ其壁厚ク彈力ニ富ム故ニ、死体ニ於テハ常ニ空虚ナリ。而シテ靜脈ヲ分チテ二トス。一、深部ニ在リテ常ニ動脈ニ一致シテ走ルモノニシテ、之ヲ深靜脈、又副行靜脈ト稱シ、多クハ二條ヲ有ス。一ハ淺部皮下各締組織ニ沿テ走リ、動脈ニ關係ナキモノナリ、是ヲ淺靜脈ト云フ。又靜脈ニ於テ諸所ニ許多ノ吻合ヲナス。而シテ

動脈ト異リ諸所ニ固白ノ靜脈瓣ヲ有シ、是ニ因リテ管腔ヲ閉鎖シ、血液ノ逆流ヲ防止シスルモノナリ。毛細管ハ動脈ノ末梢靜脈ノ起始ニシテ、所謂毛細管網或ハ微絲血管網ヲナス。而シテ其管壁ハ内腹ノ一系ニシテ、極メテ菲薄ナル膜層ナリ、故ニ動脈ヨリ來ル血中ノ營養分ヲ其管壁ヲ透過セシムル組織ニ附與シ組織ヨリ老廃物ヲ收受シテ靜脈ニ漏流セシムルモノナリ。又血管壁ニハ血管ノ作用ヲ支配スル神經纖維ヲ有スルコト勿論ナルガ、稀ニ或ナル血管ニ於テハ自己ヲ營養スル血管ヲ有ス、之ヲ自養血管ト云ヒ、神經ノ其ニ外腹中ニ存在ス。

第二節 動脈

心臓ヨリハ肺動脈及大動脈ノ二條起ル。

甲 肺循環ノ動脈 肺動脈

肺動脈ハ右室ノ肺動脈口ヨリ起リ、上行大動脈幹ト交叉シテ上左方ニ昇リ、大

動脈弓ノ凹側ニ達シ、此ニ於テ分岐シテ左右ノ肺動脈トナル、茲ニ動脈様靱帶アリ、胎生ホタル氏動脈管ノ遺跡ニシテ弓ニ緊張ス。

右肺動脈ハ長クシテ上行大動脈幹及上大靜脈管ノ後側アリ、右肺門ニ達シ、三分シテ上中下肺葉ニ入ル。

左肺動脈ハ短クシテ下行大動脈幹ノ前側ニアリ、左肺門ニ達シ、上下二枝ニ分レ上下両肺葉ニ入ル。

乙 身體循環ノ動脈 大動脈

大動脈ハ左室ノ大動脈口ヨリ起リ、上前右方ニ昇リ、次テ左氣管枝ヲ越テ後左側ニ弯曲シテ所謂大動脈弓ヲ成シ、第三胸椎部ヨリ下行大動脈幹トナリ、胸椎體ノ左側ニ沿ヒテ下行シ、横隔膜ノ大動脈裂孔ヲ經テ腰椎ノ前面ヲ下リ第四腰椎ニ至リ、左右ノ總腸管動脈トナル。而シテ此經過中大動脈ヲ、上行大動脈幹大動脈弓及下行大動脈幹、三部ニ分テ、更ニ下行大動脈幹ヲ、腦部大動脈幹及腹下部大動脈幹、二部ニ分ル。

第一 上行大動脈

上行大動脈幹ハ心嚢内ニ位シ、左室ヨリ起ル、其起根部ニ三個ノ膨隆ヲ齎ス。是大動脈珠ニシテ之ヨリ右上方ニ昇リ、直ニ大動脈弓ニ移行ス、其枝別左ノ二條ヲ有ス。

右心冠狀動脈ハ右ワルサルハ氏窩ヨリ起リ、肺動脈根ト右心耳ノ間ヨリ冠狀溝ノ前側ニ沿テ後側ニ至リ、後縱溝ヲ下行シテ心尖ニ達ス。

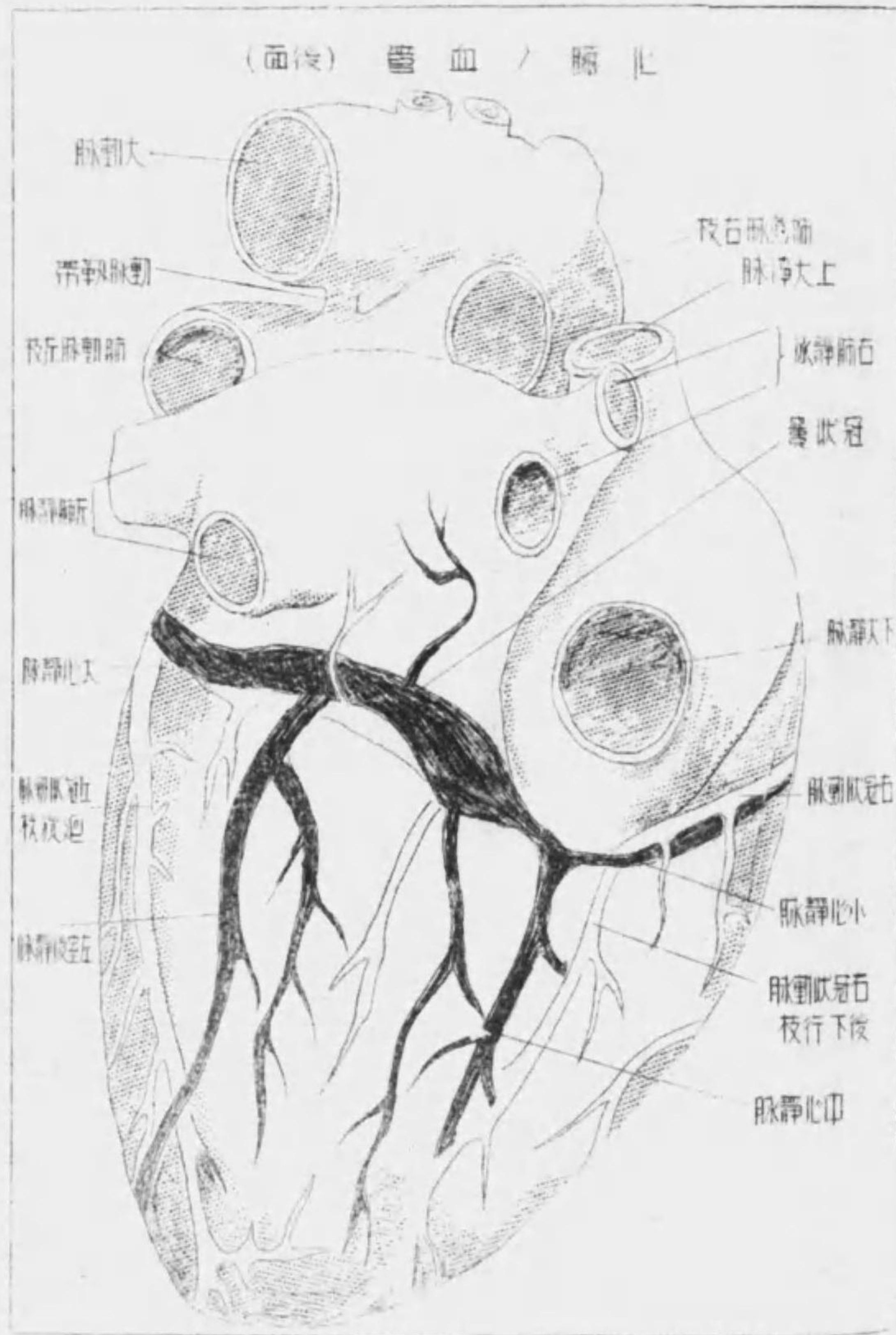
左心冠狀動脈ハ左ワルサルハ氏窩ヨリ起リ、肺動脈根ト左心耳ノ間ニ至リ直ニ前縦ノ二枝トナリ、前枝ハ縱溝ヲ下行シ右心冠狀動脈ノ末枝ト吻合シ、後枝ハ冠狀溝ノ後側ニ循ル。

第一 大動脈弓

大動脈弓ハ上行大動脈幹、一系ニシテ、胸骨劍柄ノ後側ニ斜メニ位シ第二右側胸肋關節ノ高サニ始リ、左後方ニ弯曲シテ第三胸椎體ノ左側ニ達ス、而シテ大動脈弓ノ凹側ヨリハ上氣管枝動脈起リ、左右ノ氣管枝ニ沿テ肺ノ実質ニ循ル。大動脈弓ノ凹側ノ右部ヨリ無名動脈、同左部ヨリ左總頸動脈及左鎖骨下動脈、

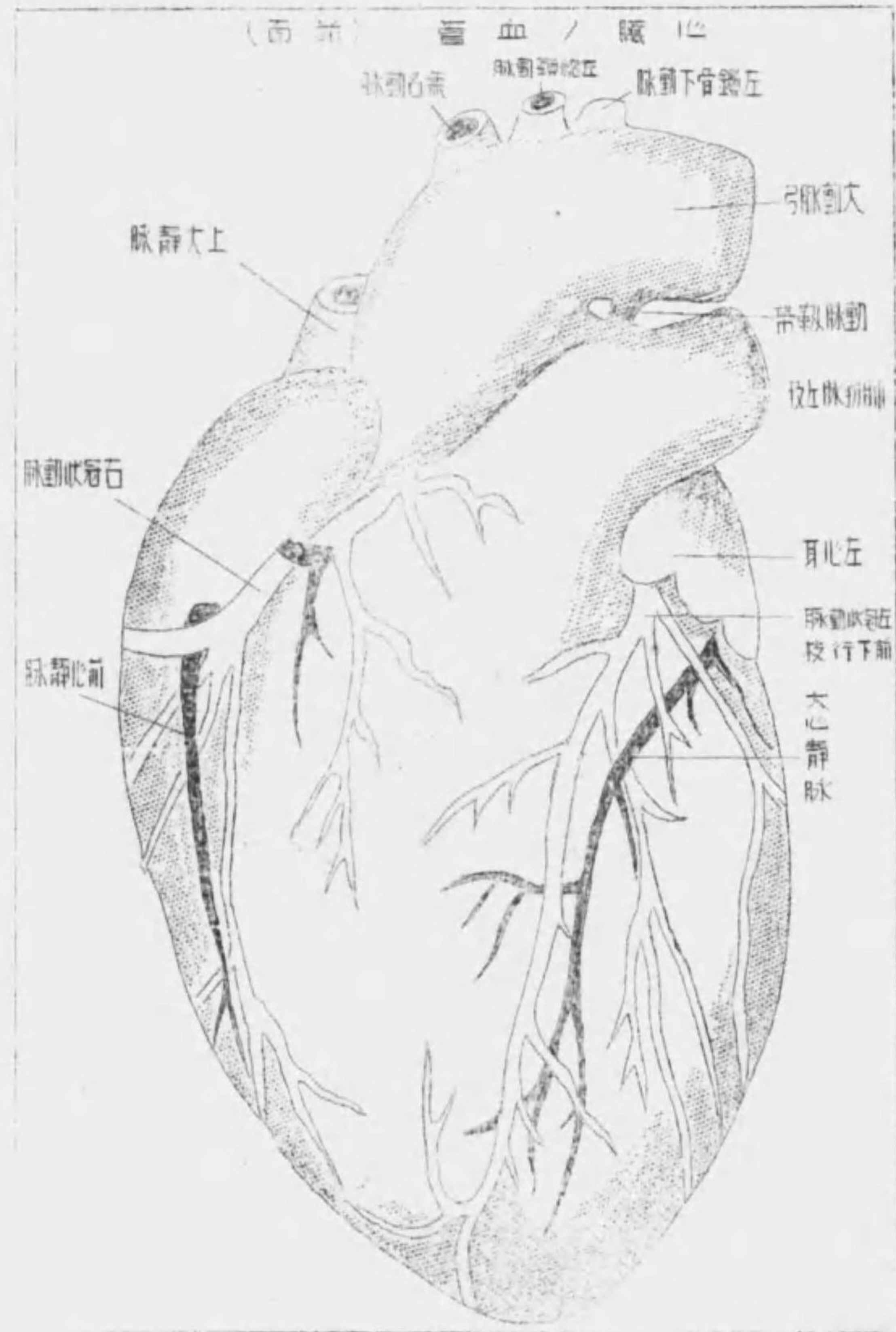
註
大動脈
右心冠
左心冠
三ツ

(圖三十二百二第)



(45C)

(圖二十二百二第)



(46C)

註上三
 高師六
 鈔乳喘
 三喘動
 後及高
 肝五動
 人前
 取
 部

總頸動脈ハ右ハ無名動脈ヨリ分レ、左ハ大動脈弓ノ凸側部ヨリ起リ、共ニ氣管及食管ノ兩側ニ沿テ稍活道ニ上行シ、上頸三角部ニ至リ中狀軟骨ノ上縁ニ付シテ、外及内頸動脈ノ二大枝ニ分岐ス、右總頸動脈ハ左總頸動脈ヨリ短ク且浅ク近セリ、

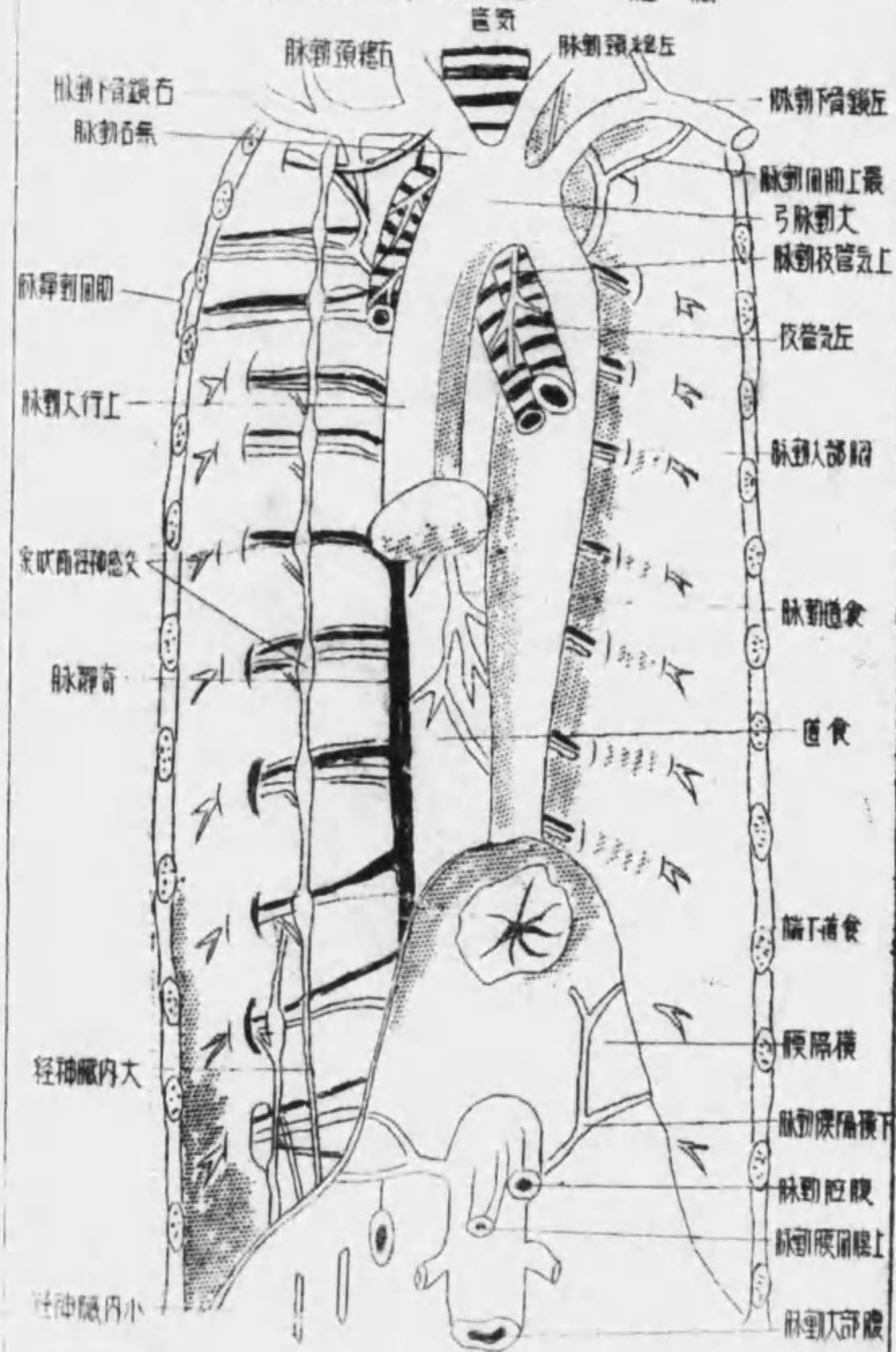
注意本動脈ハ喉頭輪狀軟骨ノ高サニ於テ、胸鎖乳疔筋ト扁桃舌骨筋ノ向ヲ開クトキハ容易ニ動脈ヲ露取シ得ヘシ、動脈ノ外面ニハ舌下神經下行枝、後面ニハ迷走神經アリ、共ニ遮ケザルベカラズ。

(一) 總頸動脈

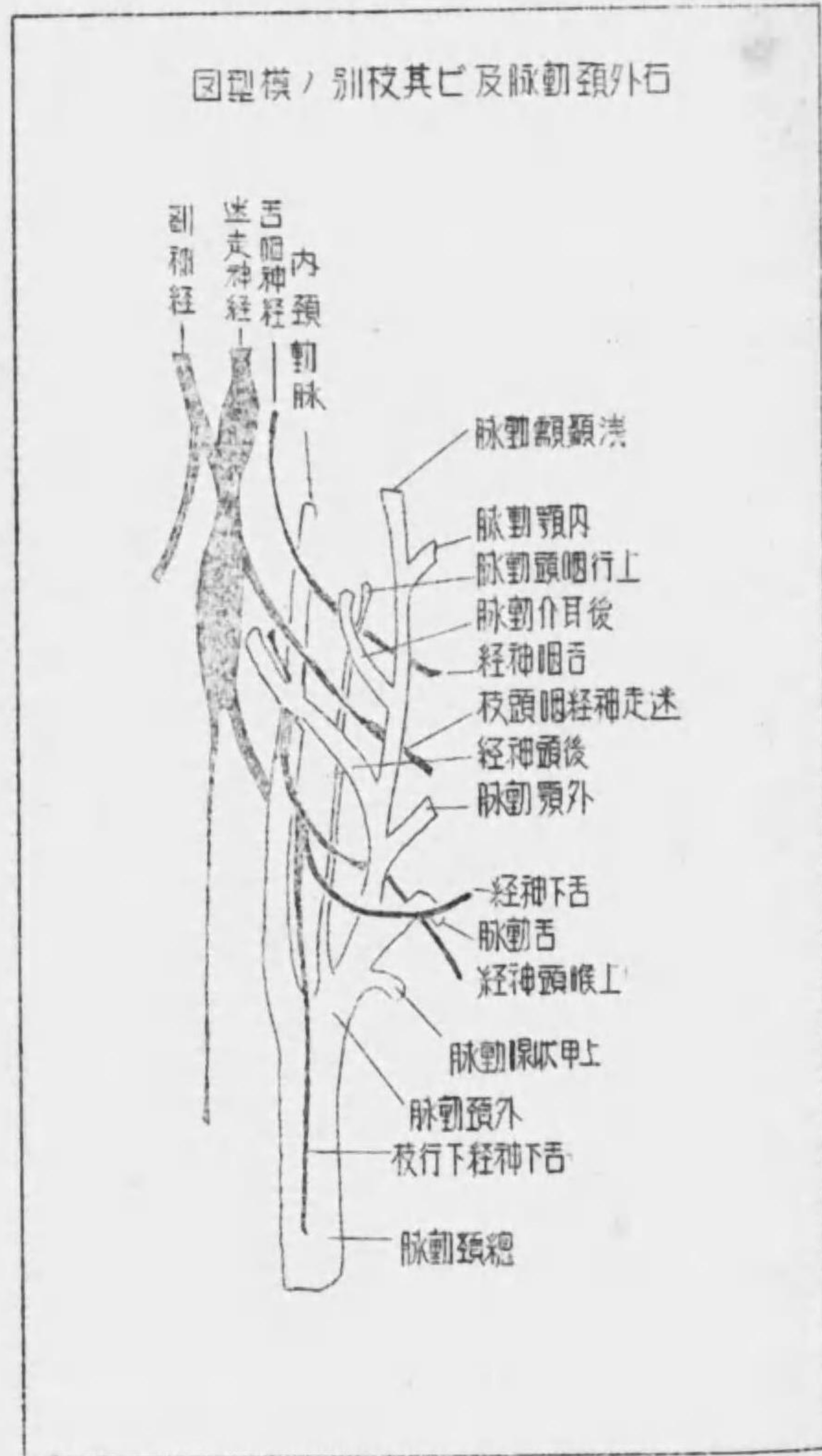
備考大動脈弓ハ氣管分岐部ノ上ニアリ、食管ノ左前方ニ於テ左肺胸膜及左肺ニ接シ、又弓ノ上縁ハ左無名靜脈ニ接ス。

ニ大枝起ル、中ニモ無名動脈ハ胸骨ノ手柄ト氣管トノ間ニ仕リテ斜ニ上右方ニ走リ、胸鎖關節ノ後側ニ至リ、分岐シテ右總頸動脈及右鎖骨下動脈ノ二管トナル。

二百二十四 胸腔ノ血管及神經

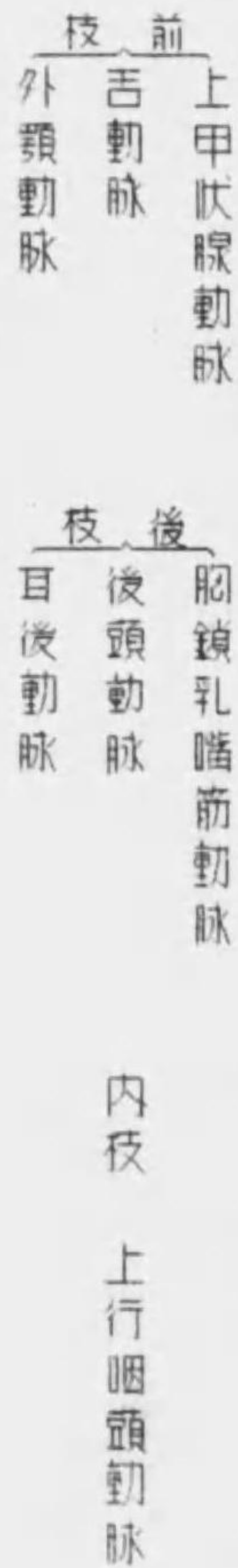


(図 五 十 二 百 二 第)



(1) 外頸動脈

外頸動脈ハ總頸動脈ヨリ分岐シ、上頸三角部ニ於テハ内頸動脈ノ稍、前方ニ在リ、而シテ二腹頸筋後腹ト莖狀舌骨筋ノ後側ヨリ上リ、下頸枝ノ後縁ニ沿ヒ上行シ、下頸骨髁狀突起ノ直下部即下頸頸ノ部ニ於テ、更ニ内頸動脈ト淺顳顬動ノ二終枝ニ分ル。其經過箇中ニ於テ左ノ枝別ヲ分岐シ顔面頸部及頭骨壁ニ分而ス。



○ 前枝

- (A) 上甲狀腺動脈 ハ外頸動脈ノ始部ヨリ起リ、下方ニ弓形ニ弯曲シテ喉頭、並ニ甲狀腺ニ循ル、枝別左ノ如シ。
- (1) 上喉頭動脈ハ中甲狀舌骨靱帯ノ側部ヲ穿通シ、喉頭、内面ニ循ル。
- (2) 筋枝ハ数條ニシテ胸鎖乳嚙筋前胸骨舌骨筋等ニ到ル。
- (3) 輪狀甲狀動脈ハ同名筋ニ分布シ他側ノ者ト弓形ノ吻合ヲナス。
- B) 舌動脈 ハ前者ノ上部ヨリ起リ、頰ル大ニシテ二腹頸筋ト莖狀舌骨筋ノ後側

圖六十二百二第

(体屍兒小) 枝分ノ脉動下骨鎖ヒ及脉動頸外端左



ヲ經テ舌骨大角ノ上部ヨリ、舌骨舌筋ノ内側ニ至リ、舌ニ循リ舌尖ニ於テ豆ニ
 吻合ス、其枝別左ノ如シ。

(1) 舌骨枝ハ細小ニシテ舌骨大角上縁ニ沿ヒ、他側ノ者ト吻合ス。

(2) 舌背動脈ハ舌背ノ後部及会厭部ニ循ル。

(3) 舌下動脈ハ顎舌骨筋ト舌下腺ト、向ヲ經テ前進シ、舌下腺口腔底粘膜炎齒齦及
 等ニ至リ、又顎舌骨筋ヲ穿過シテ頤下動脈ト吻合ス。

(4) 舌深動脈ハ舌動脈ノ末梢ニシテ舌下面ニ於テ頤舌筋ノ外面ニ沿ヒ進テ舌繫帯
 ニ至ル、此動脈ハ左右吻合スルコトナシ。

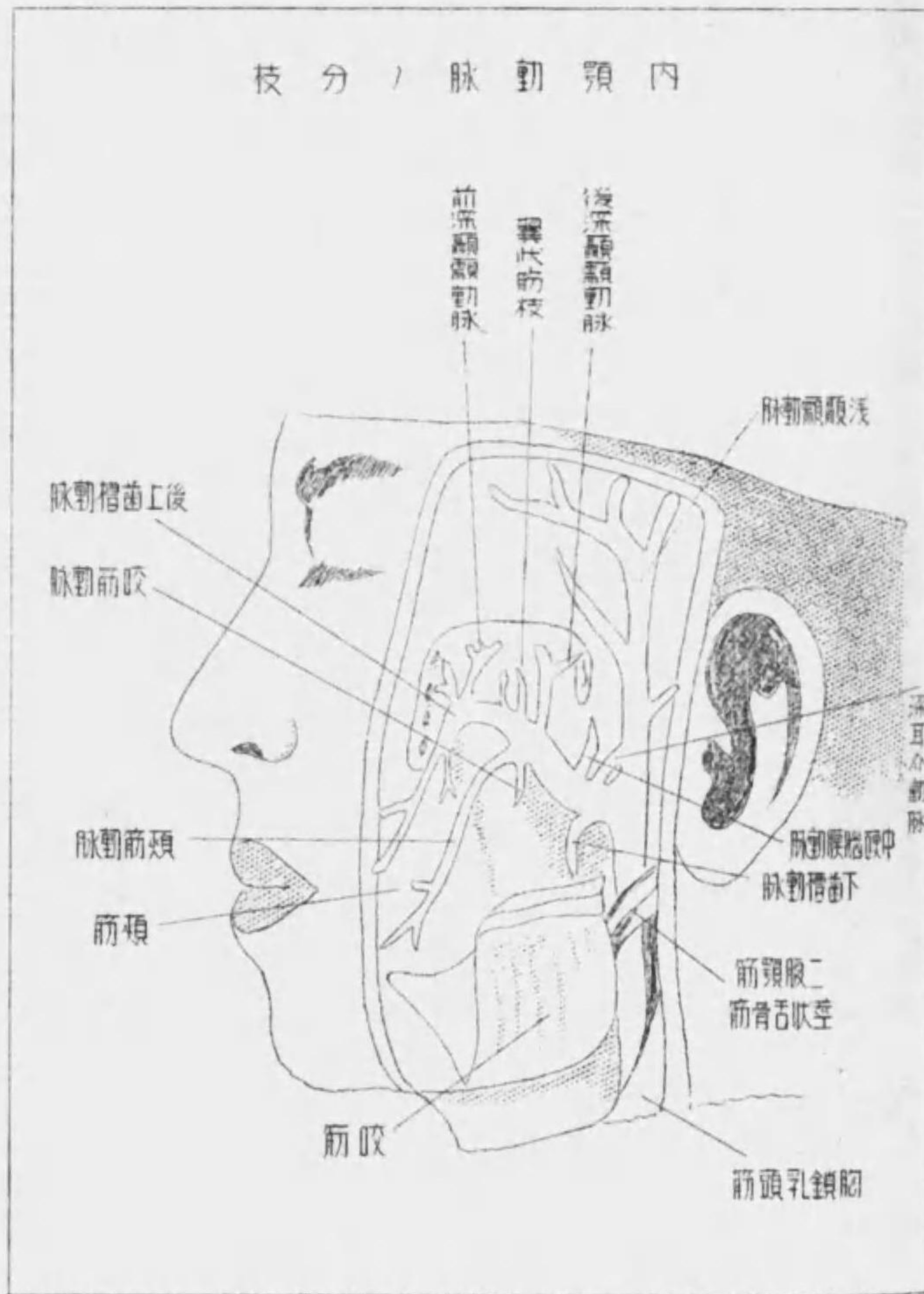
(5) 外頸動脈ハ舌動脈ノ上部ヨリ起リ、甚ダ大ニシテ二腹頸筋ト茎状舌筋ノ次
 側ヲ經テ頤下三角部ニ至リ、頤下腺ノ上部ニ沿ヒ之ニ枝別ヲ與フ。而シテ下顎
 骨内面ニ沿ヒ、咬筋附着部ノ前側ヨリ下顎骨ノ基底ヲ廻リ顔面ニ現レ、口唇鼻
 翼ノ外側ヲ經テ内眥ニ達シ、内眥動脈トナリ鼻動脈ト吻合ス、其枝別左ノ如シ。

(6) 頤下動脈ハ頤下ノ内側ニ於テ頤舌骨筋ノ下面ニ沿ヒ、前走シテ頤部ニ達シ、
 下唇及頤下部ノ筋皮膚等ニ分佈ス。

(7) 上行口蓋動脈ハ咽頭側壁ニ沿テ上行シ、口蓋帆ニ達シ、齒腭線、軟口蓋及

(二百二十八号)

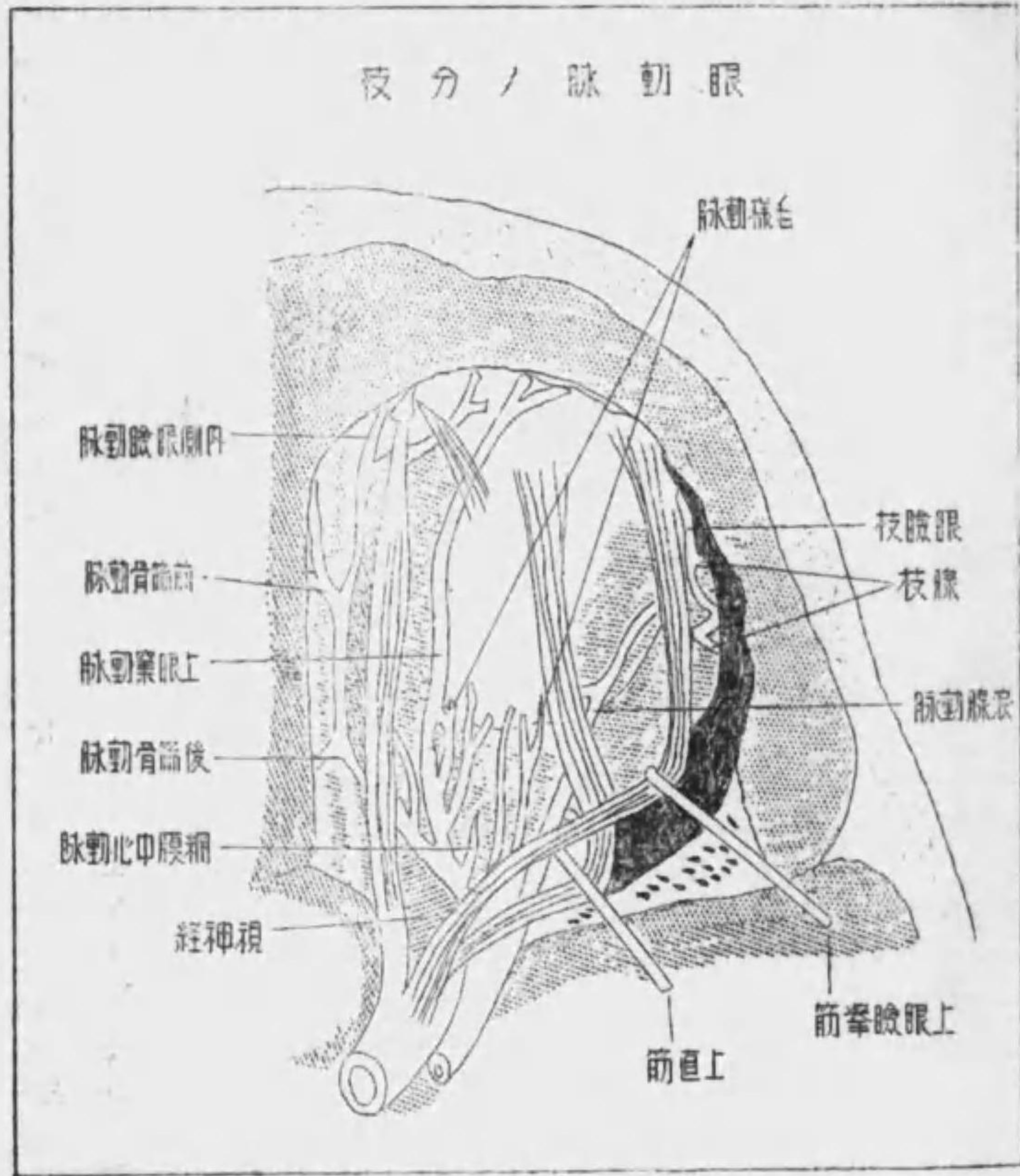
内頸動脈ノ分枝



- (1) 横顔面動脈ハ咬筋ニ沿ヒ前走シ、顔面ノ諸筋及皮膚ニ分佈ス。
- (2) 中顔動脈ハ顙骨弓ノ上部ニ於テ直ニ顙筋筋膜ヲ穿テ顙筋ニ分佈ス。
- (3) 顙骨眼筋動脈ハ顙骨弓ノ上部ヲ前走シ、眼輪匝筋ニ分佈ス。
- (4) 内頸動脈ハ下顎骨頸ノ内側ヲ通過シ、内外翼状筋ノ間ヲ前方ニ蛇行シテ終ニ翼状口蓋筋ニ達シ、其徑過間ニ於テ左ノ枝別ヲ出ス。
- (5) 耳動脈ハ外聽道ノ軟骨部ヲ穿過シ、外聽道及鼓膜ニ分佈ス。
- (6) 鼓室動脈ハグライツヒル氏破裂ヲ經テ鼓室ノ粘液膜ニ分佈ス。
- (7) 中硬腦膜動脈ハ棘起孔ヲ通過シテ頭蓋ニ入り、硬腦膜ニ分佈シ、細小枝ハヨリスダク氏管及鼓膜張筋等ニ分佈ス。
- (8) 下齒槽動脈ハ下顎骨ノ後顎骨孔ニ入り、齒槽管内ヲ通過シテ各齒根ニ小枝ヲ分チ、終枝ハ終ニ前顎骨孔ヲ出ツ、之ヲ頤動脈ト稱シ、頤部ニ分佈ス。
- (9) 筋枝ハ別ニ深顔動脈、咬筋動脈、翼状筋動脈及頤筋動脈アリ、各同名筋ニ分佈ス。
- (10) 後上齒槽動脈ハ小枝ニシテ後上齒槽管ニ入り、上顎ノ臼齒ニ分佈ス。
- (11) 下眼窩動脈ハ下眼窩管ヲ通過シテ眼窩其内ニ下眼窩管ヲ通過シテ下眼窩孔ヲ

(圖 九 十 二 百 二 第)

眼 動 脈 ノ 分 枝



入り、視神経ノ上側ニ至リ別レテ、三大枝及四小枝トナル。
 ○ 二六枝
 (1) 上眼窩動脈ハ眼窩ノ天蓋ニ沿テ前走シ上眼窩孔ヲ経テ前頭ニ分佈ス。
 (2) 鼻前頭動脈ハ眼窩ノ内壁ニ沿ッテ前走

出デ数枝トナリ、顔面ノ諸筋ニ分佈ス。其経過中下眼窩管内ニ於テ前上齒槽動脈ヲ出シ、犬齒及門齒ニ分佈ス。
 (8) 下行口蓋動脈(翼状口蓋動脈)ハ翼状口蓋管ヲ下リテ硬口蓋ニ分佈シ、尚ホ軟口蓋及扁桃腺ニ分佈ス。
 (9) 硬口蓋動脈ハ硬口蓋孔ヨリ鼻腔ニ入り、咽頭ノ上部鼻中隔及鼻ノ側壁ニ分佈ス。
 (10) ウイジアン氏動脈(翼状管動脈)ハウイジアン氏管ヲ貫ケル一小枝ニシテ、咽頭及ヨウスタク氏管ノ上部ニ分佈ス。

(2) 内 頸 動 脈

内頸動脈ハ總頸動脈ノ分レニシテ、莖状舌骨筋及莖状咽頭筋ニ由テ外頸動脈ト分界セラレ、深頸筋ノ前側ニ於テ咽頭ノ側壁ヲ上行シ、頭蓋底ニ達シ、巔靄骨岩様部ノ内頸動脈管ヲ迂迴シテ頭蓋ニ入り、硬腦膜ヲ穿過シテ腦底ニ達シ、脚膝骨体ノ内頸動脈溝ニ沿ヒ前方ニ走り、視神経孔ノ後方ニ至レバ分岐シテ眼窩ニハ眼動脈、腦底ニハ前大脳動脈及中大脳動脈ノ三大枝ヲ分佈ス。
 (A) 眼動脈ハ頭蓋腔内ニ於テ内頸動脈ヨリ分レ、視神経孔ノ外下側ヲ経テ眼窩ニ

シ、内首部ヲ出テ前頭動脈ト鼻動脈ノ二枝トナリ、前頭及鼻ノ側部ニ分佈シ、其徑過中ニ於テ篩骨蜂巢及鼻腔ニ分佈スル処ノ前及後篩骨動脈並ニ眼瞼ニ分佈スル処ノ上及下内側眼瞼動脈ヲ發生ス。

(3) 淚腺動脈ハ眼瞼ノ外壁ニ沿フテ前達シ、淚腺ニ分佈シ、其徑過中ニ於テ眼瞼ニ分佈スル処ノ上及下外側眼瞼動脈ヲ發生シ、内側ノ者ト互ニ吻合ス。

○ 四小枝

(1) 網膜中動脈ハ視神經ヲ穿過シ、其縱軸ニ沿テ網膜ニ分佈ス。

(2) 後長毛様動脈ハ常ニ左右二條アリ、共ニ視神經ノ各側ニ於テ白膜ヲ穿過シ、脈鞘膜ヲ經テ毛様体及虹彩ニ分佈ス。

(3) 後短毛様動脈ハ五六條アリテ視神經ノ周圍ニ於テ白膜ヲ穿テ、脈絡膜ニ分佈ス。

中前毛様動脈ハ筋肉ノ閉塞部ヨリ、直ニ白膜ヲ穿テ虹彩ニ分佈シ、後長毛様動脈ト共ニ大小虹彩動脈輪ヲ構成ス。

(4) 前大脳動脈ハ視神經乳ノ後側ヨリ前内方ニ向ツテ走り、大脳縦裂ノ前下端ニ於テ中ニ入リ、直ニ前方ニ与田シテ大脳ノ内面ニ分佈シ、其後裂ニ入ルニ至リ。

此ノ一枝ヲ主シ、左右互ニ交通ス、之ヲ前交通動脈ト云フ。

(5) 中大脳動脈ハ最も大ニシテ、同シク視神經乳ノ後側ヨリ、大脳ノ前頭葉ト顳葉トノ間ヲ穿リ、大脳ノ外面ニ分佈ス、其徑過中ニ於テ左ノ小枝ヲ發生ス。

(圖 十 三 百 二 第)

脈動ルケ於二医基腦



中後交面動脈ハ大隅國ノ兩側ニ沿テ後方ニ走り、後大脳動脈ト吻合ス。而シテ前後交面動脈ノ吻合ニ依リ大脳下面ノ中央ニ動脈輪ヲ造ス、之ヲウヅルリス氏動脈環ト稱ス。

(2) 脈絡網動脈ハ視神經軸ニ沿ツテ後方ニ走り、終ニ大脳測室ノ下角ニ入り脈絡網ニ分佈シ、叢ヲ形成ス。

(二) 鎖骨下動脈

鎖骨下動脈ハ上肢動脈ノ始端ニシテ、鎖骨ノ後下部ニ在リ、右ハ無名動脈ヨリ、左ハ大動脈ヨリ起リ、左右共ニ弓形ヲ形ジ、上外方ニ走り、前中斜角筋ノ間ヲ通過シ、第一肋骨ノ鎖骨下動脈溝ニ沿テ腋窩ニ達シ、夫ヨリ腋窩動脈トナル。

備考、鎖骨上筋ノ深部ニ於テ第一肋骨ニ沿ヒ、前中斜角筋ノ間ニ在リ腋窩ノ上端ニ接觸ス、而シテ動脈神経叢ハ動脈ノ上後部ニシテ鎖骨下靜脈ハ前斜角筋ノ前部ニ在リ鎖骨ニ直接ス。又右ニ於テハ下喉頭神経アリ、動脈ニ沿テ返還ス、又前斜角筋ノ前面ニハ横隔膜神経アリテ下行ス。

○ 枝 別

中後交面動脈ハ鎖骨下動脈ノ始部ノ上側ヨリ起リテ上方ニ走り、第六頸椎ノ横突起孔ヨリ頸叢ニ入ル、第一頸椎ノ横突起孔ヨリ出テ直ニ後側ニ走り、後大動脈ノ管ニ入ル、第一肋骨ノ間ニ入り、ワロル氏筋ノ下面ニ沿ヒ前縁ニ至リ、左ノ二終枝ニ分ル、之ヲ後大動脈ノ終枝ト稱シ、更ニ四支ノ小枝ヲ發生ス。而シテ其經過ニ於テ頸椎ノ諸筋ニ前後ヲ穿テハ、椎間孔ニ向テ背脊ニ背脊枝ヲ與フ。又頸蓋腔内ニ在テハ前後背脊動脈ヲ發生シ、背脊ノ上部ニ分佈ス。

○ 分 枝

- (1) 中後下小動脈ハ小脳下面ノ後部ニ分佈ス。
- (2) 内頸動脈ハ頸叢ニ至テ内頸ニ分佈ス。
- (3) 前下小動脈ハ小脳下面ノ前部ニ分佈ス。
- (4) 上小脳動脈ハ小脳上面ニ分佈ス。
- (5) 中後動脈ハ短幹ニシテ前首ノ外側ヨリ起リ直ニ四枝トナル。

(1) 下甲狀腺動脈ハ上内方ニ弯曲シ、總頸動脈ノ後側ヲ經テ甲狀腺ニ分佈シ、氣管及食管ニ小枝ヲ喫フ。

(2) 上行頂動脈ハ小枝ニシテ斜角筋及長頸筋ニ分佈ス。

(3) 浅任頂動脈ハ小枝ニシテ斜角筋ニ沿テ横行シ、僧帽筋ノ外縁ニ分佈ス。

(4) 横膈動脈ハ前外方ニ弯曲シ、鎖骨ノ後側ニ沿テ横行シ肩胛骨上縁ノ截痕ヨリ棘下窩ニ達シ、棘上筋棘下筋ニ分佈シ、迴旋肩胛動脈ト吻合ス。

(5) 後頸動脈ハ鎖骨下動脈ノ外端即前斜角筋ノ外側ヨリ起リ、膈神經叢ヲ穿過シテ後方ニ走リ、高脚管ノ上内隅ニ至リテ上下ノ二枝ニ分岐シ、上行枝ハ肩胛脊筋及夾板筋ニ、下行枝ハ菱形筋及後上鋸筋ニ分佈ス。

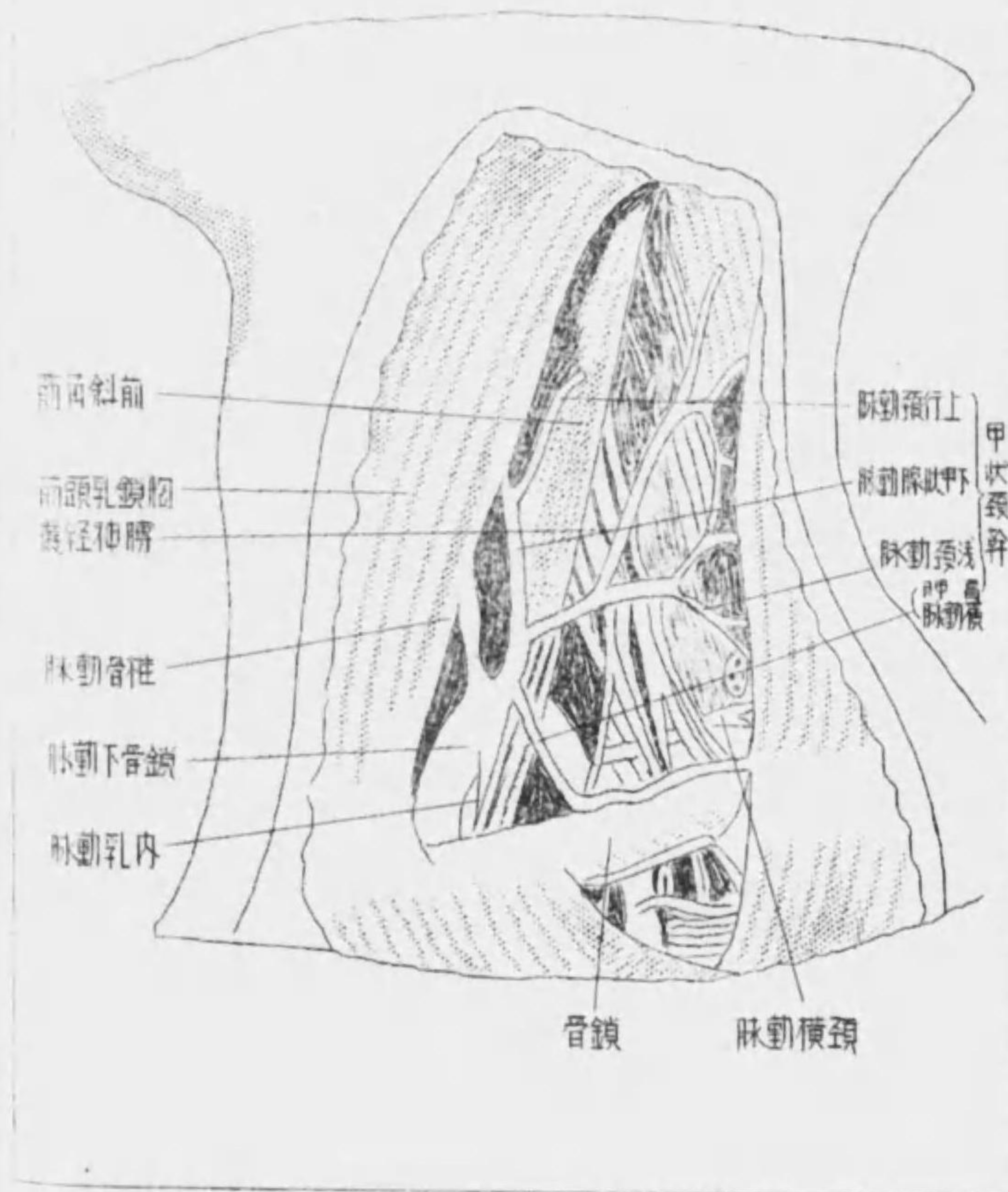
(6) 内乳動脈ハ鎖骨下動脈ノ下部ヨリ起リ、内下方ニ向ヒ胸骨ニ直ク肋軟骨ノ後面ヲ下行シテ第七肋骨ニ至リ左ノ二終枝トナル。

(7) 上腹壁動脈ハ直腹筋ノ後面ヲ下行シ之ニ枝別ヲ喫ハ、終ニ臍部ニ至テ下腹壁動脈ト吻合ス。

(8) 筋横隔動脈ハ肋軟骨ノ腔隙ニ沿テ後方ニ走リ、下五個ノ肋間腔及横膈膜ニ分佈ス。

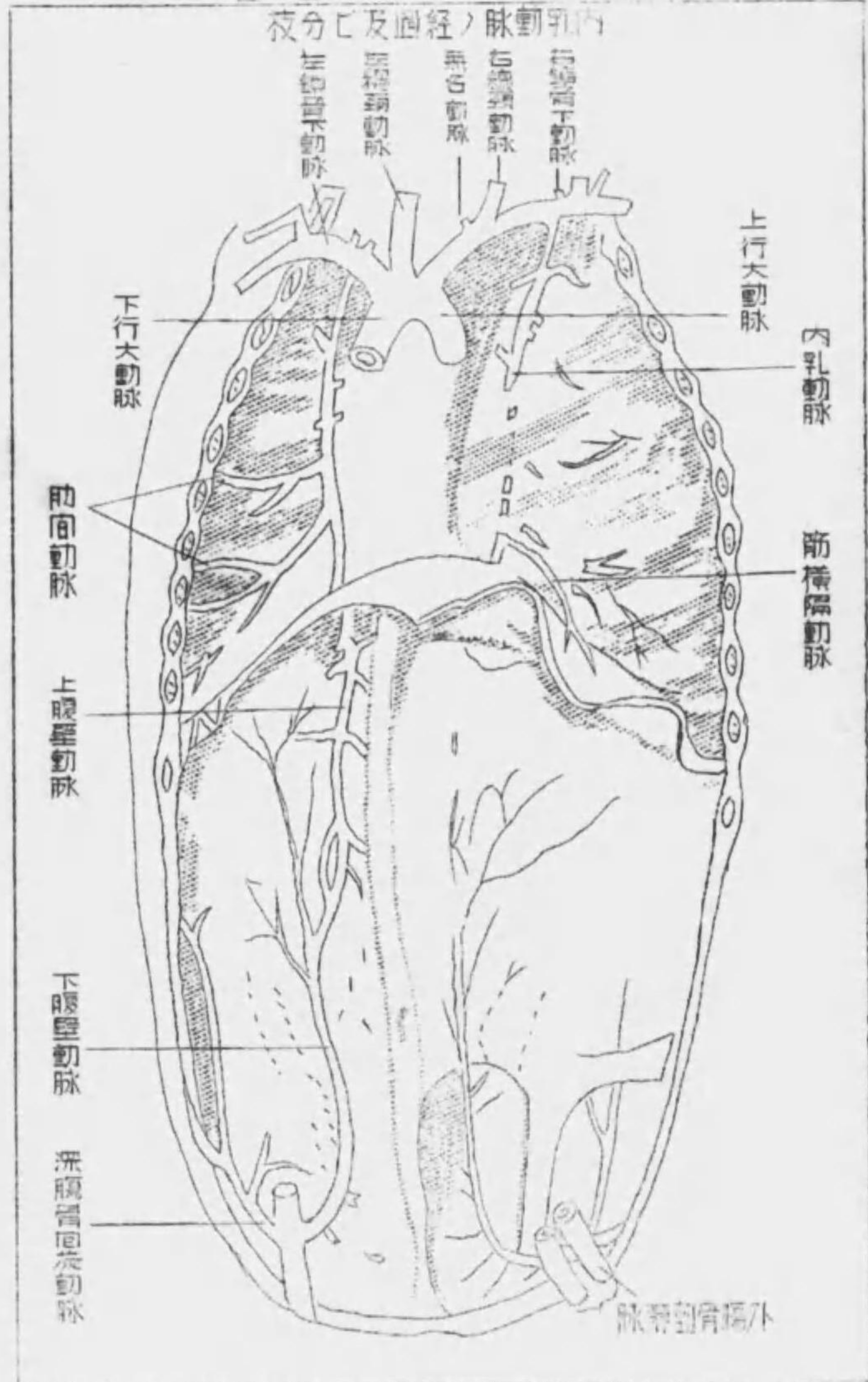
(圖 一 十 三 百 二 第)

別枝其及脈動下骨鎖



图三十三百三第

内乳动脉及分支



(图二十三第百二第)

内乳动脉及分支

